560-9
1200501511749
複写

54

名作淨瑠璃集

下

新版歌祭文

定
平安賣
書状指
大入鏡
大履
初

560-9

近代日本文學大系　第九卷目次

一谷嫩軍記……一—九一
奥州安達原……九三—一八〇
武田信玄 長尾謙信 本朝二十四孝……一八一—二七六
高師直 鹽冶判官 太平記忠臣講釋……二七七—三八二
關取千兩幟……三八三—四四六
傾城阿波の鳴門……四四七—五四七

目次

神靈矢口渡……五四九―六三四
十三鐘絹懸柳妹脊山婦女庭訓……六三五―七二九
おそめ久松新版歌祭文……七三一―七八九
伊賀越道中雙六……七九一―八九〇
姉は宮ぎの妹はしのぶ碁太平記白石噺……八九一―一〇三〇
解題……文學博士　笹川種郎……卷頭一―二

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

一谷嫩軍記

並木宗輔、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六の合作で、寶暦元年十二月十一日より大阪豐竹座にて上演。享保十五年十一月十五日より竹本座にて上演した文耕堂、長谷川千四作の『須磨都源平躑躅』は其の藍本となつてゐる。此の作の三段目までは、宗輔の遺作で、あと二段が淺田等の增補だと云ふことだ。三段目の切熊谷陣屋が最も名高く、陣屋の熊谷として知られてゐる。

熊谷次郎直實は一の谷へ出陣する命を受けて、堀川御所で源義經に謁見した。義經は須磨の陣屋にある若木の櫻をいたはれとて、『一枝を切らば一指を切るべし。』との禁制の高札を渡す。平家の公達を助けよとの謎である。直實は其の意をさとり、子息の小次郎を平敦盛の身代りにして、

其の首を打つ。義經の實驗に供へた首級も替玉の小次郎であつた。敦盛の幽靈なるものが御影の里に住む石屋彌陀六の宿に現はれて、青葉の笛を渡し、石塔をあつらへた。彌陀六は熊谷の陣屋に引き立てられて、詮議せられたが、義經はこれを幼時再生の恩人平宗清なりと知つて、報恩の意を表はす。熊谷は味氣ない人生を觀じて僧門に入る。なほこれに薩摩守忠度と岡部六彌太との物語が織り込まれたのが此の作である。

寶暦二年十一月、大阪中村十藏座で歌舞伎に上演されてゐる。

奥州安達原

竹田和泉、北窓後一、近松半二、竹本三郎兵衛の合作で、寶暦十二年九月十日より竹本座にて上演された。

安倍貞任宗任等が再度の旗擧に關する苦心に、安達原傳說及び善知鳥傳說を取合はせて、趣向を立てたものである。

安倍貞任の一子に千代童と云ふのがあつて、安倍の家臣で忠義者の善知鳥安方がこれを保護してゐた。千代童の藥の代に、安方は禁制の鶴を殺したが、外ヶ濱の南兵衛は鶴の首にかけた金札を強請に來て、遂に訴人となつて出た。併し南兵衛は貞任の弟宗任であつたので、宗任自身鶴殺しの責を負うて捕はれる。環の宮守護役の儀仗直方は腰元戀衣と小姓生駒之助とが戀のいきさつの間に環の宮を盗まれたので、切腹して其の明りを立てなければならなかつた。儀仗の娘袖萩は親の許さぬ安倍貞任の妻となつてゐたが、夫の行方を尋ねん爲、娘おきみを連れて、袖乞の姿となり、その館の外に佇んだ。雪は紛々として降つて袖打ち拂ふ陰もない。儀仗夫婦は義理のしがらみで、此の垣一重がくろがねと逢ふ事を許さぬ。こゝへ貞任が僞敕使の桂中納言敎氏と名乘つて、儀仗に切腹させる。父を殺せと迫られた袖萩も自殺する。八幡太郎は安倍兄弟を成敗せずに戰場での再會を約して、其の天空海闊の度量を見せる。安倍兄弟の母岩手御前は安達原の一つ家を住家として、剽盗を業とし、旗擧の軍用金を作つてゐる。環の宮もかれの手に依りて奪はれたのである。ところへ戀衣と生駒之助とが泊り合はす。戀衣は妊娠してゐる。環の宮の啞を平癒させるためには胎兒の血が必要であつたので、鬼婆の岩手御前は戀衣を殺したが、夫の髑髏に血がにじむのを見て、始めて我が子であると知つた。生駒之助は環の宮を奉じて歸洛する。安倍親子の苦心も水泡に歸して、再度の旗擧もならずに滅亡した。

寶暦十三年二月には、江戸森田座に於て歌舞伎に上演された。

武田信玄 長尾謙信　本朝二十四孝

近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛の作で、明和三年正月十四日、竹本座にて初興行。

武田上杉の確執、川中島の合戰をとり扱つたものには、近松門左衛門の『信州川中島合戰』があり、享保六年八月三日、竹本座で興行された。其の後、延享二年正月十二日、曾根崎の明石越後掾座にて、櫻井賴母、春草堂、戸田吾文、松岡千助、岩瀨左門、文瀾堂合作の『三軍桔梗原』が興行せられたが、本篇は此等を粉本として、更に複雜な趣向を立てたものである。

武田、上杉兩家諏訪法性の兜のことから、互に仲違ひとなつてゐたが、偶將軍義晴が鐵砲にて暗殺されたので、三年間の合戰を中止して、暗殺の曲者を穿鑿することを約し、若しこれを發見しないときは、兩家は各其の子勝賴、景勝の首を打つて渡すことを誓つた。信玄の子勝賴は、幼時より民間に育つて、花作りの蓑作と呼ばれてゐた爲に、首打たるゝ事を免れたが、其の身代りとなつた僞の勝賴は眞の勝賴を遠ざけた奸者の板倉兵部の子であつたので、はからずも首を打たれてしまつた。其の戀人に濡衣と云ふものがあつたが、これは將軍家を狙擊した齋藤道三の娘である。上杉謙信の娘八重垣姫は勝賴と許婚の仲であつたから、未來の夫の繪姿を繪に描かせて、十種香を焚いて、廻向する。濡衣も亦亡き戀人の廻向をしてゐる。そこへ蓑作の勝賴が現はれる。謙信はこれを眞の勝賴と知り、使に出して、討手を向けて殺さうとする。姫は法性の兜に祈願を凝める。狐火が燃えて奇瑞を現はす。此の曲中有名の四の切十種香の段はこれである。

甲州に世を忍んでゐた軍師山本勘助の遺子に横藏、慈悲藏といふ同胞があつたが、横藏は武田氏の家臣となり、慈悲藏は上杉氏に仕へる。兩人とも父が六韜三畧の卷を得ようと苦心する。慈悲藏は親孝行の爲に雪中に筍を掘らんとして、三畧卷を掘り當てる。二十四孝の題名はこれから出る。此の慈悲藏は直江山城守の前身である。横藏は武田氏の軍師山本勘助である。齋藤道三は關兵衛と名を改めて、義晴の後室手弱女御前を狙擊したが、娘の濡衣が其の身代りとなつた。併し遂に山本勘助の爲に看破せられて、武田上杉兩家は和解し、法性の兜は武田氏に還り、勝賴八重垣姫は祝言することとなつた。

明和四年八月大阪嵐三十郎座にて、歌舞伎に上場され、安永五年六月、江戸中村座に於ても、

亦上演された。

太平記忠臣講釋

近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛の合作で、明和三年十月十六日、竹本座にて上演。赤穗義士の復讐を取扱つたものでは『假名手本忠臣藏』につぐ名作である。

第一、鎌倉御所刃傷。第二、赤穗城中蜂合戰評定。第三、大星かほよに僞戀慕の見せかけ、義士のかため。第四、九太夫の妻お禮白川の里にて兵法指南、切、琴の段。第五、縫之助浮橋鳥邊山道行。第六、矢間重太郎の妻おりえ惣嫁の段。第七、矢間喜内の住家。第八、大星の山科の閑居、東下り。第九、天川屋義平の拷問。第十、討入。其のうち喜内の住家の段は最も名高い。縫之助浮橋の道行は、宮薗節の『鳥邊山』となつてゐる。

同年十二月、大阪嵐座で、歌舞伎に上演された。

關取千兩幟

近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛の合作で、明和四年八月四日より竹本座にて上演。

大阪の商人鶴屋淨久の一子禮三郎が、大阪屋の遊女錦木に溺れて身請けしようとする。園右衛門、九平太、善九郎等の惡人が其の錦木を奪はうと奸計をたくらむ。禮三郎の贔屓相撲岩川は金子調達に苦心してゐたが、九平太の仲間の鐵ヶ嶽と顔合はせとなると、鐵ヶ嶽は此の一番の大事な勝負に勝たせてくれれば、金をどうかしようと、それとなく仄めかす。岩川も金の爲にむざむざ勝を敵に讓らなければならなかつた。併し岩川の女房おとわが私かに其の身を賣つて、贔屓の名目で土俵の上に二百兩を岩川に贈ると披露したので、岩川は見事勝利を得た。錦木はおとわに對する義理上、また茶屋奉公をする。禮三郎は再び錦木を奪はうとした鐵ヶ嶽を斬つて、錦木と情死をしようとしたが、人々に助けられた。第二段岩川内の場が最も名高い。

明和六年、江戸森田座にて歌舞伎に上演された。

傾城阿波鳴門

近松半二、八民平七、寺田兵藏、竹田文吉、竹本三郎兵衛の合作で、明和五年六月一日より竹

本座にて上演。

近松門左衛門の『夕霧阿波鳴渡』を飜案し、これに阿波德島の城主玉木家のお家騒動を織込んだものである。玉木家の家老櫻井主膳は主家の重寶なる國次の刀を盜まれた。主膳の家來十郎兵衛は勘當されてゐたが、刀の詮議の爲に盜賊となつてゐた。藤屋伊左衛門も主膳の恩に報いんとしてゐたが、吉田屋の夕霧に溺れて金に困る。十郎兵衛は騙りをしてそれを助ける。十郎兵衛が夜盜に出てゐた留守に、故郷から娘のおつるが巡禮姿で父母を尋ねに歩いて來て、母のお弓がはしなく出逢つたが、盜賊の子と知れては、どのやうな難儀に逢ふやらも知れぬと、お弓は親子の名乘りをせずに、懇にもてなして歸してやる。それを我が子と知らずに、懷の金に目がくらみて十郎兵衛が殺す。巡禮歌の一段が最も名高い。とゞ十郎兵衛は惡家老小野田郡兵衛から寶刀を奪ひ還して、玉木家の騒動も目出度く濟む。

寛政元年六月、江戸中村座にて始めて歌舞伎に上演された。

神靈矢口渡

福内鬼外(平賀源内)の作、補助、吉田冠子、玉泉堂、吉田二一である。明和七年正月十六日より江戸外記座にて上演。

新田義貞の子義興は足利方にたぶらかされて、矢口渡で討死を遂げる。義興の子義峯は落人となつて、矢口渡にさしかゝりし時、渡守の頓兵衛は、足利方よりかねて知らせてある褒美の金に迷ひて、子分の六藏と計つて、之れを殺さうとする。頓兵衛の娘お舟は義峯の立派な男振に戀慕して、自ら身代りとなり、義峯を落す。頓兵衛は其の跡を追ひかける。お舟は痛手に屈せず、相圖の太鼓を叩く。義峯は新田の神矢、水破兵破の威力と、義興の怨靈とに呵護せられて、足利勢を打破つた。頓兵衛住家、渡し場の段などいづれも名高い。

寛政六年八月、江戸桐座にて始めて歌舞伎に上演された。

十三鐘 絹懸柳 妹脊山婦女庭訓

近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南、三好松洛の合作で、明和八年正月二十八日より竹本座にて上演。

藤原鎌足に關したものには、幸若舞の本及び古淨瑠璃に『大織冠』があり、近松門左衛門に、正德二年上演の『大織冠』があり、蘇我入鹿に關しては、寛保三年四月六日より竹本座にて上演した

竹田出雲の『王代實記　入鹿大臣皇都諍（みやこあらそひ）』がある。併し本曲は此等を藍本としたものでなく、別に趣向を立てたのである。

妹山脊山と、吉野山を隔ててゐる兩方の領主の家におこつた、憐な戀物語から場面は開けてゐる。入鹿の横暴は其の間に點綴された。鎌足の子藤原淡海は烏帽子折求女に姿を扮（やつ）して、入鹿を討たうとする。これに戀する女が二人あつた。一人は入鹿の妹橘姫、一人は杉酒屋の娘お三輪である。鎌足の臣金輪五郎今國は浪華の浦の漁師鰻七と名乘り、上使となつて入鹿の御殿に入る。求女は橘姫に入鹿を討つことを誓はせる。入鹿には不思議な因緣ありて、爪黑の鹿の血と凝著の相ある女の生血とを混じて鹿笛に注ぎ吹くときは、生體もなく眠るのである。鹿の血は既に求女の手に入つてゐる。鰻七はお三輪を凝著の相ありと見てこれを刺し、淡海の求女は此の二人の戀の力に依りて入鹿を誅戮した。杉酒屋、鰻七上使、竹に雀の段など名高い。

竹本座は豐竹座と對立して、いはん方ない繁昌であつたが、明和四年十二月操（あやつり）廢れて歌舞伎流行したるが爲、衰替の結果退轉し、翌五年六月再興したが、思はしからず、一時、豐竹座と合併興行をしたが、これも亦さん〴〵の不入にて、僅かに一回きりにて分離し、豐竹座は殆んど廢滅し、竹本座は微ながらも其の命脈を維持してゐたが、大勢の趨くところ如何ともする能はず、此に再び廢座に歸せんとしたるに、近松半二が懸命の力を以て、此の一篇を物して、山の段にかけ合ひの趣向一しほ人氣にかなひ、四五年の不入を一時に恢復し、爾後十二年間の命脈を繫いだと云ふ、殊勳の作であつた。

此の年、大阪の小川座にて始めて歌舞伎に上演された。

久松（おそめ）　新版歌祭文

近松半二の作で、安永九年九月二十八日より、竹本座にて上演。

お染久松の心中をとり扱つたものには、紀海音の『油屋（おそめ）袂の白絞』（『外題年鑑』には正德元年四月八日より豐竹座にて上演とある）、これを改作した菅專助の『語傳た袂の白絞　言傳た忍の寢油　染模樣妹脊門松』（明和四年十二月十五日より豐竹座にて上演）があるが、本篇はこれを藍本としたもので、お染久松の戲曲中最も有名なものである。

大阪瓦町の油屋と云ふ質屋の丁稚久松と云ふのは、誠は和泉國石津の家中相良丈太夫の子で、家寶吉光の短刀を紛失した咎で、家が改易となり、攝州野崎村の百姓久作の家に預けられてゐたのが、奉公にやられたのである。然るに油屋の娘お染と戀仲となつたが、お染は山賀屋へ嫁に行

かねばならず、久松も過失ありて野崎村へ歸されてゐた。久作の娘お光は久松と許嫁の仲であつたので、もう祝言も近づいてゐた。そこへ野崎の觀音詣にかこつけてお染が逢ひに來る。兩人は目顔で心中の決心を仄めかす。お光はそれと知つて、我が戀を犧牲にする。お染は舟、久松は駕籠で大阪に歸つたが、番頭善六の奸計で、久松は土藏に押籠められる。お染は土藏の外に來て、内と外とで心中を遂げる。

文化五年、大阪の小川座にて始めて歌舞伎に上演された。

伊賀越道中雙六

近松半二、近松加作の作で、天明三年四月二十七日より竹本座にて上演。

安永五年十二月二日より大阪中座にて奈河龜助の作『伊賀越乘掛合羽』と云ふ狂言が上演されて居て、翌六年四月十八日まで興行をつゞけるほど大入好評を博した。同じ外題にてこれを近松東南が淨瑠璃に綴り、同年三月二十六日から北堀江市の側芝居で上演した。これを改作したのが此の曲である。

渡邊靭負の一子志津馬は父の仇澤井股五郎の行方を尋ねてこれを討たんとする。唐木政右衛門は之れを助太刀する事を約束する。志津馬の情婦なるお米は吉原の遊女瀨川であつたが、其の父は沼津の平作である。平作の子で他に養子となつてゐた重兵衛は澤井に恩顧を受けた者であつたが、平作はこれに依りて澤井の行方を探らうとして自殺する。重兵衛はそれと行方をあかしたのを、お米が立聞きする。政右衛門は藤川の新關を間道越えに脫け出たので、捕手に追ひかけられて危い所を岡崎で山田幸兵衛に助けられる。其の幸兵衛は舊師であつた。こゝへ政右衛門の女房お谷が雪中に乞食姿で尋ねて來る。其の抱いてゐた乳呑子巳之助を幸兵衛が人質に取らうとするので、政右衛門は一思ひに刺し殺す。政右衛門は此の宿にて志津馬と相逢ひ、遂に伊賀越の報讎に終る。

姉は宮城野　妹は信夫　碁太平記白石噺

紀上太郎、烏亭焉馬等の作。安永九年正月二日より江戸外記座にて上演。各段の受持作者は次の如くである。

第一　堂上地下の主從は繩目に引かるゝ大内の鷄合　紀上太郎

第二　仇と誠の朋友は義心に別るゝ一國の首塚　容楊黛

第三　お主と家來の妹と脊は相圖に隱るゝ名鏡の奇特　焉烏旭（焉馬）
第四　孝と實義の伯父姪は愁に亂るゝ血筋の植付
第五　娑婆と冥途の壻舅は餘所に見らるゝ一樹の宿賃　紀上太郎
第六　江戸と田舍の姉妹は我が身に賣らるゝ軍用の品玉　烏亭焉馬
第七　通と野暮との客と客は意見しらるゝ曾我物語　烏亭焉馬
第八　白と黑との敵味方は位牌に紛るゝ幻術の仇討　三津瓊（紀上太郎）
第九　道行いはぬいろぎぬ　紀上太郎
第十　色と情の娘と下女は智畧にもつるゝ井出の山吹　紀上太郎
第十一　仁と禮との南北朝は武威に顯はるゝ和睦の勝鬨　紀上太郎

宮城野、信夫兩女の仇討に、由井正雪の慶安事件を織込んだものである。此の仇討の事は、『月堂見聞錄』に詳しい。

仙臺より尋ね參り候敵討の事

松平陸奥守樣御家老片倉小十郎殿の知行所の內、足立村百姓四郎左衞門と申す者、さる享保三戌年、白石と申す所にて、小十郎殿劍術の師に田邊志摩と申し、知行千石取り候仁これあり候に行逢ひ、路次の供廻りを破り候とて口論に及び、彼の四郎左衞門を志摩打捨て申され候。此の節四郎左衞門に二人の女子あり、姉十一歳、妹八歳、早速に領內を立退き、仙臺に住居致し罷在候て、陸奥守樣劍術の師に瀧本傳八郎殿と申す方へ姉妹共に奉行に罷出で、忍び〳〵に劍術を見習ひ、六ヶ年の閒、劍術修練致し候。或時女部屋に木刀の聲頻りに聞え申候閒、傳八郎不審に存じられ、伺ひ見られ候處、右二女劍術稽古仕候樣子に候。傳八郎子細を尋ね申され候へば、報讎の心入の由物語申候に付き、傳八郎感心淺からず、これより彌以て修行致させ、密々に祕傳申聞され候由、高千石、今度御加增二千石、瀧本傳八郎、名を土佐と改む。右の次第は當春陸奥守樣へ彼の二人の女が寸志を遂げさせ度と御願ひ申上げられ候につき、右敵田邊志摩と御引合はせ、仙臺の內白鳥大明神の社前宮の叶と申す處に矢來を結ひ、當卯の三月、雙方立合ひ勝負仰付けられ候。仙臺御家中衆警固檢分これあり候。姉妹志摩と數刻打合ひ、二人替る〳〵相戰ひ候て、程なく志摩を袈裟切に切付け申候。姉走り懸り留めをさし申候。殿樣御機嫌斜ならず此の女子共家中の娘に給はるべしと仰せ出され候處、二女共に堅く御辭退申上げ候て御請を申さず、父の敵志摩を打ち候事もとより罪遁れず候、願はくは如何樣共御仕置に仰せつけられ下され候樣に申上げ候へば、猶もつて皆々感心の上、瀧本氏二女に向ひ、委細樣子を申聞け候、殊に太守の御意を違背申すべきにあらず、某も時にあふ人たり、劍術の指南の恩、彼是れもつて我が申す儀背くべからずと申され候へば、漸く料簡に隨ひ納得仕候。これに依り御家老高三萬石伊達安房守へ姉娘を引取候て、手疵養生仰せつけられ候、當年十三歳。知らざる大小路權九郎殿、妹娘を引取候て、手疵養生仰せつけられ候、當年十六歳。高

此の復讎は享保八年四月のことであつたと云ふ。

此の淨瑠璃が上演された安永九年に、森田座で始めて歌舞伎に上演せられた。

左に竹田出雲以後の淨瑠璃作家二三の小傳を附記する。

三好松洛は伊豫の人で、松山城外の眞言宗願成寺の住職であつたが、還俗して竹田出雲の門人となり、合作に佳作が多い。明和八年の『妹脊山婦女庭訓』には、後見とあるが、當時七十六歳であつた。合作物には、(但し括弧内は合作者の名、竹田出雲との合作は上卷竹田出雲の條にあるからこれを省く。)

赤松圓心緑陣幕(文耕堂)
猿丸太夫鹿卷毫(文耕堂)
行平磯馴松(文耕堂、竹田正藏)
幼稚名三之助法號玄恕上人花衣いろは緣起(竹田小出雲)
圍七九郎兵衛釣船三婦一寸徳兵衛夏祭浪花鑑(並木千柳、竹田小出雲)
待賢侍從優美藏人源平布引瀧(並木千柳)
敵討襤褸錦(文耕堂)
御所櫻堀川夜討(文耕堂)
時代世話新うすゆき物語(文耕堂、小川半平、竹田小出雲)
公時老武者公平若武者丹州爺打栗(竹田小出雲)
祖父は山へ柴刈に祖母は川へ洗濯に楠昔噺(並木千柳、竹田小出雲)
源頼信源頼親文武世繼梅(並木千柳)

振袖のお乳人留袖の招婦戀女房染分手綱(吉田冠子)
敦賀の遠山花洛の鶯城名筆傾城鑑(吉田冠子、中邑潤助)

等あるが、其の近松半二との合作は、近松半二の條に讓つて置く。

文耕堂は松田和吉のことで、竹田出雲とともに其の名で、合作したものもある。合作物には、前記の外に、

三浦大助紅梅靮(長谷川千四)
須磨都源平躑躅(長谷川千四)
用明天皇職人鑑(長谷川千四)
信州姨捨山(長谷川千四)
鬼一法眼三畧卷(長谷川千四)
壇浦兜軍記(長谷川千四)

等。單獨のものには、

太平記住吉卷車還合戰櫻
應神天皇八白幡
椀久松山元日金年越

がある。

近松半二は穗積以貫の子である、以貫は俗稱以助、伊藤東涯の門人である。半二は竹田出雲の門に入りて淨瑠璃作者となり、大部分は合作であるが、一生のうちに五十四篇を作つた。天明三年二月歿した。享年五十九歳なりと云ふ。

役行者大峯櫻（竹田外記、三好松洛　吉田冠子）
女賴朝女義經伊達錦五十四郡（竹田外記、中邑潤助、三好松洛　吉田冠子）
常磐御前熊野御前姫小松子日の遊（吉田冠子、竹田小出雲、近松景鯉、三好松洛）
古追善今沙汰敵討崇禪寺馬場（竹田小出雲、竹田瀧彦、吉田冠子、三好松洛、竹土丸、北窓後一）
日高川入相花王（竹田小出雲、北窓後一、竹本三郎兵衛、二歩堂）
朝比奈藤兵衛喧嘩屋五郎右衛門極彩色娘扇（二歩堂、北窓後一、竹本三郎兵衛、三好松洛）
由良湊千軒長者（竹田小出雲、北窓後一、二歩堂、竹本三郎兵衛、三好松洛）
清水清春清水清玄花系圖都鑑（二歩軒、北窓後一、竹本三郎兵衛、三好松洛）
山城の國畜生塚（竹本三郎兵衛）
主馬判官盛久佐々木三郎盛綱傾城阿古屋の松（竹本三郎兵衛）
金毘羅御利生敵討種物語（竹本三郎兵衛）
菊池大友姻袖鏡（三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、竹田三郎兵衛）
世話言漢楚軍談（竹田外記、三好松洛　中邑潤助、吉田冠子）
愛護若名歌勝閧（竹田外記、吉田冠子　中邑潤助、三好松洛）
おまん源五兵衛さゝの三五兵衛薩摩歌妓鑑（吉田冠子、近松景鯉　竹田小出雲、三好松洛）
南朝正平四年北朝貞和五年太平記菊水五卷（竹田小出雲、二歩堂、北窓後一、竹本三郎兵衛、三好松洛）
安倍晴明倭言葉（二歩堂、北窓後一　竹本三郎兵衛、三好松洛）
源頼朝源義經古戰場鐘懸の松（二歩堂、北窓後一、竹本三郎兵衛、三好松洛）
奥州安達原（竹田和泉、北窓後一　竹本三郎兵衛）
天竺德兵衛鄕鏡（竹本三郎兵衛）
半七京羽二重娘氣質（竹本三郎兵衛）
蘭奢待新田系圖（竹田平七、竹本三郎兵衛）
武田信玄長尾謙信本朝二十四孝（三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛）
常陸帶夜啼石小夜中山鐘由來（並木永輔、三好松洛　竹田小出雲、竹田伊豆　竹田平七、竹本三郎兵衛）
聖德太子守屋大臣四天王寺雅木像（三好松洛、竹田小出雲、竹田文吉　竹本三郎兵衛、八民平七）
泉州小田居茶屋攝州天下茶屋三日太平記（三好松洛、八民平七　竹本三郎兵衛）
きのふのお初けふの德兵衛よみ讀三巴（八民平七、寺田兵藏　竹田文吾、竹本三郎兵衛）
郭の名は陸奥國の名は長門萩大名傾城敵討（近松東南、松田才二、竹本三郎兵衛）
亭主は東山殿上客は一休禪師櫻御殿五十三驛（榮善平、寺田兵藏　松田ばく、三好松洛）
時代蒔繪世話模樣いろは藏三組杯（近松金三　近松東南）
心中紙屋治兵衛（竹田文吾）
德兵衛往古曾根崎村噂
伊賀越道中雙六（近松加作）

並木宗輔は通稱松屋宗助、されば初めは並木宗助と書してゐたが、享保二十年より宗輔にあらたむ。大阪の人千柳と號し、又舍柳、市中庵の別號がある。西澤一風に學び、豐竹座の作者となり、元文五年まで作るところの淨瑠璃三十番、其のうち合作物は二十二番ある。延享二年から千

柳と稱して竹本座の座附作者となり、寶暦元年九月五十七歳にて歿した。

北條時頼記（西澤一風　安田蛙文）
攝津國長柄人柱（安田蛙文）
南都十三鐘（同　前）
藤原秀鄕俵系圖（同　前）
一休和尚蟹川新左衞門本朝檀特山（同　前）
前太平記三十九卷目源家七代集（同　前）
赤澤山伊東軍記（同　前）
小栗判官横山郡司忠臣金短冊（小川文助　安田蛙文）
那須與市西海硯（並木丈助）
萬屋助六二代裲（並木丈助）
和田合戰女舞鶴
釜淵雙級巴
奥州秀衡有髻增
清和源氏十五段（安田蛙文）
尊氏將軍二代鑑（同　前）
後三年奥州軍記（同　前）
蒲冠者藤戸合戰（同　前）
楠正成軍法實錄（同　前）
和泉國浮名溜池（同　前）
源平三鼎待賢門夜軍（同　前）
莠伶人吾妻雛形（並木丈助）
南蠻鐵後藤目貫
刈萱桑門筑紫轢（並木丈助）
安倍宗任松浦簦
丹生山田青海劍
狹夜衣鴛鴦劍翅
大和女四國女鷸山姫捨松
百合稚高麗軍記（爲永太郎兵衞　淺田一鳥）
軍法富士見西行（小川半平　竹田小出雲）
竹田出雲、三好松洛などとの合作は前に出てゐるから、これを畧する。門人に丈助、永輔があつた。丈助の『八重霞浪華濱荻』は寶延二年三月十八日、天滿北の新地の遊女かしくが兄を殺して獄門にかけられしと、長堀問屋橋材木屋濱にて大工と南新屋敷の女郎との心中と、神崎渡場にての大喧嘩と、同日の出來事なりしを取合はせて、すぐにこれを作り、二十日に外題を出し、二十六日に上演して、大當りを取り、同年七月末まで打ちつゞいて大入の興行であつた。
股野流石打眞田帶組打石橋山鎧襲（爲永太郎兵衞）
道成寺現在蛇鱗（淺田一鳥）
一谷嫩軍記（淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三　難波三藏、豐竹甚六）

解題　終

一谷嫩軍記

並木宗輔

一谷嫩軍記

第一

戰克の將は國の爪牙、犬馬の人を勞則帷蓋を以て是れを覆ふ。況んや大功の人に於てをや、重んぜずんば有るべからずと、漢書に見えしも宜なるかな。九郎判官義經兄の下知に依つて、奢る平家を討ちほろぼし、朝家を安んじ奉らんと、軍慮を促す堀川御所、日夜に評議區々なり。いで其の頃は壽永三年二月半ば、京の君の御父平大納言時忠、偷かに須磨の皇居より入來を、儲けの上座に勸め「先づ以て遠路の所御苦勞千萬。」と挨拶有れば、「されば〳〵、樣々術を以て、神璽と八咫の鏡は念なう奪ひおぶせしが、十握の御劍は安德天皇、晝夜隨身坐せば思ふに任せず、先づ二色の神寶受取り給へ。」と有りければ、謹んで重拜有り、「コハ忝き御念志、是れ偏に舅君の御働き。」と、悅喜の詞に時忠重ねて、「扨又平家の要害、嶮岨を賴みの地理陣取、中々容易の事にあらず、則ち繪圖に印せり。」と取りだし手に渡せば、逐一細見ある所へ、「五條の三位俊成卿よりのお使者、只今是れへ御出で。」と取次ぐ聲や長袖の、花の香名のみ菊の前、襠姿のつしりとたばひ頃なる白菊の、露をおびたる如く

にて、おめず臆せず打通り、大將の御座近くしとやかに手をつかへ、「わらはは五條三位が娘菊の前と申す者、父俊成は禁裏にて、千載集の役、折から旅人と覺しき者、此の歌を集に加へて給はれと一向の願ひ、見れば天晴秀逸と感じながらも、私に加へん事もさだかならず、御伺ひの爲參上。」と、入る事許り詞數いはぬ色なる戀人の、短冊御前にさし置くも、忍しやくこぼるゝ風情なり。義經も忠度の詠歌としれどさあらぬ體、手に取つて吟じらる。「さゞ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな。ハレ香ばしやあてやかや、何かは苦しかるべき。」と、賞美の詞を時忠打ちけし、「ヤァ其の歌集には入れられまじ、罷りならぬ。」と傍若無人、さゝふる詞を菊の前、「イヤ申し時忠樣、お聞きの通りあの歌は、父俊成も感心し、君も御賞美ましますを、『集に入れな。』と仰しやるは、誤りばし有つての事か、憚りながら今一度吟じかへして御評議有れ。」と、いひも切らせず、「ヤァ愚か〳〵、ソレ其の歌は薩摩守忠度、白髭明神社參の時、志賀にて詠みしは犬打つ童も知る所、元來忠度は俊成が門家、弟子ひいきに平家へ近寄り、後ぐらき此の使、追ひ返されよ。」と言ひほぐせば、菊の前詰め寄つて、「イヤ申し、弟子を贔屓に平家へ心寄するとは大切なるお詞、それには慥かな。」「ホ、證據といふは其方と薩摩守、兼てより樣子有る事知つてゐる、其の緣に俊成が平家を庇ふ所存といふが某が誤りか。」と我も平家で有りながら、前後揃はぬ詞戰ひ、義經、「暫し。」と止め給ひ、「平家方に緣有りと、一旦不審立つ上は俊成卿まで越度と成る、集に入る事難かるべし。去りながら所存あれば此の短冊、義經が預り兎も角も計らはん、此の趣を傳へられよ。」と、始終を遺が良將の、風雅の返答尤もと、時忠詞を控ふれば、力及ばず菊の前猶も摺り寄り手を支へ、「父俊成も此の秀歌惜しむ心に候へば、跡よりよきに御指圖。」と、思ひ定めし言の葉も、花に嵐の時忠に、心殘してお暇申し、五條の館へたち歸る。お次の方より、武藏國の住人、岡部六彌太忠澄、熊谷次郎直實參上と、披露を待たずたち出で、六彌太御前に手を支へ、「賴朝公より御墨付到來。」と指出し、「西國の軍數日延引に付き再三の御催促、一日も早く御出陣。」と、諫めと俱に次郎直實、「君御存じしられずや、鎌倉には佞臣多く、『義經は平大納言時忠の娘、京の君に御心を寄せられ、亡慮の方へ。』なんどと賴朝公に讒言申す族も有りと承り候へば、時移るは悪しかりなん、急ぎ御出馬然るべし。」と、詞を揃へ申しける。大將莞爾と打笑みたまひ、「ホ、兩人が諫め尤もながら、謀を帷幕の内に運らし、勝つ事を千里の外に顯はすこそ、始終の勝利たるべきなり。義經發向遲なはるは、安德天皇所持し給ふ三種の寶都へ返すを妬く思ひ、唐土天竺へも渡すか、若し海底のみくづとならば、寶祚の傳へます、日の本はくら闇、兎やせん角やと心をいため、是れにおはする平大納言時忠は、心惰弱なる御方なれば騙つて緣者と成り、賴むより早かけ入つて是れ見よ、神璽内侍所は我が手に入り、寶劒は安德帝、御身を離させ給はねば、術を以

て奪ひ返さん、要害嚴しき平家の備へ、繪圖に畫かせて案内をしる、見よ〳〵方々嶮岨を頼みの油斷を見合はせ、鵯越より眞下り、逆落しに攻め入らば、あわてふためく平家の一類、討取るは手裏に有り。」と、智仁勇備の良將の、軍慮を聞いて諸大名、はつと感ずる許りなり。「ナウ時忠卿、一旦緣を組みし上は別心なき壻舅、天下の爲の謀御心にさへ給ふな。」と、忿りなだむる頓智の詞、時忠は默然と指俯きて居たりける。義經重ねて、「ヤア誰か有る用意の制札。」「はつ。」と答へて高札さゝげ、御前に指し置けば、ずつと立つて牀の間の筒に生けたる薄櫻に、件の短冊結び付け、「いかに兩人、今度の軍は敕諚の一戰、私の趣意にあらず、六彌太は薩摩守忠度の陣へ向ひ、御願ひの此の御詠歌千載集には入れしかども、敕勘の御身なれば、名を顯はすを憚りて讀人しれずと記されし趣を演說し、集に入りたる其の印、此の短冊を結びたる山櫻を送るべし。また熊谷は搦手の、經盛敦盛固めたる、須磨の陣所へうち向ひ、若木の櫻を汝が陣屋、義經花に心をこめ、武藏坊辨慶に筆を取らせし高札、此の花江南所無なり、一枝折盜の輩に於ては、天永紅葉の例に任せ、一枝を伐らば一指を剪るべし、此の禁制の心を諭し、若木の櫻を守護せん者、熊谷ならで外になし。其の旨屹度心得よ。」と高札は直實、歌は岡部に給びければ、「はつ。」と兩人領掌し心を含む禁札の、外を和ぐ和歌の道、花を勞る大將に、實有り色有り情有り、恥有る時忠詞なく、不承々々に立上れば、二人の勇士も退出の、

底の底意を堀川や、深き惠みを汲み分けて、祝ひ壽く三重御代の春、柳櫻や松梅も、皆御慈愛に生ひ茂り、北野の社かう〳〵と、木の間〳〵に打幕の、内は男女の色はえて都ぞ春の錦なり。九郎義經の御臺京の君、幕絞らせて出で給へば、跡につき〴〵妣共、「申し〳〵姫君樣、いつにないそは〳〵と何を御覽遊ばす。」と、尋ねられて、「さればいなう、義經樣は此の社へ毎日の御詣で、則ちけふが滿ずる日と、けさ程より御參詣、お道迎への心にて、思ひ立つた此の遊山、木々の花より紅葉より、早うお顏が見たさに。」と、夫婦に成つても惚れてゐる、心は詞に出でにけり。腰元共も氣をのぼし、「うはのそらめかあれ〳〵〳〵、社の方より深編笠、立派な若衆供に連れ、當世風のやさ姿、お姫樣御らうじやれ、ようにたぢやないかいな。」と、いふ間ほどなく九郎義經天滿神へ日參に、けふ百日の滿願も、人目を忍ぶ深編笠、熊谷小次郎を供の丁稚に引連れて、徐かに下向坐せば、京の君出で向ひ、「けさとく參詣遊ばして、今比の御下向は、定めて道に面白いお心寄が有つたであろ、さすられなされた此の肌を、改めたい。」と引寄せて、太股ふつつり、「アイタ、、。」「何が痛い、えま一つ。」と、つめつた跡の紫は、ゆかしの色と見えにける。義經も御機嫌よく、「イヤ是れは迷惑、けふは遊山と聞きし故、大内は色所、嫁入ぬ先に結ばれた、よしみの人にもお出合ひかと、遠慮で態と遲うきた。」と、もたせ詞に姫君は、顏打赤め、「コレ申し、そんなさもしい濡衣の、疑ひ受ける覺えはない、わやくな事

を。」と許りにて、おろ〳〵涙に腰元共、「こりや殿様の皆御無理、何ほ程隠しても、新枕が證據人、たいそに有つたかなかつたか、お心に覺えがあろ。アレ〳〵申しお姫様の癪が上つた、療治して上げなされ、何ぞでたんのうなされたら、蟲が下ろ。」とむりやりに、押しやるもしほ行くもしほ、「小次郎來れ。」と打連れて、幕の内にぞ入り給ふ。己が心のだくぼくに、人を埋めて平山武者所、荷擔の人と出合の約束、傍に打ちし幕の紋、目覺えのめうが巴、阿房な事を企てて、我が身をしらぬ平時忠、跡に續いて梶原平次、幕より立出で小手招ぎ、一つ所へ寄り集ひ、武者所時忠にうち向ひ、「先達景高を以て御願ひ申し上げたる、彼の經盛へ遣はされし玉織姫、呼びもどして某が妻にせよとの御事、則ち今日此の所で壻舅の結びの杯、外に御相談の儀も有りと、景高の内意によつて、是れまで推參仕る。」と挨拶すれば打頷き、「ホ、貴殿を壻に取れば、此の時忠も大慶其の仔細は、義經が邪智に誇り、三種の神器を奪はん爲京の君を望みしを、何心なく緣を組み、神寶をうか〳〵と渡したる今の後悔、義經は末々まで我と同意の者にあらず、何とぞ姫を取り返し是れなる平次景高、相壻二人都の守護に居ゑおかば、禁廷は我が心の儘、此の上もなき悦び。」と、言ふに平次はしややり出で、「ナウ武者所、貴殿も我も娘達を女房に貰うて有りながら、京の君は義經が館に居らるゝ、玉織姫は經盛が西國へ連れ下れば、兩方ながらおも長な談合。」「サア其の事を此の平山も、種々工夫してゐる。」と、案じに時忠打笑ひ、「ハ、ア否其の儀は何より安い事、經盛と某頃日不仲に成りたれば、娘を戻せと言ひやらば、緣切つて戻すは治定。又京の君が事は、コレかう〳〵。」と喞けば、平次聞くよりぞく〳〵躍り、「ハ、ア奪ひ取れとはおちゐ〳〵、幸ひけふも此所へ參詣と聞きし間、首尾を窺ひ奪ひ捕らん。扨此の上は義經を亡ぼす術が肝要々々、幕の内にて熟談申さん、いざ。」と三人立上り、「サア平山殿お出でなされ。」「ア否々貴樣は姉壻マア御出で。」「イヤ先づ舅殿から御入り有れ。」と、俄に舅壻呼ばはり、水の月取る猿松共、伴ひてこそ入りにけれ。此方の幕より小次郎は、勢ひ込んでかけ出すを、「待て。」と一聲かけながら義經立出で、「ヤア〳〵小次郎、けしからぬ勢ひにて何處へ行くや。」と宣へば、「君しろしめされずや、此の前にて三人が最前よりの相談、末々君の仇するやつばら片つぱし打殺し、禍の根をはらはん。」と又かけ行くを、「ヤレ早まるな。」と引止め、「汝より義經が始終の樣子は知つたれども、軍を出さぬ其の内に、一人でも味方の勢討取るは不吉々々。又某を亡ぼさんと彼等が何程もがいても、燈心で磐石及ばぬ事、構はずとも捨て置け。」と、さも大樣に宣ふ中、幕の女中の聲々に、「なう悲しや京の君樣御自害遊ばした。」と、さけぶに義經小次郎も驚きさわぎかけ付ければ、御いたはしや京の君劍にふして事切れ給ひ、枕に殘る一通あり。こはいぶかしと押しひらき見給へば、筆の運びも定まらず、讀むも哀れの文のあや。誠に御館へ入りしより幾千代までも末かけて、御情を受け參ら

せんと悦びも仇夢となる、我が親の悪心と見るより心附々にも、聞えを憚りとく〳〵とくり返し讀み終り、「ヘッエ是非もなし、親の悪事に心を苦しめ、世を見限りしか殘念や、死なずとも濟むべきに、遉が女の細き心、傍に居ながら別れにも我が身を恥ぢて詞さへ、かはさず果てしか不便やな、短き契りで有りしよ。」と、やゝ御涙にくれ給へば、悲しさ増る腰元共、血氣にはやる小次郎も、倶に涙にくれ居たる。暫く有つて御大將、屹度思案を廻らし給ひ、「小次郎こよ。」と耳に口、コレナかう〳〵とつどつどに言ひ含め、「よく計らへ。」と許りにて、編笠に人目を忍び、館に歸らせ給ひける。直家は指心得邊を見廻し、「京の君の御立なり。」と高聲に呼ばはれば、傍の幕には平山梶原、スハよき首尾と夕暮時、頻かぶりに顔かくし、けらいに囁き頷き合ひ、手ぐすね引いて待つ所へ、腰元婢つき隨ひ、御乘物を先に立て、小次郎跡にひき添ひて、歩み來るを見るよりも、爰かしこよりむら〳〵と走せ寄つて乘物を、奪ひ捕らんとおつ取りまく。小次郎すかさず身がまへし、「ヤア慮外なるうづ蟲めら、忝くも義經公の御臺京の君の御乘物、狼藉を働いて後悔すな。」ときめ付ける。「オ、サ〳〵京の君知つてる、四の五のなしに渡さぬと、其の前髪首さらへ落す。」と罵れば、小次郎はたまり兼ね引きぬいて切りかゝるを、こなたも抜き連れ渡り合ひ、切り結ぶ太刀かげに、女中は殘らず逃げちつて、直家一人多勢を相手、受けつ流しつ戰へども、遉が小腕の言ひ甲斐なく、やう〳〵其の場を切りぬけて、乘物捨て置き逃げかへる。「サアもうよいわ長追すな、いでまあ早う戀人の、お顔を見ん。」と平次景高、乘物の戸を明けて、斯くと見るより悔りし、「ア、こりや死んでゐるわ。」「ヤア〳〵やあ。」と時忠も平山諸共さし覗き、驚く中にも時忠は、添へたる一通こりや何ぢやと、ひらき見るより又仰天、「ヤア扨最前から相談した、樣子を知つての自害と見えた、ハア。」はつと許りさしうつむき、途方にくれて居たりける。景高はくつたく顔、「エ、埒もない、是れはまあどうせうぞいなう平山殿。」「サアどうというたらどうせうぞい。申し時忠卿御思案はござりませぬか。」「ハテ思案というてどうせうぞい、得心で死んだればねだりにもやられまいし、此の儘で葬禮せう。壻の役に景高、供をして燒香めされ。」「ハイ。」「いやこれ末重殿も相壻、葬りに立たずにや居られまい、サア〳〵ござれ。」と誘はれて、平山はふしよう〴〵の佛頂面、時忠は涙ながら、「平山景高遠路墓所まで御出で御苦勞千萬。」と、禮狀文句を口上で、のべの送りの營みと、打ちつれてこそ　三重露時雨、古郷をやけ野が原と見返りて、修理大夫經盛卿一門の人々と、倶に都を落汐の搦手をかためんと、福原にとゞまりて、手配何や萱の御所、しばし假居の事しげき、中に養子の玉織姫、軍の事も色事も繪で見た許り味しらぬ、行儀育ちの器量よし、女房達と諸共に、浮世話の跡や先。越中次郎兵衛盛次が妻の裏葉、ひそ〳〵聲にて、「申し皆樣、此の亂れのない先から姫君と敦盛樣、許嫁ばかりで御祝言の遲いのは、どうした事。」と尋ぬれば、忠

清が妻の槇の尾、「サァじたい御姫様がおほこで、しかけを待つてござる故、いつまでも埒が明かぬ、ちよびくさ話しもしかけたり、人のない間にお傍へ寄つてつめつても見たり、御祝言のない先に、内證の祝言は濟む様にせにや、姫ごぜは立つ物ぢやないわいな。」と、嬲れば姫は眞請にして、「眞に疾うから然うしたら、つい夫婦になられう物、それ知らなんだそしてまあ、寢てから何といはうや。」と、袖打覆ふ其の風情、葉の裏に咲く玉椿、色を含みて可愛らし。取次の侍罷り出で、「時忠卿よりのお使者、大館玄馬殿御出で。」と、知らする聲に女房達、「ナウ申しお姫様、お里の便り殿様へ申し上げん。」と三人は、打連れてこそ入りにけれ。參議平經盛卿、時忠の使と聞き一家ながら不平の中、いかなる事か言ひ送ると、御臺諸共たち出で給ひ、しづ〳〵と座に直り、「時忠卿の御使者、是れへ通せ。」と仰せの内、頬も形も大館玄番、いかつがましく畏まり、「主人時忠申し越し候は、『先達その元へ遣はし置く玉織姫、いまだ敦盛殿との祝言も御座なき事、是れ以て互の幸ひ、存ずる旨候へば御戻し下されよ。』と主人が口上、則ち迎への乘物も、よういい致し參つたり、早く姫をお渡し有れ。」と、さも横柄にのべにける。經盛卿の詞を待たず、みだい所藤の方姫君に打向ひ、「ナウ玉織、親御から迎へにきたがいぬる氣か、いにともないか、そなたの心次第ぞ。」と、尋ね給へど姫君は、何と返答いは枕、胸も塞がる思ひにてさし俯いて詞なし。「ホ、返事のないはいにたい氣ぢやの、ァ、味氣ないは人心、ちひさい時からいつくしみ、手しほにかけ育てても、身は身で通るといふが誠、暮れかゝる平家を捨て、日の出の源氏に組し給ふ、親御に隨分孝行しや。」と、涙交りの恨みの詞、經盛卿打消して、「ハテくどくどと何を諄、源平とひき別れ、互に心よからぬ中、娘を戻せと有るこそ幸ひ。コレ〳〵玄番、『お使者の趣承知致し、則ち娘を返し申す。』と、立歸つて達すべし、其方迎へに參りし上は、此方より人に及ばず、早く姫を連れ歸れ。」と、仰せにはつと大館玄番、玉織姫の傍に寄り、「ナウ姫君何をうぢうぢ隙入り給ふ、時忠のお心は呼び戻すと其の儘嫁入りの御相談、コレお悦びなされ、其の壻殿といふは、平山武者所末重とて源氏の兵、姉壻の義經殿と肩をならべる大大名、省り者とはお前の事、サアサア早う乘物に、お乘りなされ。」とたち寄る中、姫は兎角の答へなく、ずつと寄つて玄番が刀、拔く手も見せず切り付くれば、肩先ずつぱと切り込まれ、是れはと寄るを又一太刀、うんとのつけに倒るゝを、飛びかゝつて止めの刀、さしもの經盛仰天に、藤の方は走り寄り、「オ、玉織、歴々の武士もおよばぬ手際、心の健氣、サァ〳〵こちへ。」と誘ひて、「女心のはしたなう、いうて今さら恥かしい、其の心を見る上は、ナウ申し。」「オ、成程。」と御夫婦は、點頭き合うて藤の方、「コレ玉織、和女に見せる事が有る、待つて居やや。」と、言ひ捨て一間に入り給ふ。無官大夫敦盛は、父と一所に出陣の、用意取り〳〵なる中に、母のしらせに奥の間より、御用いかにと出で給へば、跡より御臺女房達、銚

子土器携へて、君は千代ませ壻君は、三國一と祝しける。樣子しらねば敦盛は、惝りうろ〳〵あたりをながめ坐すれば、經盛は取りあへず、「ナウ敦盛卿、玉織姫と婚儀の結び、其の杯を取りあげられ姫へさして壽を。」と、聞くより染衣打笑ひ、「申し殿樣、御祝言の杯は、姫ごぜより飲み初めて、夫へさすが世上の習ひ、思召し忘れの樣に存じます、ホ、、、、。」と袖覆へば、經盛卿打點頭かせ給ひ、「ホ、女房の杯を夫へさし、壽を祝ふ下つかたの婚禮は其の通り、譯をしらねば不審は尤も、幸ひの折柄なれば語り聞かす事あり。」と、いひつゝ立つて敦盛の、御手を取り上座に直し、其の身は次に座を改め、「口外へ出さねば知る人有るまじ、そも此の敦盛卿は、我が子にて我が子にあらず、元此のみだい藤の方は、法皇に宮仕へ、御寵愛ふかうして、御胤を身にやどせしが、人の妬みの強ければ、と、先祖平忠盛へ、白河院より下されし祇園女御の例に任せ、懐胎の身を其の儘、某が宿の妻に賜はりて出生ありし此の敦盛、我が子として育てしが、院參の折毎に、人なき間にはいもが子の、歌によそへて御尋ね、淺からぬ御いつくしみ、かく由緒ある敦盛なれば、いかなる高位高官も、望みの如くなるべけれども、官位を受けては臣下の列、重ねて帝位をふむ事叶はず。かく御寵愛ふかき敦盛、まさかの時は春宮にも立ち給はん御心やと、叡慮をはかり今日まで態と官位の望みもせず、さてこそ無官大夫と呼ばせしぞや。斯く物語る上からは、其の土器は天杯同然、流れを汲んで玉織姫、三

三九度を納むべし。」と、仰せを菊のしたゞりに、千代を結びの番蝶、祝ひ納むる姫君の、心の内の嬉しさは、早う其の日の暮れたからん。經盛詞を改めて、「敦盛卿へ願ひあり、都騒動の折柄、法皇御幸の御行方は知らず、御身を殘し留めても、襲ひ來る源氏の軍兵、うきめや見せ奉らんかと心ならず一門は、必定平家滅亡にて、一門殘らず討死せば、都へ伴ひ申す人もあるまじ。御身は是れより藤の方と玉織姫を具したまひ、都はいまだ騒がしからん、暫く北嵯峨へ御入りあり、折を見合はせ法皇の御殿へ移り給ふべし。今生の對面も今日限りの經盛、暇乞に御顔ばせ見せもし見もしなされよ。」と、涙にくれて宣へば、御臺とかうの詞も涙、玉織姫女房達、驚く許りうつとりと、顔見合はせて居たりけり。敦盛大きに恐れ入り、「コハ存じ寄らぬ父の仰せ、生まれぬ先から親となり、けふまで御恩を受けし事、須彌蒼海も競べたらず。縱ひいづれの胤にもせよ、後の親こそ親ならめ。東西覺えて今日まで御意に背きし事なけれど、是れ許りは御免しあれ、一所に出陣仕り、御馬の先にて潔よう、御恩を送らせ給はれ。」と、涙にくれての御願ひ。經盛卿おし返し、「一旦の義心尤もなれども、親の恩と天子の御恩一つに言ふも恐れあり、是非御承引なきならば、法皇への申し譯、某は切腹。」と面色變れば敦盛卿、「ハ、ア謝り入り奉る、此の上は仰せに隨ひ兎も角も仕らん。」「ム、都へ歸り給はんとな、ホ、

承引あつて嬉しや〳〵、源氏の勢は丹波路と津の國の街道より、二手によすると聞き及ぶ。敵の見ぬめの浦傳ひ、難波大江の岸を越え、河内路より登り給へ早う〳〵。」畏まつて敦盛は、用意と一間へ入り給へば、「ソレ藤の方玉織も、旅の支度を急がれよ。ヤアコリヤ〳〵染衣、皆の者とり賄ひにいけいけ。」と仰せに御臺は、「サア おぢや。」と皆引連れて入り給ふ。經盛悅喜限りなく、「サア 心安し是れからは一の谷へ馳せ向ひ、持口を固めん。」と、獨言して在する所へ、内府宗盛の使として、雜兵一人馳せ來る。「經盛卿へ火急の御用。」と一通を指出せば、何事やらんと押開き、何々三くさの合戰味方敗北、是れに依つて主上をはじめ門院二位殿密かに讃岐八島の浦へおひらきあり、貴殿御船を守護との仰せによつて、迎への兵船さし遣はす、急ぎ出立あるべき由、讀みもをはらず心せき立て、「サア 事急なり猶豫ならず、かねて妻子に別れは告げる、再び逢ふも互の輪廻、此の儘に出で行かん案内せよ。」と、使を引連れ、急ぎ濱邊に出で給ふ。かくとはしらず藤の方、けふ別れてはいつか又、逢見ん事は片絲の、結び馴れにし夫婦の緣、せめて名殘を惜しまんと、座敷を密とたち出でて、「經盛卿我が夫。」と、尋ね給へど面影は、見ぬ隈々を爰かしこ、見廻す中に落ちたる一通、開き見るより悚りし、「コレ〳〵皆の衆早う〳〵、殿は出陣なされたわいの。」と、呼ばはり給ふ御聲に、玉織姫女房達、追々に走せ出で一つ所に寄り集まり、互に顔を見合はせて、呆れ果てたる許りなり。かかる折節奥庭より、聞近く聞ゆる轡の音、何事やらんと見る所に。江戸敦盛其の日の出立には、雛鶴縅うたる直垂に、鎧は緋縅同じけの、鍬形打ちたる兜を著て、二十四さいたる染羽の矢、重籐の弓を持ち、勇み進んで乘り出し給へば、玉織見るより帶引締め、小褄搔取り甲斐々々しく、長押にかけたる長刀追取り、「母樣さらば。」と庭に飛びおり、轡面に引添うたり。御臺は驚き、「マア〳〵敦盛、都へ登れと父の仰せ、其の出立は心得ず。」と、尋ね給へば、「愚かや母上、父の命に從ふは一旦の孝行、兄上達一門殘らずかばねをさらす必死の戰場、我一人都へ歸り、何面目にながらへん。是れより一谷へ馳せ行き、父に代りて陣所を固め、潔う討死して、名を後代に留むる覺悟。親に先だつ不孝の罪、御赦されて下さりませ。」と、思ひ込んだる其の有樣、母上おもはず兩手を上げ、「ヤレでかしやつた敦盛、それでこそ我が子なれ、オ、嬉しいぞや〳〵。いで餞別を祝はん。」と、召したる襠ひらりと脫ぎ、「總じて軍に立つ時は、敵に矢種を隱す爲、母衣をかけると聞き傳ふ。是れをかけて出陣しや。」と、心の内は筐ぞといはぬ情や母の衣、やなぐひに打ちかけ給へば、「ハツア 御芳志有りがたし〳〵。コレ〳〵玉織、跡に殘つて我にかはり母上に孝行あれ、戰場へ連れ行く事は叶はぬ。」と宣へば、姫はわつと泣き出し、「年月待つた夫婦の杯、かはす間もなく振捨てて、殘れとはどう慾な。私やどこまでも付いて行く、邪魔になるなら今爰で、おまへの手にかけ殺してたべ、なんぼうでも離れはせぬ。」と、鞍に取りつき鐙にすがり、

歎き慕ふぞいぢらしき。「イヤ未練なりそこ放されよ。」と、あせり給へばみだい所、「ナウ敦盛、一門の人々も皆妻や子を具し給へば大事ない、連れて出陣々々。」と、聞くより姫は有りがた涙、母の方を伏し拜み暇乞さへあら駒の、手綱に引きそひ勇み立ち、女房達も取り〳〵に、御見立て申せば敦盛卿、時刻移ると鞭ふり上げ、「然らば母上もおさらば。」「オ、さらば。」さらば〳〵の別れの聲も、母の耳にはきつと立ち、駒のいなゝき轡の音、あふり立つてぞ打たせらる。跡見送りて藤の方、こらへ〳〵し溜涙、一度にわつと聲を上げ、どうどひれふし給ふにぞ、女房達走り寄り、「如何渡らせ給ふぞ。」と、樣々いたはり參らすれば、御臺は涙の顏を上げ、「悲しい物は浮世の義理、敦盛許り此の母が、臆病に育てし故、軍にも得立たぬとさげしみが口惜しさ、討死にやる母が思ひ、十五や六の小腕といひ、稚い時から舞樂を好き、軍の事はしらぬあの子、つい殺さるゝは知れた事、鎧兜を著て出たのが、千騎萬騎を討取つて、ぶん取り高名したも同然、わけてかはいや玉織が、歌の會が香ききに行くやうに跡を追ひ、いた心根がいぢらしい。やるまいと思ひしが、夫婦となつたしるしには、一夜の枕もかはさせたく、二つには敦盛が、妹脊の緣にひかされて、軍をまどめてゐるならば、一日でも討死の、便りを遲う聞かうかと、はかない事を心の賴み、親の因果。」と許りにて、身を投げふして泣き給ふ。槇の尾裏葉染衣も、めい〳〵夫の行方まで、思ひ比べて一時に、又もや袖を絞りける。歎きの耳を驚かす、えい〳〵聲に人々は、すはや敵こそ入りたれと、御臺を奥へすゝめやり、通路の鈴の綱引きちぎり、てん手にたすきにかけ置いたる、長刀太刀小太刀を構へ、恐れげもなく待ちかけしは、遺が名におふ平内左衞門、越中かづさが妻女とは、いはねどしれてかひ〴〵し。時もあらせず入りきたるは、平山が郎等成田五郎、大勢ひき具し大音上げ、「ヤア經盛はいづくにある、主人平山武者所末重、時忠卿と相談あり、玉織姫をとり戻し、他人となつて經盛一家、討ち亡ぼせとの仰せを受け、成田五郎向うたり、急ぎ玉織姫を渡し覺悟せよ。」と、罵れば、「やア推參なる小二才め、敦盛卿の簾中に定まつた姫君樣、武者所でもむしやくしやでも、けもない〳〵やる事ならぬ、長居せば目に物見せん、早く歸れ。」と、呼ばはつたり。「ヤア延び過ぎたけんさいめ、片つぱし打殺せ。」と、下知に隨ふけらいども、抜き連れ〳〵切つて掛れば、心得多勢を相手にして、ひるまずさらず三人が、蜘手かくなは十文字、或は大げさ車切、太刀長刀の稻妻に、こりや叶はぬといふ樣な、主も家來も我一に、表をさして逃げ出づるを、遁さじやらじと　三重追うて行く。跡に御臺は、「これなうく、長追ひ無用あぶない。」と、あせりながらも油斷なく、一閒に餝りし弓と矢番ひ、たち出で給ふ折も折、取つてかへす成田五郎、かけ向ふ出合頭、切つて放せばあやまたず、胸板はつしと射ぬかれ、どうと倒れて死したるは、言ひ合はせたる如くなり。追々歸る女房達、此の體を見て、「お手がらく、あはれ成田が身の果て。」と、

どよめく所へ又むら〳〵、討ちもらされの家來共、主人の敵と込入るをイヤ面倒なと三人が、まくり立つたる太刀先に、刃向ふ者も嵐の木の葉、ちり〳〵ばつと逃げちつたり。女房達聲々に、「サア〳〵申しみだい樣、此の浦船に打乘つて、八島へ渡り殿樣に、尋ね逢はせ奉らん、又も敵のこぬ内に、いざさせ給へ。」と勇み立ち、勸め申せどつまや子の、別れおもへば便りなく、足ももつるゝ藤の方、涙に袖を染衣が、いさんで見せる心は裏葉、げに武士の女房に、敵も舌を槇の尾と、ふり返つたる女武者、みたり四人が打連れて、歩めど跡へひき戻す、濱の眞砂路つきせぬ思ひ、通ふ千鳥の浦傳ひ、船場の磯へと急ぎ行く。

第二

酒極まる時は亂る、樂しみ極まる時は悲しむとかや、二十餘年の榮華の夢、跡なく覺めて都をひき、平家の一門楯籠る、須磨の内裏の要害、前は海上はけはしき鵯越、追手は生田搦手は、一谷の山手より、浪打際まで柵ゆひ廻し、赤旗風に吹き靡かせ、參議經盛の末子無官大夫敦盛、父に代つて陣所を固め、事嚴重に見えにけり。　江戸比は彌生の初めつ方、月さへ入りて暗き夜に、熊谷が一子小次郎直家、先がけして初陣の高名を顯はさんと、出立つ姿は澤瀉を、一入摺つたる直垂に、小櫻縅の兒鎧、猪首に著なす星兜、星の光にたゞ一騎、心は剛の武者草鞋、足に任せてはやりをの、山道岩角嫌ひなく、一谷の西の木戸陣門に走りつき、一息ついて四方をながめ、「ハツア嬉しや我より一番に先がけする者もなし。跡より人のつゞかぬ中、切り入らん。」とかけ廻れど、亂杭さかもぎ隙間なく、嚴しく戸ざす陣所の門、如何はせんと見廻す内、遙かの奥に管絃の音、夜は深更に及んだり。折節山路に風もやみ、海上も波しづまれば、ぎがくのしらべ哀れげに、さも面白く聞えけり。小次郎は思はずも、心耳をすまし聞きとれて、「アツア實にも上臈都人は、情もふかく心もやさしと父母の物語、今こそ思ひ合はせたり。かかる亂れの世の中に、弓矢さけびの音はなく、絲竹の曲をしらべ、詩歌管絃を催さる、ハ、アゆかしさよ。いかなれば我々は、邪見の田舍に生まれ出で、鎧兜弓矢を取り、かくやんごとなき人々を、敵として立ち向ひ、修羅の劒をとぐ事は、淺ましさよ。」と許りにて、覺えず涙を流したり。まだうら若き小次郎が、身の程々を汲み分けて、感ずる心ぞしをらしき。後のかたに蹄の音、誰なるらんと窺ふ内、平山武者所馬上ゆゝしくかけ來り、小次郎が影見るよりも、敵か味方かいぶかしく、「何者なるぞ。」と聲かくれば、小次郎もすかし見て、「ヤア末重殿か。」「さいふ和殿は、コハ小次郎か。」と馬よりおり立ち、「フム我より先へ來る者はよもあらじと思ひしに、ホ、心がけ神妙神妙、外の人なら平山が、先陣を爭うて一番に乘り入らんが、初陣の健氣さに先陣を汝に讓る、氣遣

ひなしに切り入れ〳〵。」「イヤなう平山殿、あの管絃の音御聞きなされ。扨も雲の上人は又やさしさが違ひますの。」「イヤサ夫れを和殿は得知るまい、昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ爲方つき、櫓にて香を炷いて悠々と琴彈いて居るを見て、謀もあらんかと、我が智慧に迷うて仲達は逃げしと聞く。アレあの管絃も其の通り、何怪しむ事はない、早かけ入つて高名せよ。但し和殿が恐ろしくば、某が先陣せうか、何と〳〵。」と氣をもたされ、血氣にはやる小次郎直家、木戸口に走り寄り、門打ちたゝき大音上げ、「敵の陣へ物申さん、武藏國の住人しの黨の旗頭、熊谷次郎直實が一子同苗小次郎直家、先陣に向うたり。平家方に名ある人々出であうて勝負あれ。」と、高らかに呼ばはれば、門内も騒ぎ立ち、「すはや敵の寄せたるぞ、出で向うて討取れ。」と、木戸押しひらけば小次郎は、太刀拔きかざしかけ入るを、「ソレ遁すな。」と軍兵共、俄に騒ぐ鯨波、太刀音人聲かまびすし。平山いかゞとためらふ所へ、熊谷次郎直實、我が子の先陣心にてつし、足を空にかけきたり、「ヤア平山殿候な、倅小次郎見給はずや。」と、尋ねを待たず、「されば〳〵、最前是れへ見えし故、小次郎に色々段々あの大勢の敵の中へ、一騎打は叶はぬぞや。ひらによしに召され後詰を待つての事がよかろと、色々にいさめても、はやり切つたる若者、無二無三に切り込まれし。」と聞くより直實髪逆立ち、子を失ひし獅子の勢ひ、敵の陣へかけ入つたり。諺爰やかしこの闘のころ、聞くに平山獨りゐゐみ、「ホウ思うたつほ思うたつほ、親子共に袋の鼠、今の間に討たれをろ。日頃からあの熊谷めと六彌太めが出頭を、憎い〳〵と思うて居たに、エ、時節もあればある物、手を濡らさず風の神よりよい敵。其の上親子も剛の者、死物狂ひと働かば、よつほど敵も惱ましをろ。あらごなしさせ討死さし、其の跡へしかくれば、高名手がらは思ひの儘、うまいぞ〳〵〳〵。」と、ぞく〳〵いさみ悅ぶ所へ、木戸口にあまたの人聲、スハ敵ぞと身がまへし、窺ひ居るもくらまぎれ、熊谷次郎直實我が子を小脇にひんだかへ、陣門をずつとかけ出で、「ナウ平山殿おはするか、倅小次郎手を負うたれば、養生加へに陣所へ送らん。お手がらあれ。」と言ひ捨てて、飛ぶが如くに急ぎ行く。平山案に相違して、油斷ならずと馬引きよせ、打乘る間もなく門内より、あまたの軍兵拔きつれて、我討留めんとかけ出づれば、心得たりと拔き合はせ、受けつながしつ多勢を相手、火花をちらしていどむ内、無官大夫敦盛は、さわやかに六具をかため、駒をすゝめて乘り出し、平山を見るよりも、まつしぐらにうち寄り給へば、さしつたりと渡り合ひ、しばしはさゝへ打ち合ひしが、先を取られし武者所、殊に多勢に取りまかれ、臆病神の誘ひてや、駒の頭を引きかへし、行先しらず逃げ出せば、「ヤア汙し返せ。」と聲をかけ、いづくまでもとあふり立て、跡をしたうて、三重追うて行く。「敦盛樣ア、大夫樣いなう。此の闇いのに只お一人、あぶないわいなうお歸り。」と、いへどあてども波ちかき、磯ばたをうろ〳〵と、袖は涙の玉織姫、夫を尋ね朧夜に、

心細身の一腰かい込み、あなたへ走りこなたへ迷ひ、すまの浦邊をそこよ爰よと、尋ねさまよひ給ひけり。早しの〻めに人顔も、ほのかに見えし山道より、平山武者所、漸う逃げのびすまの浦、駒の足を休めんと暫く息をつぐうちに、玉織姫と見るよりも、やがて馬より飛んでおり、つか〳〵とたち寄つて、「コレお娘、テモよい所で出合ひました、いつぞや京で見初めてから、目の先にちらつく樣で、起きてもねても忘られず、思ひ餘つてそさまの親御、時忠殿へいうたれば、やらうと有るを幸ひに、迎へにやつた其の跡でも、ア、き娘ならじゆつながろ、マアねてからどうしてかうしてと、ほんにほんにどこもかも、木のやうになつて待つてゐたに、迎へにいた女蕃を殺し、よう待ちほうけにめさつたなう。サア乘物のかはり此の馬に乘せ、連れていんで女房にする。」と、引立つればふりはなし、「エヱあたいやらしい、親が赦そがどうせうが、敦盛樣とは二世の約束、かういふ内にも御行方を尋ね逢うて死なば一所、邪魔仕やんな。」とかけ行くをひんだかへ、「ム、敦盛を尋ぬるのか、コレなんぼ尋ねても敦盛の行方、水の底まで有所はしれぬ。」「そりやなぜに。」「オ、敦盛はたつた今、我が手にかけて討つて仕舞うた。」「ヤアなんと、敦盛樣を討つたとや、ハア。」はつと許りにどうどふし、人目もわかず聲を上げ、歎き沉ませ給ひしが、夫の敵と身構へし、切り付くる腕首摑んで、「ヤアこいつ手向ひか、モウ料簡ならぬといふ所をいはぬ。ても此の手のやはらかさ、じんじやうな事わいな、モどうもどうも、エ、武者震ひのする程どうもならぬ。コレ惡い合點ぢや、とんと心を入れかへ、俺に隨ふ氣にならしやれ、女房に持つて可愛がる。サ、どうか〳〵。」と猫なで聲。姫は怒りの涙まじり、「コリヤ世が世なら、そちが樣なむくつけな侍は、傍邊へもよせつけぬに、隨へのなびけのとは、穢らはしいいまはしい、エ、腹立や。」と又切り付くる、腕首捻ぢ上げ取つて押へ、「サア女房になるかならぬか、いやなら殺すが何と〳〵。」と、太刀抜き持つて傍若無人。「オ、殺さば殺せ畜生め、エ、誰ぞ強い人が來て、此奴を切つてくれぬか。」と、もだえ給ふぞ痛はしし。強氣の平山むつとせき上げ、「ヤア、につくい女め、なびかぬ上に色々の雜言、恥面かかされ堪忍ならぬ、生け置いて人の花と詠めさすもむやくしい、思ひ知れ。」と持つたる刀、胸板ぐつと突き通せば、あつと一聲苦しむ折から、後の方に鯨波、すは又我を追ひくるやと、駒を引寄せ飛び乘つて、逸散に其の場はるかに落ち失せけれ。謠去る程に御船を始めて、一門皆々船にうかめば、乘りおくれじと、汀に打ち寄すれば御座船も兵船も、遙かにのびたまふ。無官大夫敦盛は、道にて敵を見失ひ、御座船に馳せ付いて、父經盛に身の上を、告げしらす事ありと、須磨の磯邊へ出でられしが、船一艘も有らざれば、爲方波に駒を乘り入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。謠かかりける所に後より、熊谷次郎直實、「オ、イ〳〵。」と聲をかけ、駒をはやめて追つかけ來り、「ヤアそれへうたせたまふは平家の大將軍と見奉る、まさなうも敵にうしろを見せ

給ふか、引返して勝負あれ。斯く申す某は、武藏國の住人熊谷次郎直實、見參せん返させ給へ。」と扇を上げて指招き、「暫し〳〵。」と呼ばはつたり。敵に聲をかけられて、何か猶豫の有るべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互に打物拔きかざし、朝日にかゞやく劍の稻妻、かけ寄りかけよせちやう〳〵〳〵、てふの羽がへし諸鐙、駒の足並かつし〳〵、かしこは須磨の浦風に、鎧の袖はひらひら〳〵、むれゐる千鳥村千鳥、むら〳〵ばつと引潮に、寄せてはかへり返りては、また打ちかくる虛々實々、勝負も果てし有らざれば、いそふれ組まんと敦盛は、打物からりと投げ給へば、コハしをらしと熊谷も、太刀投げ捨てて駒を寄せ、馬上ながらむずと組む、えい〳〵〳〵の聲の內、互に鎧を踏みはづし、兩馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は、敦盛を取つて押へ、「かく御運の極まる上は、御名を名乘り直實が、高名譽れを顯はしたまへ。又今生に何事にても思ひ殘す御事あらば、必ず達し參らせん、仰せ置かれ候へ。」と、懇に申すにぞ、敦盛御聲さわやかに、「オ、優しき志、敵ながら遁れ勇士。かく情ある武士の、手にかゝり死せん事、生前の面目。戰場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知る故に思ひ置く事さらになし。去りながら忘れ難きは父母の御恩、我が討たれしと聞き給はば、さぞ御歎き思ひやる、せめて心を慰む爲、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし。我こそ參議經盛の末子、無官大夫敦盛。」と、名乘り給ひし痛はしさ。木石ならぬ熊谷も、見るめ涙にくれけるが、何思ひけんひき起し、鎧の塵をうち拂ひ〳〵、「此の君一人助けしとて、勝軍に負けもせじ。折節外に人もなし、一先髮を落ち給へ、早う〳〵。」と言ひ捨てて、たち別れんとする所に、後の山より武者所數多の軍兵、「ヤア〳〵熊谷、平家方の大將を組み敷きながら助くるは二心に紛れなし。彼奴め共に遁すな。」と聲々に罵るにぞ、熊谷はつと許り、如何はせんと默然たり。敦盛卿しとやかに、「とても遁れぬ平家の運命、こゝを助かり行先にて、下主下郎の手に掛り死恥を見せんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ。」と、西に向つて手を合はせ、御目をとぢて待ち給へば、痛はしながら熊谷は、御後にたち廻り、彌陀の利劍と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の樣なる御粧ひ、情なやむざんやと、胸も張り裂く氣遲れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、「ア、臆れしか熊谷、早々首を討たれよ。」と、捻ぢ向き給ふ御顏を、見るに目もくれ心さへ、「倅小次郎直家と申す者、ちやうど君の年恰好、今朝軍の先がけして、薄手少々負うたる故、陣屋に殘し置きたるさへ、心にかゝるは親子の中、それを思へば今爰で討ち奉らば、嘸や御父經盛卿の、歎きを思ひ過されて。」と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙にくれゐたる。「ア、愚かや直實、惡人の友を捨て、善人の敵を招けとは此の事、早首討つてなき跡の、廻向を賴むさもなくば、生害せん。」とすゝめられ、ア、是非なしとつつ立ち上り、「順緣逆緣俱に菩

提、未來は必ず一蓮託生、なむあみだ佛南無あみだ佛。」首は前にぞ落ちにける。人の見る目もはづかしと、御首をかき抱き、曇りし聲をはり上げて、「平家のかたに隱れなき、無官大夫敦盛を、熊谷次郎直實討取つたり。」と呼ばはるにぞ、磯に臥したる玉織姫、絶え入りし氣も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りしかむつくと起き、「ナウ暫し待つてたべ、敦盛樣を討つたとは、いかなる人かナウうらめしや。せめて名殘に御顏を一目見せて。」といふ聲も、深手によわる息づかひ、見るより熊谷御首携へあゆみ寄り、「敦盛をしたひ給ふはいかなる人。」と尋ぬれば、今はの苦しきこわねにて、「我こそは敦盛の妻と定まる玉織姫、お首はどこに、エ、もう目が見えぬ。」と撫で廻せば、「ム、何お目が見えぬとや、オ、いとしや〳〵。御首はコレ〳〵爰に。」と手に渡せば、わつと泣く〳〵しがみ付き、膝にのせ抱きしめて、消え入り絶え入り歎きしが、「ナウこれ敦盛樣、ァはかない姿になり給ふなう。陣屋を出でさせ給ひしより、御跡慕ひ方々と、尋ぬるうちに源氏の武士、平山武者所我を見付けて無體に戀慕、だまし討たんも女業、此のごとく手にかゝり、二人が二人で悲しいさいご。せめて別れに御顏が、見て死にたいと思へども、深手に心が引入つて、目さへ見えぬか悲しや。」と、又御首を撫でさすり、「宵の管絃の笛の時、後にとありし御詞が、今生後生の筐かや。此の世の緣こそ薄くとも、來世では末ながう、添ひとげてたべ我が夫。」と、顏にあて身に添へて、思ひの限り聲限り、なくねはすまの浦千鳥、

涙にひたす袖の海、引く潮時と引く息の、ちしごと見えて絶え果てたり。熊谷は茫然と、どちらを見てもつぼみの花、都の春よりしらぬ身の、今魂はあまさかる、鄙に下つてなき跡を、とふ人もなき須磨の浦、なみ〳〵ならぬ人々の、成り果つる身のいたはしやと、ひたんの涙にくれけるが、是非もなく〳〵玉織のなきがらをとり納め、母衣をほどいて敦盛の、御死骸をおし包み、總角取つてひき結び、手綱をたぐり結ひ付くる、鞍の鹽手やしを〳〵と、弓手に御首たづさへて、右に轡の哀れげに、檀特山のうき別れ、悉陀太子を送りたる、しやのく童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに三重歸りける。昔より爰も名におふ津の國の、兎原の里に幽なる、埴生の宿に獨居の、林は老の營みに、絲針取つて人仕事、つゞりさせてふ洗濯の、糊かい物を打つ盤の、手もとも暗き黃昏時、世のうきにいさゝめならぬ身の願ひ、しのびて人につげ櫛の、薩摩守忠度は、俊成卿の館より、須磨の陣所へ歸らんと、急ぎの道も行き暮れて、やどりもがなと爰かしこ、あれし軒端もまばらなる、ふせやの門にたち寄り給ひ、「都方より西國へ歌修行の旅の者、案内もしらぬ道に勞れ、日も暮れたれば迷惑いたす。卒爾ながらお宿の御無心、賴み入る。」と有りければ、「ハァ、いや爰は所の法度にて人宿は致さねども、我も人も行き暮れて、宿のないはなんぎな物、殊更優しき歌枕、御修行のお方と聞けば別條もあるまい。宿はせずとも、マァはひつて、たばこでも參りませ。」と、戸口を明けて、「ハァおまへ

はどうやら見た樣なお方ぢやが、オ、それよ前方都でお目にかゝつた忠度樣でござりますな。」「ム、そなたは五條の三位に居た、菊の前の乳母でないか。」「成程々々ハテめづらしや、お久しや、先づこなたへ。」と伴ひて、上座に直し手をつかへ、「マア何かさし置きお尋ね申しませうは、此の度源氏の軍勢、平家を責めんと都へ亂れ入るに付き、御一門殘らず西國へ落ちさせ給ふと承りましたが、お前許り何として今まで都にはござりました。」「ホウ其の仔細は兼てそなたもしる通り、某は俊成卿の和歌の弟子といひ、分けてしたしき中なるが、此の度師卿撰まれし千載集に、我が詠歌を加はりなば、縱ひ敵の手に掛り、かばねは野山にさらすとも、此の世の本望敷島の、道を求めしかひならん、と思ふ心の一筋に、狐川より引返し、俊成卿の館に立ち越え願ひしが、かかる時節に平家の詠歌、私に加へん事も如何と、息女を以て尋ねの爲、源氏方へ送られしが、いまだ其の沙汰なき内に、早合戰最中と聞き、心急かれてたち歸る、生田の陣所も程ちかしとは言ひながら、暮に及べば陣門も開くまじと、此の所へたち寄りしもふしぎの緣。」と宣へば、「さればわたしも稚なじみの夫が不所存、置去りにして行方知れざる折から、緣を求めて俊成樣へ乳母奉公、養君菊の前樣御成人に付きお暇申し、かゝるべき倅も有りたれど、性が惡さに勘當いたし、今獨身の貧樂と、應ぜぬ苦勞はござりませぬが、承ればお前と菊の前樣は、どうやら譯のある、ハア、いや私に御遠慮はない事、夫れに付いてお話し申す事も有れど、こりやおつての事、まあ〳〵遠路のお草臥、あれへござつてお休み。」といふもやさしき饗しに、貧家の塵も繕はぬ主が案内に打連れて、一間にこそは入り給ふ。まだ宵ながらかきくもる、空も心もくら紛れ、うそ〳〵窺ふ大男、枳殼の生垣おし破り、ぬつとはひつて上り口、納戸へしかける指足ぬき足、忍び込む間に主の林、物音聞き付けたち出でて、窺ひゐるともしすまし顏、袋に入りし一腰かい込み、そろり〳〵と表の方、出でんとするを、「コリヤ待て。」と、聲かけられて惝りし、逃げ行く所を飛びかゝり、むしやぶり付いて引戻せば、遁れんやらじとつかみ付き、引つぱる機に頰かぶり、脫げて落ちたる顏見付け、「ヤア、わりや太五平ぢやないか。」「ア、これ〳〵母ぢや人、聲高にいはしやんな、盜人を捕へて見れば我が子なりけりぢや。人がしつてはおれよりまあ、こなたの外聞が惡いわいの。」「テモさても憎やの〳〵、汝が樣な性の惡い奴が有らうか。」「ハテ有れば こそ酒も飲みます、色事はこつち任せ、三絃もちつくりかじるてや、喧嘩もめつたに後先の見えぬ事はせず、又これ〳〵も餘りにじりかすりはくひませぬわいの。ア、慮外ながら萬能に達した男。」「サア其の惡い事が積つて親に樣々難儀をかけ、妹娘を勤め奉公にやつたも皆汝ゆゑ、まだ其の上にうはぬりかけ、盜みする樣に成つたは、よく〳〵因果な生まれ性。そしてまあ外でも有る事か、親の内へ盜みにはひるとは。」「ア、これ〳〵、此方もほんに年に似合はぬまだな事いはしやるわいの。コレ

他人の所へはひるとの、忽ち此の首がござらぬわいの。そこで若し見付けられても命に氣遣ひのない樣に、高をくゝつて親の内へはひつたは、我が子ながらもァ、發明な者ぢやと譽めてはくれいで、何ぢややらぐど〳〵〳〵と、愚癡な事許りいはしやるわいの。コレそんな事聞きや氣が盡きます。」と、いひつゝ腰のすつぽんから、有りあふ茶椀へどぶ〳〵〳〵。「ソレそれ〳〵其の酒が止まぬから發つて横著な氣も出るわい。コリヤやい、見るかげもない此の母がな、人仕事して漸うと、其の日を送ればいかな〳〵、一錢の貯へも。」「サァ有つてたまる物かいの、ない事はおれがよう知つてゐる、ぢやによつて錢銀の望みはない、コレ此の一腰がほしさに。」「イヤそりやならぬ。」「といはしやるは、エ、親父殿が殘し置かれた重代といふ事か。サァそれぢやによつてよう切れうと思うて盗む心は、商ひせうにも資本はなし、仕覺えた職もなければ、人足廻しの茂次兵衛所にかゝつて居て、歩荷持しても儲けにくい物は錢ぢや。夫れに毎日飯代を拂はにやならず、三文でも餘つた時は、かたかはくんでやつてのける。是れぢや濟まぬと思ふから、ふつと氣の付いたは、今源平軍の中、うそ〳〵と見廻つて拾ひ首でもしたら、知行に成るまい物でもないと、思ひ付きは付いても、是れも丸腰ではならぬ商賣。夫れで此の刃物を盗むとはいふ物の、親の物は子の物ぢや、コリヤ貰ひますぞや。」「アレまだのぶとい事許り、子なればやれど、わりや勘當したりや他人ぢやわい。」「そんなら借ります。」「イヤならぬ。」と、せり合ふ中へによつとくる、人足廻しの茂次兵衛が、「ハァ太五平爰にか、ばさま何やらせり合はしやるが、ァ、扨は勘當の詫を聞くまいといふ事か。」「イヤなう詫所ぢやござらぬ、やつぱり性根が。」「ァ、コレ〳〵直らぬとはいはれまい、おれが世話にしてからめつきりとよう成りましたぞや。もう料簡してやらつしやれ。」「コリヤ〳〵太五平、惘乎としてゐる所ぢやない、此の度の軍に付いて弓持の槍持のと大分人夫が要るゆゑ、それ〴〵の人をせんさくしてやつたが、まだ籏持がたらぬ故、そちをやらうと思うて一遍尋ねた。外の事よりしんどうはせいで、マァ賃がよいがいかぬか。」と聞いて林が早氣遣ひ、「賃がようても軍場は命がけ、こりやよしにしたらよかろ。」「ハテやくたいもない、高が命に氣遣ひがあれば、雇はれる者は一人もござらぬ、彼方の手人と違うて、道具持ちは切合の勝負はせず、若し流矢でもくれば楯の後へちやつと隱れる、婆樣えいか、槍長刀がひらめけば、人の後へちやつとかゞむ、とかくちらほら氣轉きかして立廻れば、怪我する事は微塵もない、ほんのこけしらずといふ物ぢや。其の段は此の茂次兵衛が受合、コレ卽ち先樣からきた、丈夫な裝束見せましよ。」と、風呂敷ほどきとり出すは、雜兵なみの陣笠鎧、見るに太五平ぞくつき出し、「そりや俺が望む所ぢや、大勢にうち交り、えい〳〵わいがいうて見たい。」「オ、サそんならちやつと身拵へ。」と、てん手に帶とくどんざぬぐ、じばんの上に黑革の、鎧上帶しつかとしめ、一腰さすが侍の、小手臑當

も似合うたと陣笠著て、「コレ太五平、そちは先様知るまいから嘸に所を。」「オット合點母者人。」「オオそんなら太刀の折紙を、添へてやらう。」と納戸より、取りだしわたせば、「忝い〳〵。」「コリヤ怪我すなよ。」オ、夫れもよい〳〵、此の形もよい〳〵やな、よい、よいやな、よい〳〵〳〵〳〵よいやな。身ぶりは練物見る如く、勇み進んでこそは急ぎ行く。林は跡を打眺め。「不具な子がかはゆいと、有様は不便にござる、とにもかくにもお前のお世話、忝うござります。お禮がてらに酒一つ進ぜたいが、奥には仕事を取りちらして置きました。納戸で成りとまゐつて下され。」「イヤそりや御無用。」「ハテナ買うては進ぜぬ、餘所から貰うた諸白に、鰯の肴でたつた一つ、是非に〳〵。」と無理やりに納戸へ押しやり勝手から、銚子杯持ち行くも、子故の愛想としられたり。風さそふ道の時雨も戀故に、身は濡鷺の菊の前、走り付きたる一つ家の、門の戸けはしくうち叩き、「明けて〳〵。」と宣へば、林は聞き付け、「誰ぢや〳〵。」「イヤ大事ない者ぢや。」「大事ない者とは。」「ハテわしぢや、菊の前ぢやわいの。」「ヤア お姫様とは心得ぬ。」と、庭にかけおり戸を明けて、「ほんにさうぢや、まあ〳〵おはひり遊ばせ。」と、いふ中もどうやら氣遣ひ、「見れば付添ふ人もなし、何として夜に入つてお一人お出でなされたぞ。」「さればいの忠度様の遊ばした、お歌の事にとやかくと隙取る内を待ち兼ねて、お立ち有りしと聞くと早、跡を慕うて出でたれども、心に任せぬ女の足、爰まで來ても追ひつかれぬ。道はしらず日は暮れる、そなたの所は前方に、摩耶參りの時よつたを便り、漸う尋ね當りしが、此の様に遲れては、忠度様に逢ふ事は。」「成るとも〳〵。」「そりや又どうして。」「コレ、忠度様は先程お出でなされて奥にござる。」「ヤアそれは眞か嬉しや〳〵、早う逢ひたいあはしてたも。」「成程お逢ひなされませ、ぢやがコレ旅草臥で休んでござる。消魂しう起さずと、そつとはひつて肌身を付け、しつほりと御寢なれ。」と、粹な詞におもはゆく、「オ、乳母とした事がじやら〳〵と何ぞいの、譯もない事許り。」と、いひつゝ片頬に笑の眉、開く襖も待ち兼ねて、いそ〳〵として入り給ふ。折節納戸の暖簾上げ、欠ましくらたち出づる茂次兵衛、「ばさま、いかい雜作でござつた。」「是れは扨私とした事が、不作法な亭主ぶり。」「イヤモ手酌でたべつ押へつ、銚子切引つかけたりやくついりかしてぐつたりと寐てのけた。内に大分用がある、いかい馳走。其の内きましよ。」と言ひ捨てて、とつかは急ぎたち歸る。時しも一間さわがしく何の様子か菊の前、襖をあけのけ裾けはらし、かけ出で給へば林は驚き、「コレ〳〵申し。」とひき留め、「何事が發つたか氣色をかへてとつかはと、お前はどこへござります。やうす仰しやれどうぢや〳〵。」「サア其のやうすはの、忠度さまがどうよくな、わしに暇をやるといの。」「ム、そんならお前のお腹立は尤もぢやが、高いも低いも夫が女房に暇をやるは、よく〳〵料簡ならぬ筋か、其の譯を立てなされにや、コレ科ないお前に疵が付くぞえ。マアとつくりと氣を鎭め、

思案して御らうじませ。」「イヤ思案までもない、其の譯は立つて有れど、互に思ひ初めしより、夫よ妻よと言ひかはし、一生添はうと思うた物、緣切られては片時も、何と存へ居られうぞ。恨みつらみもありそ海、一思ひに身を沉め、底の藻屑となる覺悟、とめずと殺してたもいなう、死ぬる〳〵。」と許りにて、跡は詞も涙なる。「イヤ〳〵何ほさうおつしやつても、乳母はどうも合點がいかぬ、是れには定めて深い樣子が。」「ホウ其の仔細は忠度が、とくと申し聞かせん。」としづ〳〵とたち出で給ひ、『天の憎む所天必ず誅罰すと、入道の不善一門の積惡によつて、かくまで傾く平家の運、此の度の戰ひも、十が九つ味方の敗軍、某も討死と覺悟極めし事なれば、いつを期してか添ひ果てん、思ひ切つて歸られよ。』と、いへども中々聞き入れず、『陣所へ伴ひ行かん。』とある。時には忠度女に迷ひ陣中まで俱したりと、世の人口に懸るといひ、死後まで緣を切らざれば、俊成卿の御身の上、平家に親しき咎めを受け、遂には源氏の仇となつて、亡び給はん悲しさに、態と難面くいひ放し、暇をやりしは忠度が、師の厚恩を報ぜん爲、恨みと思ひ給ふなよ。とはいへもしも運に叶ひ、軍に勝たば存へて、二度逢はんも計り難し。それを賴みに行末の、契りを樂しみ待ち給へ。」と、口には諫め心には、是れ今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇にはり詰めし、弓弦の切れし心地にて、るもゐられぬ座をそむけ、脇目に餘る御涙、包みかねさせ給ふにぞ、夫れと悟りて菊の前、「イヤ〳〵何ほ其の樣に、再び逢ふの添はれるのと、潔うおつしやつても、誠しからぬ身の覺悟、討死としりながら、何と見捨てていなれうぞ。いづくまでもお供して生きるとも死ぬるとも、一所でなけりや私やいや〳〵。むごいつれないお心。」と、縋り付いて泣き給へば、林も心根思ひやり、俱に袂を紋りしが、態といさめの聲はげまし、「今の程事を分け、理がいを解いて言ひなさるに、達てお供とおつしやれば、親御樣へは不孝といひ、殿御の爲には猶ならぬ、いかに姫ごぜなればとて其の辨へがないかいなう、ア、うとましいお子では有る。」と、詞を盡して俱々に、諫めすかせどいやおうの、諾へも涙中中に、離れがたなきふぜいなり。折節風に誘はれて、聞近く聞ゆる鯨波、耳を突き拔く鉦太鼓、亂調に打立て〳〵、どつとかけくる討手の大將、眞先に大音上げ、「平家の落人薩摩守忠度、此の家に忍び在する由、注進あつて慥かに聞く、召捕らん爲梶原平次景高が向うたり。縱ひ鬼神なればとて、八方をとり圍めば、とても遁れぬ、尋常に繩かゝられよ、異議に及ばばふん込んで搦めとる。如何々々。」と呼ばはつたり。人々扨は茂次兵衞が、注進せしかと驚けば、忠度ちつとも動じ給はず、二人を奧へ忍ばせて、太刀おつ取つてつゝ立ち上り、「ヤアをこがましや景高、源平互に鎬を削り刃をあらそふ戰場には向はず、我一人に多勢を以て取りかこむ卑怯者。汝ごときにやみ〳〵と繩かゝる忠度ならず、いでや手並を見せんず。」と、太刀拔き放ち身繕ひ。景高いらつてソレふんごめ、下知に從ふ雜兵共、

門の戸蹴破り一同に、かけ入り〳〵かけ向ふ、多勢を屈せぬ早業に、眞向立ちわり車切、四方八方ぱつしぱつし、なぎ立て給へば雑人ばら、皆我一に跡ずさり。忠度いかりの御聲にて、「うぬら如きに刃物はいらず。」と、大手をひろげ待ち給ふ。手並にこりぬ雑兵共、一人が〻りは叶はじと、大勢一度にどつと寄り、ひき摑んでは人礫、あやどりなんどを見る如くめざましかりける　三重次第なり。勇力無雙の働きに、さしもの景高氣おくれし、逸足出せば雑兵共、叶はじ物といふ波の、立つ足もなく我先に、むら〳〵ばつと逃げ失せけり。相手なければ忠度卿、息を休むる其の中も、油斷ならざる埴生の宿り、如何してふせがんと、心をくばる時しもあれ、又よせくる鬨貝鉦鼓責太鼓、手に取る如く聞ゆれば、忠度はつと心付き、扨こそ景高、大軍を催し重ねて向ふと覺えたり。戰場ならば敵の勢、何萬騎にて圍むとも打破りかけなやませ、譽を顯はし見せんずもの、軍中に引きかへし願ふ詠歌も腰をれの、望みも叶はず剩へ、さしも名高き忠度が、斯くあばらやに身を忍び、敵に圍まれやみ〳〵と、生捕られんは後代まで、屍の恥辱名の穢れ、口惜しや淺間しやと、拳を握り齒嚙をなし、怒りの涙てる月に、雹をふらすが如くにて、いたはしくも又道理なり。隙もあらせず表の方、寄せくる軍兵むら立つ提灯、天地をてらし亂れ入るよと見る所に、さはなくして討手の大將、かけゐほしに花田の大紋きわやかに、長袴のくゝりをとき、悠々然と立ち向ひ、「武藏國の住人岡部六彌太忠澄、忠度卿に見參。」と、しづ〳〵打通り、傍近く謹んで、「此の度源平兩家の軍は、私ならぬ院宣を蒙り、範頼義經罷り向へば、兩陣互に晴勝負、潔き軍はせずして、拔けがけせし景高が卑怯の振舞、聞くに忍びず此の六彌太が參りしは義經の嚴命、其の仔細は、先だつて俊成卿へお頼みありし御詠歌の内、さゞ波やしがの都はあれにしを昔ながらの山櫻かな、右の御歌千載集に入れしかど、敕勘有る御身なれば、名ははゞかりて讀人しらずとなりし趣、則ち集に入つたる印、此の短冊御覽に入れよ。」と山櫻の流枝に結び付けたる以前の短冊、うや〳〵しくさし出せば、忠度につこと打笑み給ひ、「我が詠歌を我が筆の、願ひも仇花ならぬ印、御芳志の山櫻、ハア、忝し。」と押し戴き、「敵味方と隔つれば打捨て置かるべかりしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて、歌人の數に加はり、和歌の譽を殘すこと、生涯の本望、死しても忘れぬ悦びぞや。とても遁れぬ身の不運、死すべき時に死せざれば、死に勝る恥ありと、名もなき愚人の手にかゝり、見苦しき最後もせんかと、後悔せし折に幸ひ、武勇の聞え隱れなき、六彌太に生捕られば忠度が恥辱はあらじ。サアよつて繩かけられよ。」と、御手を廻し待ち給へば、「コハ心得ぬ御仰せ、某君の討手には參らず、敵味方の勝負は戰場、其の時は兩家のはれ業容赦はないぞ、互に時の運に任せん。但し梶原がごときよわみを見かけ、ぬけがけして手がらにせんと、思ふやうな六彌太と思召さるゝか、ハ、、、、。」はつとあざ笑へば、忠度卿理にふくし、「實に〳〵是れ

は誤つたり、盛んなる時は制し、衰ふる時は制せらるゝ、理、いかなれば義經といひ汝まで誠ある一言、心魂に徹して今さら返す詞もなし。惜しからぬ命なれども、明けなば陣所へたち歸り、はなゞしき軍をせん、其の時望みは御邊が首。」「忠度卿は我討取る。」「必ず討たれよ。」「おんでもない事。」「アレ〳〵八聲の鷄もなく、明くる間近しと申せども、路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ソレ〳〵用意の馬引け。」と、飾り立てたるくろの駒御前に指しよする。辭するに及ばず忠度卿、立髪掴んでゆらりとめせば、一間の内より菊の前、「コレなうしばし。」とかけ出で給ふを、林は押しとめ立つ身で隱せば、岡部六彌太、夫れと悟つて忠度の、脱ぎ懸け給ひし上著の袖、刀を拔いてふつつと切り。「コレ〳〵乳母。」といふに惚り。「ハテ扨ふしぎな顏せまい、總じて老女は嫗といひ、また姥ともよぶ。今宵忠度卿の、お宿を申せし御はうびに是れを遣はす。それとも若々しき錦のかた袖、年寄が貰うて益なしと思はば、外にはほしがる方もあるべし。是れも其の人の形見と思へども猶なつかしき袖のうつり香、といふ歌の心、其方が耳に、ソレきくの前よく心得てお受け申せ。」とさし出せば、「コハ冥加なき仕合。」と、戴く右のかた袖は、右の腕をおち方の、軍に討死し給ひし、後の哀れとしられたる、思ひの種や涙の種、仁義を種の六彌太が、東雲近し急がんと先に進んで立つか弓、いはぬはいふに彌勝る、暇乞さへ泣顏に、見送る姿ふり返る、心の種の詠歌も、昔ながらの山櫻、散り行く身にも指しかざす、流れの枝の短冊は、世々に譽を殘す種、歎きの種の離れ際、いさめを種と隔つれど、はてし涙の悲しみを、倶になづみて耳をたれ、いなゝく聲も哀れそふ、駒の足取り諸手綱、引きわかれ行く曉の、空も名殘や惜しむらん。

第三

唄　世にあらば、又歸りこん津の國の、御影の松と詠み置きし、一木と倶に年を經し、額の黒痣口ぐせに、佛の御名を唱ふれば、白毫の彌陀六と、人にしられし石屋あり。實に交はりも信心の、同氣同行相求め、朝暮勤むる看經の、責念佛の終りには、諸國諸山に建て置きし石塔に有る戒名の、數も限りもなむあみだ、願以此功德平等の廻向の聲も殊勝なり。日暮紛れに門口へ、連立ちてくる石屋共、「親父殿内にか。」といふ聲聞いてずつと立出で、「ホウ同行衆ようござつた、けふは大分鬧がしさに、仕事の形で直に看經たつた今仕廻つた。サ、上らしやれなむあみだ〳〵。」「否これ彌陀六殿今夜は數珠くりの數右衛門が逮夜、百萬遍申すによつて誘ひに來ました。」「眞にさうぢやどりや參りましよ。コリヤお岩まだ彦助は戻らぬか。コレ娘が起きたら藥溫めて飲ませ。若し石塔を誂へさしやつたお若衆が見えたら戻るまで待たして置け。サア〳〵ござれちやつと念佛かき込んで、夜食を申そぢやあ

るまいか。」「オイ〳〵佛も百味の飲食、こちもなら茶の御食せう。」しよざい佛法腹念佛、門念佛を口口に、打連れてこそ急ぎ行く。跡へ下人の彦助が、杖の先にぶら〳〵と綱繩引きかけたち歸り、「ヤレヤレしんどや、お岩殿肩も腕もめり〳〵いふわ。」「オ、道理々々嘸草臥れ、そして石塔は建ちましたか。」「イヤまだ建ちはせぬが、おりや内に用があろと思うて先へ戻つたが、旦那殿は奥にか。」「イヤイヤ同行中に百萬遍が有つて參らつしやたわいの。」「ホウそんなら幸ひ、此の間小雪樣が病氣ぢやとて引込んでござるは、彼の石塔を誂へさしやつたお若衆に、戀煩ひと見たは違はぬ。旦那の耳へ入らぬ内意見せうぢや有るまいか。」「否そりや私も如在はない、此の間から種々というてもいかな〳〵、此の戀が叶はねば、井戸へ身を投げるの首しめて死ぬるのと、恐い事許りいうてぢや。」「ホウそりや厭なこつちやの。ハアそんならかうしや、只一度で思ひ切らしやれと、とつくりと合點さして、いつそ逢はそぢやあるまいか。」「ハテもうせう事がない、幸ひ今夜お若衆が見える筈ぢやが、其の間に旦那が。」「ア、何のいの百萬遍ならちやつとぢや有るまい。マア娘御に其の譯いうて工面さつしやれ。おりや寢所で彼の時分、獨角力を取りましよ。」と、言ひつゝ勝手と奥の間へ、別れてこそは入りにけれ。半大夫既に其の夜も丑三の、風しん〳〵と更け渡り、いと物すごき時しもあれ、ねとりの聲の哀れけに、ほの聞ゆればいとゞ猶、心細さといふかしさ、小雪は部屋をたち出でて、燈火かゝげ窺へば、門の戸ほと〳〵打ちたゝき、「頼みませう〳〵。」といふ聲は、紛ふ方なきお若衆樣、アレ嬉しやと飛んでおり、戸口を明けて、「ようこそお出で、サア〳〵こちへ。」と伴うて、下に居る間も胸せかれ、顔は上氣のはぢ楓、さし俯いてもぢ〳〵と、挨拶も出ぬ其の内に、お岩が聞き付け走り出で、「是れはお若衆樣、今日お出での約束故、只今まで待ちましたが、なぜ更けてお出でなされた。」「されば手前は少し樣子あつて、人目を忍ぶ者なれば、晝は勿論夜とても、密かな時刻を心がけ、態と只今參りしが、先だつて誂へ置いた石塔が出來ましたら、彼の地へ建ててもらひたさ、先づ御亭主に逢ひましたい。」「イヤ父樣は只今留守でござりますが、御前がお出でなされたら、待たせまして置く樣にとナウお岩。」「アイ申付けて出られました。歸られますまで名代は此の娘御、お話の相手にしてうつつ答へつやつつ返しつ、兎角お心安うして進ぜて下さりませ。サア〳〵奥へ。」と慫むれば、「然らば左樣致さん。」と何の心もつい立つて、一間へ通る後影、見送るお岩が手を打つて、「テモ扨も能い器量、あの樣なお若衆は、日本國を尋ねても今一人とあるまい、惚れさしやんすも道理々々。したがコレ小雪樣、うろ付いてござる所ぢやない、ちやつといて敎へた通り何かなしに頭から、抱き付いてこけたがえいぞや。夫れも上へならぬやう、下から隨分あしらひなされ。アレまだうぢかはもどかしや、サア〳〵早う。」とむりやりに、押しやり突きやり跡ぴつしやり。「ア、世話やのどうやらかうやら首尾なつた。

是れから休もと任なれど、たつた一重の壁越に、鄰の餅搗き聞くやうで寐られそむないよさりぢや。」と、いひつゝ勝手へ入る跡へ、小雪はたち出で興さめ顔。「テモめんようなお若衆様、慥かに奥へいかしやんしたが、かいくれ姿が見えぬはどうぢや、ふしぎ〳〵。」とうろ〳〵きよろ〳〵尋ぬる内、こなたの障子さつと明け、「イヤこゝに居ますわいの。」「是れはしたり意地の悪い、いつの間に拔けなさつた、人の思ふ様にもない、心づよいお方ぢや。」と、言ひつゝ傍へさし寄れば、飛び退つて、「ア、これこれ、始終の様子を見聞くに付け、優しき人の志、嬉しいとは言ひながら、我が身は深き様子有つて、假にも妹脊の語らひをなす事叶はず、縁なきことは前生の約束ならめと諦めて、思ひ切つて下されぬ。」といふも遏に氣の毒の、打萎れたる其の風情。小雪ははつと力を落し、「縱ひ様子が有るとても、是れ程に思ひ詰め心を盡すかひもなく、情なうもふり捨てていやと仰しやりや生きては居ぬ。むごい難面いお心。」と恨み歎けば、「いやとよ恨むはさる事ながら、逢ふは別れの始めといふ譬へに洩れぬ我が身の上、頼み置きたる石塔が、今にも成就してあらば、再び此の家へ來らぬ故、逢ひ見る事も叶ふまじ、只儘ならぬは世の習ひ、儚き物は人の身の、一生は皆夢と思へば、さのみ迷ひも有るまじ。去り乍ら今を限りの別れといへば、誰しも名殘惜しい物、若しも戀しき折柄は、心の慰めともならん、いで〳〵筐に參らせん。」と、錦の袋おし開き、青葉に榮えし笛竹を、渡す心も無爲なく、戴く身にも

さながらに、道理に向ふ矢先はなく、「ひよんな事ぢや。」といふより外、詞も涙にくれゐたる。折から道々口癖になむあみだ、なむあみだ六逮夜よりいきせき戻り門の戸を、「明けい〳〵。」とうち敲けば、「あい。」と奥から返事してお岩がかけ出で、「旦那様のお歸りさうなコレ小雪様、折角戀になされたあなたを、此の儘で思ひ切るお前の心が、いかにしてもいとしぼい、せめてもの心ゆかし、此の間にちやつと抱き付きなされ。」と、むりに押しやり庭におり戸口を明け、「ホウ旦那様早かつた。」「何の早かろ百萬べん〳〵だら〳〵と跡の話で途方もなう夜が更けた、ァなむあみだ〳〵。ヤお若衆はござつたか。」「サァ其のお方は。」「どうぢや〳〵。」「サさつきに見えたけれど、はづかしかつたか、門口でうぢかは〳〵はひりにくさうにしてで有つたを、もどかしがつて娘御がついはひらしなされたわいな。」「ヤ、何ぢや娘がもうはひらしたか。」「アイ。」「なむあみだ〳〵。」「オ、旦那様とした事が悪い聞き様、此の門口にござつたを内へはひらしなされたとこぢやわいな。」「ハテさうしつかりといへばえいに、どうやら紛らはしかつたではつと思うた、どりやお目に懸ろか。」とずつと通つて、「是れは〳〵、さぞお待遠にござりましよ。扨お誂への石塔、今日の約束なりや、夜を日に次いで漸う出來し、今朝から若い者等に運ばせたが、大かた建てたでござりましよ。」「それは嬉しやいかい世話でござつた。」「イヤ世話は家業ぢやがお氣に入つたらこちも仕合、マァ御らうじて下さりませ。」「成程々々同道し

て參りたい。」「そんならお供致しましよ。」と、立つて用意を取急げば、「コレ〳〵と、樣わしも一所に行きたいわいな。」「そりや何で。」「ハテ石塔の恰好見に。」「ハテ扨わけもない何のわれが見る事ぞ。爰やあそこの所ぢやなし、殊に夜道ぢや、あはういはずとせど門しめてよう留守せい。コリヤお岩そちも傍から隨分氣を付け、誰がこうともかんまへてついはひらすなよ。合點かサア〳〵お出で。」と、打連れだち、急いでこそは出でて行く。月もさやけき夜もすがら、四方の景色もすみのぼる、光を覆ふ雲ならで、雀の宿りかけくらき、松の林に風あれて、汀の波のおのづから、音も激しく打寄せて、高根にひゞく山彦は、とう〳〵さつと布引の、瀧のしら絲たえずと人の、とへばかなたと五百崎に、つゞく藪池村里も、急いで切利天上寺、摩耶のお山をめてに見て、行く道筋も直ならぬ、脇の濱邊や磯傳ひ、神戸も跡に湊川、流るゝ水の淀ならば、爰も繼橋かけ渡す、舟を守りの神垣や、森もしげみて置く露の、垂水の里も早過ぎて、行けばほどなく上野山、一谷にぞ著きけるが、しのゝめ近き横雲の、たなびく空も青々と、枝葉繁りし松陰に、つつくり立つた御影石、遠目にそれとみだ六が、走り寄つて、「是れぢやく〳〵、先だつて遣はされた所書に合はせ、若者等に言ひつけたりや、建てはたてたがちつくり笠にふりがある。」と、おし直してためつすがめつ、「サア恰好見て下さりませ、何とようござりませうがや、是れからくるひのない樣に、蹟を合はすは漆喰。」と、ふところより蓋物とりだし、重ねの際々塗る所へ、山畑かせぐ百姓共、鋤鍬擔げどや〳〵と、通り蒐つて、「ホウ石屋の親父殿か。」「おいやいこりや皆とうから精が出るな。」「イヤこちとらより此方がとうからあぢな所へ石塔を建てさしやつたの。」「ハテあの人は商賣ぢやによつて、どこで有らうが持ち運んで、建てねばならぬが、誂へ人が怪有なやつぢやの。」「ア、これ〳〵むざと麁相言ふまい、其の施主人が爰にござるぞ。ナア若衆樣、我も人も亡者の爲、卒堵婆一枚立てても三惡道を遁るゝといふ、まして大相な此の石塔を、お建てなさるは御奇特なお若衆樣、結構なお志でござります。」「イヤこれ親父殿、お若衆の施主人のと、人もないにそりや何いはしやる。」「何とはわいら目がさめぬな。」「アレ又どこに人がゐるぞいの。」「ハテこれ爰に、ハア眞に見えぬわ、ハレめんような只今まで爰にで有つたが、ハア何方へござつたな。お若衆樣〳〵。」と、よべば俱々百姓共、爰かそこかと尋ぬる所へ、娘の小雪が徒跳、息もすたく走り付き、「お若衆樣にたつた一言、いひたい事があつてきた、ちよつと逢はして下さんせ。」「イヤ逢はして所ぢやない、影も形も見えぬわい。」「コレ親父殿、お若衆がゐるやらねば、忽ちこなたの損ぢやぞや。所を知つてか、但し先銀でも取つて置かしやつたか。」「いやてや、仁體が能いから所も問はず一錢も受取らなんだ。」「ハア夫れでよめた、石塔をかこ付けに、何ぞせしめる下工み、扨は衒りに極まつた。遠くは失せまいぼつかけん、サア皆こい〳〵。」と立ち騷げば、「イヤこれ〳〵待たし

やんせ、よもやそんなさもしい心なお方ではあるまい。其の證據はわしにやるとて、コレ此の笛を。」「貰うたのか。ハァどれ〳〵ヤこりやまあ袋が結構な赤金襴ぢや、扨笛は生竹でもないが、節からちつくり枝葉が有る。いか樣これを錢にせうなら百が物は有らうかい、ナウ親父殿。」「ハテ扨何の錢にならう、夫れも娘が一杯くたのぢや。ェ、こんな事ならあたまで半銀取つて置いたら、まんざらの損もせまいに、あたむごたらしいめにあうた。」と、悔むに效もあら笑止や、みだ六がぬかれたと、傳へて諸事の誂へ物、手附を取るといふ事は、此の時よりとしられたり。時しも跡の松原より、足早にくる女は、何者なるといふ中に走り近づき藤の局、「コレ〳〵ちよつと物とはう、船寺はどつちぢやの、教へてたも。」とありければ、「ハァ、夫れは是れからよつ程遠いが、見れば賤しうない女中の、たつた一人かちはだしで何故寺を尋ねさつしやる。」「さればわらはは樣子有つて、跡より追手のかゝる者、しばらくかけを隱さん爲。」と宣ふ中に目早くも、娘が持ちたる袋を見付け、「なうそれをちよつと見せてたべ。」と、手に取り給へば紛ひなき青葉の一管。「ヤァ是れは我が子の敦盛が、肌身はなさぬ祕藏の笛、どうしてこなたの手に有る。」と、聞いて親子も不審顏、百姓共口々に、「其の敦盛といふ人は、此の間の戰ひに、源氏の侍熊谷次郎が手にかゝり、死なしやつたぢやないかい、ナァ與次郎。」「オオ其の時にいぢらしい、玉織とやらいふ内裏上臈も殺されて居たけな。」と、聞いてみだいは、「ヤァヤァヤァ何敦盛は討たれしとや。福原の館にて母樣御無事でおさらばと、玉織諸共いさぎよう、いうたが此の世の暇乞、長い別れになつたか。」と、有りし事どもくどき立て、人目も恥ぢぬさけび泣き、前後不覺に見えにける。「イヤこれ親父殿、合點のいかぬ事が有る、死なしやつた敦盛樣があの笛の主なれば、こなたに石塔誂へたお若衆とひとつぢやないか。」「いかにも。」「サ其の死んだ人が來さうな物ぢやないぞや。」「いかにも、ハ、ァ聞えた、さつきに爰まで連立つてきて、あの物のいふ中かきけす樣に見えなんだは、扨は幽靈で有つたよな。」と、いへば皆々興さめ顏、御臺は猶も悲しさの、思ひいやます御歎き、小雪も始終を聞くに付け、はかない事やと許りにて、俱に袂を絞りける。折ふし遙かの松かげより、むら〳〵鳥の摶つが如く、かけくる大勢みだ六が、「あれこそ慥かに追手の者、先づ先づあなたを隱すに幸ひ、此の石塔の後へ。」と、御臺の手を取り忍ばせて、「何と思やる孰れも。追手の奴らが此所をすなほに通ればあなたの仕合、若しも何かといぢばらば、是れまで平家の領地に住んだ御恩の爲、一働きせうぢやないか。」「ォ、サてん手に鋤鍬の、むね打ちくらはせほひまくろ。」と、いふ間もあらせず砂煙、蹴立て踏み立てかけくるは、梶原が郎等番場忠太、須股運平先として、數多ひき連れつつと寄り、「コリャ〳〵百姓共、三十餘りの女一人、此所へきたで有らう、どつちへ逃げたそれぬかせ。」「ハイ成程々々、其の女はァレあの道を横切に、濱邊傳ひに走つたが、ァ、もう二三里

も行きませう。追手の衆なら一足も、早うござれ。」とせかすれば、「扨こそ遁すな皆こい。」と、かけ出すふりにてたち留り、運平が耳に口、諜し合はせて木陰に殘し、濱邊をさしてかけり行く。跡打ちながめ、「サア樂ぢや。此の間に早う。」と御臺を出し、「コリヤ〳〵娘、あなた一人は覺束ない、寺まで送つて内へいね、ちやつと〳〵。」といふ所へ思ひがけなき木影より、須股運平飛んで出で、「ヤアどこへどこへ、かう有らうと推量し、忠太が我を殘し置かれた、サ、早う御臺を渡せ、邪魔ひろぐと片つぱし、そつ首ころり打落す。何と〳〵。」と罵れば、百姓共せゝら笑ひ、「コリヤやい、そつ首のそつくひのと、わいらが腕の動く間に、うつかりとして居ようかい。サア相手仕事ぢや手早にこい。」と、てんでに鋤鍬大熊手、打つて蒐れば運平始め、數多の家來も一同に、拔連れ〳〵渡り合ひ、打ちあふ隙にみだ六が、「ソレ御臺樣逃げた〳〵、娘も逃げよ。」とあせる中、元來達者の百姓共、腕先揃へてから棹打ち、かたはし家來を打ちなぐり、運平を追取りまき、投げたりふんだりけとばしたり、寄つて蒐つて打ちたゝく。急所にや當りけん、うんとのつけに反り返れば、ソリヤ死んだわと逃げ行く家來、又追ひかくるをみだ六が、「コレ〳〵待つた。」と呼びかへし、「御臺の難儀を救ふ爲、ほつちらす許りでよいに、ア、死んだりや尻がむづかしい。」「コリヤまあどうした物であろ。」「どうというたら逃げたがよい。サア皆ござれ。」といふ所へ、かけつてくる莊屋の孫作、死骸見付けて、「扨こそ〳〵、一人もちらす事ならぬぞや。コレ皆よう聞きやれ、今梶原樣の郎等番場の忠太といふお侍がござつて、百姓共が狼藉し、家來運平を殺したる由につくいやつ、殘らず引立て來るべしと嚴しい言付、ア、ひよんな事しておらにまで、厄介をかける、遲なはつたら猶恐い、サア〳〵おぢや。」といふに皆々尻込の、中にみだ六すゝみ寄り、殺したと聞かしやつたは大きな間違ひ、ありや目がまうて死んだのぢや、其の證據にはソレ死骸に一つも疵がない。」「ムウ夫れが定なら俺も嬉しい。ドレ〳〵。」と體を改め、「ほんにどこにも疵はない、こりやあつちのが大きな麁相、ハテそち達が殺さぬからは、何のこはい事はない、此の中でよう物いふ者たつた一人いて、さつぱりと言譯すりや濟む事ぢや。」「眞にさうぢや。ハア誰がよかろなア。いやこれ年の功ぢや、みだ六いかしやれ。」「イヤいく分はかまはぬが、おりや口癖の念佛が邪魔になつてどうもならぬ。」「そんなら此の莊屋が指圖せう、日比ちよびくさようしやべる、雀の忠吉やらうかい。」「イヤわしやあんまり口早で、何のこつちや譯が知れまい。」「扨はびしやの五太衞門かい。」「おりや聲が鼻へ入るぞ。」「というて丹兵衞は咽がごろつく、與次郎は齒ぬけなり、指詰又平おいきやれ。」「イ、いやモ、こちやド、どもりますわいの。」「ハテさて其の樣に讓り合うては埒が明かぬ。幸ひ爰に石を運んだ繩が有る、是れで鬮取したらよかろ。」「オ、そりやいや應いはさぬよう、此の莊屋がしてくる。」と、手早に繩切り後でもちやくちやひん握り、「コリヤ結んだのを

取つた者がいくのぢやぞ、サアとれいもよ。」「オット市かゝどれとりやる、西國廻つて是れ〳〵。」とてんでに繩さき引つぱれば、「ハァ、頭數よんでしたが、コリヤ一筋餘つたわ。」「ハテそりや親の繩ぢや、莊屋殿とらしやれ。」「ほんにさうぢやおれがとろ、サアひけ〳〵かたはしからいなしてくりよ。」「ヤすつとせい〳〵。ハァ悲しや結んだのは俺ぢやあつた。」「サア莊屋殿いかしやれ〳〵。」「イヤ待てよ、おりやいかう筈がない、此の場の樣子を知つてるるわいらが言譯する筈ぢや。」「デモ鬮が當つた物。」「そんなら最う一度。」「イヤ仕直しはならぬ〳〵、むりいはずといかしやれ。」と、寄つて掛つて引立て押立て、ヨイヤサツサ是れはめいわく、ヨイヤサツサ待つてくれんか、ヨイヤサツサ、料簡ならぬか、ヨイヤサツサあんまりどうよく、ヨイヤサツサおつ立てひつ立て、ヨイヤサツサ、こヨイヤサツサそ、三重行く空も、いつかはさえん須磨の月、平家は八島の浪に漂ひ、源氏は花の盛りを見る。中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構へ、要害嚴しき逆茂木の、中に若木の花ざかり、八重九重も及びなき、それかあらぬか人ごとに、熊谷櫻といふぞかし。花をらせじとの制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立ち集まり、「扨も咲いたり〳〵、花より見事な此の制札、辨慶殿の筆ぢやけな、扨も見事一つも讀めぬ。」「オ、あれはの、義經樣が此の花を惜しみ、一枝きらば指一本切るべしとの法度書。」「ヤァ花のかはりに指きろとは首切る下地、オ、こはや、見てるる中も虎の尾を踏む心地する。皆ござれ。」と、花に嵐の臆病風、ちり〳〵にこそ別れ行く。遙々と尋ねて爰へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰や彼所と尋ねしが、幕に覺えの家の紋、嬉しや爰と内に入る。折節家の子堤軍次たち出でて、「是れは〳〵奥樣か。」「オ、軍次そなたも息災さうな、マアめでたい〳〵。熊谷殿や小次郎も變る事はないかの、早う逢ひたい逢はせてたも。」「ハアこんにちは旦那は今日御廟參、小次郎樣は先頃より御前勤めで御下りなし、マア〳〵長の御旅路、お勞れをお休め。」と、挨拶とり〴〵なる所へ、敦盛卿の御母藤の局、虎口の難を遁れきて、こけつ轉びつ花の陰、陣屋をめがけ走り付き、「跡より追手の蒐る者、影を隱して給はれ。」と、けはしき體に驚きて、相模は傍へ走り寄り、見るに見かはす互の顏、「ヤァお前は藤のお局樣ではないか。」「さういやるそなたは相模ぢやないか、テモ久しや懷かしや。」「おゆかし樣や。」と手を取つて、「マア此方へ。」と伴ひ入る、したしき體に心をきかし、軍次は勝手へ入りにけり。相模はやがて手をつかへ、「誠に一昔は夢とまうすが、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎殿と馴れ初め、御所を拔け出で東へ下り、お前樣のお身の上を承れば、御懷胎のお身ながら平家の御家門、參議經盛樣方へ緣づき給ふとの噂、其の折は世盛りの平家、御威勢はます〳〵と、陰ながら悅びましたに、此の度源平のたゝかひ、御一門もちりぢりと聞くに付け、ァ、此の藤の方樣は何となされたどう遊ばしたと、一人苦にしてをりましたに、

マァ御機嫌なお顔を見て、おめでたやお嬉しや。」「オ、其方も無事でマア嬉しい、懐胎で出やつた時の子は姫ごぜか男か、息災で育てて居るか。」と、ちよつと寄つても女同士、問うつとはれつ年月に、つもる言の葉くりかへし、嬉し涙の種ぞかし。藤の方涙ぐみ、「世の盛衰はぜひもなや、其の時に産み落したは、無官大夫敦盛とて、器量發明揃うた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の波に漂ひ、我のみ残るうきなんぎ、淺ましの身の上。」と卿ち給へば、「お道理〳〵、以前の御恩も有る、連合にも語りお身の片付き後世の營み、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申して、北面同然の武士、只今にては武藏國の住人、しの黨の旗頭、熊谷次郎眞實と人もしつた侍。」と、聞くより御臺は、「ヤア和女の連合の佐竹次郎、今では熊谷次郎といふか。」「アイ。」「すりやあの熊谷次郎は和女の夫よな、ハァ。」はつと吐胸の氣をしづめ、「何と相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自らが申し宥め御所の御門を、夜の中に落してやつたを覺えてか。」「アッア其の時の御恩、何の忘れませうぞいな。」「ム、其の恩を忘れずば、助太刀してそちが夫熊谷を自らに討たしてたも。」「エ、イそりやまた何のお恨みで。」「サア最前も話した、院の御所のお胤、無官大夫敦盛をそちが夫熊谷が討つたわいの。」「エ、そりやまあ誠でござりますか。」「スリヤそなたは何にもしらぬか。」「サアはる〳〵と東より、今來て今の物語り、聞いてとむねの誠しからず、追付夫が歸り次第、樣子を尋ぬる其の間、暫くお控へ下され。」と、詞を盡し理を盡し、なだむる折に表より、「梶原平次景高、所用有つて推參。」と呼ばはる聲。「ヤア何梶原とや、見付けられては御身の大事、先づ〳〵こちへ。」と御臺の手を取り、一間へ伴ふ其の中に、堤の軍次たち出で、「今日は主人直實志あつて廟參、御用あらば某に仰せ置かれ下され。」と、地に鼻付くれば平次景高、「何熊谷殿は他行とな、ソレ家來共、其の石屋の親父め引立て來れ。」「はつ。」と答へて科もなき白毫のみだ六を、平次が前に引居うれば、「ヤイなまくら親父め、汝何者に頼まれ、敦盛が石塔は建てたやい、平家は殘らず西海へほつくだし、誂ふべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が、頼みしに違ひはあるまい、サア眞直に白狀ひろげ。偽ると鉛の熱湯、脊骨をわつて流し込む。」と、おどしかけても正直一遍、「テモさても御無理な御詮議、先程も申した通り、石塔の誂へ人は敦盛の幽靈、五りんの事は授置き、一厘も手附はとらず、建てると其の儘石塔の喰ひ逃げ、せめて人魂でも手附に取つたら、小提灯の代りに致しませうに、冥土へ書出しはやられず、本の是れがそんしようほだい、有りやうの申し上げ願以此功德施一切、此の通りでござりまする。」と取りしめなき。「ア、何仰しやつても糠に釘。」と、軍次が詞に平次は惡智慧、「大かた石塔を建てさせたわろも合點々々、熊谷戻らば三つ鐵輪の詮議、先づ其奴めを引立て來れ。」と、一間へ入れば家來共、石屋の親父をむりやりに、引立て奥へ連れて行く。相模は障子押開き、日

も早西に傾きしに、夫の歸りの遲さよと、待つ間程なく熊谷次郎直實、花の盛りの敦盛を、討ちて無常を悟りしか、遉に猛き武士も、物の哀れを今ぞしる、思ひを胸に立ち歸り、妻の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆ひになり、「先だつて平次景高殿、何か詮議の筋あるとて、御影の石屋を引連れ御出であり、奥の一間に御待ち。」と委細を述ぶれば、「ムウ詮議とは何事ならん、ァいや其方は一獻を催し、梶原殿を饗し申せ、サァ早くいけ〳〵。ハテさて何を猶豫する。」と、呵りちらされ是非なくも、相模に顔を見合はして、心を殘し入りにけり。跡見送りて熊谷は、「コリヤ女房、其方は爰へ何しに來た、國元出立の節陣中へは便りも無用と、堅く言ひつけ置きたるに、詞を背くといひ剩へ、女の身で陣中へ來ること、不屈至極の女め。」と、不興の體に相模はもぢ〳〵、「其のお呵りを存じながら、どうかかうかと案じるは小次郎が初陣、一里いたら樣子がしれうか、五里來たら便りがあろかと、七里歩み十里歩み、百里餘りの道をつい都までホ、ォ、しんき、登つて聞けば一谷とやらで今合戰の最中と、取り〳〵の噂ゆゑ、子に引かされるは親の因果、御料簡下さりませ、マァ此の小次郎は息災で居ますか。」と、とへば熊谷詞をあらゝげ、「戰場へ赴くからは命はなき物、堅固を尋ぬる未練な性根、若し討死したら何とする。」「いゝえいな、小次郎が初陣に、よき大將と引組んで討死でも致したら、嬉しい事でござんしよ。」と、夫の心に隨ひし、健氣な詞に顔色直し、「ホ、先づ小次郎が手柄といふは、平山武者所と爭ひ、拔けがけの高名、軍門にかけ入つての働き、手きず少々負うたれども、末代まで家の譽れ。」「エ、して其の手疵は、急所ではござりませぬか。」「ソレまた手疵を悔む顔付、若し急所なら悲しいか。」「イエ何のいな、掠疵でも負ふ程の働きは、出かしたと思うて嬉しさの餘りお尋ね、其の時お前も小次郎と、一所にお出でなされたか。」「ホウ危しと見るより軍門にかけ入り、小次郎をむりに引立て小脇にひんだき、我が陣屋へ連れ歸り、某は其の軍に搦手の大將、無官大夫敦盛の首取つたり。」と話に扨はと驚く相模、後に聞きゐる御臺所、「我が子の敵。」と有りあふ刀、「熊谷やらぬ。」と拔く所、鐺搦んで、「ャァ敵呼ばはり何奴。」と、ひき寄するを女房取り付き、「ァ、これこれ聊爾なされな、貴方は藤の御局樣。」と、聞いて直實惚りし、「ハァ思ひがけなき御對面。」と、飛び退き敬ひ奉れば、「コリヤ熊谷、軍の習ひとは言ひながら、年はも行かぬ若武者を、ようむごたらしう首討つたなァ、サァ約束ぢや相模、助太刀して夫を討たせ、何と〳〵。」刀追取りせり付け給へば「アイ。」あい〳〵と返事も胸にせまりながら、「エ、直實殿、敦盛樣は院のお胤としりながら、どう心得て討たしやんした、樣子が有らう其の譯を。」と、いふもせつなきうろ〳〵涙、「ァ、愚か〳〵、此の度の戰ひ敵と目ざすは安德天皇、夫れに隨ふ平家の一門、敦盛は扨おき、誰彼と鎬を削るに用捨がならうか。イヤナウ藤の御方、戰場の儀は是非なしと、御諦め下さるべし。其の日の軍のあらましと、

敦盛卿を討つたる次第、物語らん。」と座を構へ、「扨も去んぬる六日の夜、早東雲と明くる比、一二を爭ひ拔けがけの、平山熊谷討取れと、切つて出でたる平家の軍勢、中に一際勝れし緋縅、さしもの平山あしらひ兼ね、濱邊をさして逃げ出す。『ハテ健氣なる若武者や、逃げる敵に目なかけそ、熊谷是れに控へたり、返せ、戻せ、オ、イおゝい。』と、扇を持つて打招けば、駒の頭を立て直し、波の打物二打ち三打ち、いでや組まんと馬上ながらむんずと組み、兩馬が間にどうど落ち。」「ヤア／＼何と其の若武者を組み敷いてか。」「されば御顏をよく見奉れば、かね黑々と細眉に、年はいざよふ我が子の年ばい、定めて二親ましまさん、其の歎きはいか許りと、子を持つたる身の思ひの餘り、上帶取つてひき立て塵うち拂ひ、『早落ち給へ。』と。」「勸めさしやんしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかつたの。」「オ、、『早落ち給へ。』と勸むれど、『イヤ一旦敵に組みしかれ、何面目に存へん、はや首取れよ熊谷。』」「ナニ首取れというたかいの、健氣な事をいうたなう。」「サア其の仰せにいとゞ猶、涙は胸にせき上し、まづ此の通りに我が子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん、淺ましきは武士の、習ひと太刀も拔き兼ねしに、逃げ去つたる平山が、後の山より聲高く、『熊谷こそ敦盛を組み敷きながら、助けるは二心に極まりし。』と呼ばはる聲々、『エ、是非もなや、仰せ置かるゝ事あらば、言ひ傳へ參らせん。』と申し上ぐれば、御涙を浮め給ひ、『父は波濤へ赴き給ひ、心に懸るは母人の御事、きのふにかはる雲居の空、定めなき世の中を、いかゞ過ぎ行き給ふらん、未來の迷ひ是れ一つ、熊谷賴む。』の御一言、是非に及ばず御首を。」と、話す中より藤の局、「ナウ左程母をば思ふなら、經盛殿の詞に付き、なぜ都へは身を隱さず、一谷へは向ひしぞ。健氣によろうた其のときは、母も俱々悅んで、すゝめてやりしかはいやな、覺悟の上も今さらに、胸もせまりて悲しや。」と、くどき歎かせ給ふにぞ、御尤もとは思へども、相模は態と聲はげまし、「いや申しお局樣、御一門殘らず八島の浦へ落ち行き給ふ中に、一人踏みとゞまり、討死なされた敦盛樣、數萬騎に勝れた高名。但し逃げのび身を隱し、人の笑ひを受け給ふが、おまへの氣では嬉しいか、御未練な御卑怯な。」と、いさめに熊谷、「オ、でかした／＼、コリヤ女房。御臺所此の所に御座あつてはお爲にならぬ、片時も早く何方へも御供せよ、サア／＼早くいけいけ。我も敦盛の御首實驗に供へん、軍次はをらぬか早參れ。」と、呼ばはる聲と諸共に、一間へこそは入相の、鐘は無常の時を打つ、陣屋々々の燈火に、いとゞ悲しさ藤の方、「ア、思ひ出せばふびんやな、今はの際までも肌身はなさず持ちたるは、コレ此の青葉の笛、我と我が身の石塔を建てて貰うた價にと、渡し置いた此の笛の、我が手に入りしも親子の緣、魂魄此の世に有るならば、なぜ母には見えぬぞ、聞えぬ我が子や懷かしの此の笛や。」と、肌に付け身に添へて、盡きせぬ思ひ遣瀨なき。「コレ申し其の笛がよい御筐、經だらにより笛の音を、手向けるが直に追善、敦盛樣のお聲をば、聞くと

思うて遊ばせ。」と、勸めに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、ふるうて音をぞすましける。親子の緣の絆にや、障子に映る陽炎の、姿は慥か敦盛卿、藤の局は一目見るより、「ヤレ懷かしの我が子や。」と、かけ寄り給ふを相模は抱きとめ、「香の煙に姿をあらはし、實方は死して再び都へ歸りしも一念のなす所、有るまい事にはあらねども、訝しき障子の影、殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、御姿は消え失せん。」「イヤなう四十九日が其の間、魂宇宙に迷ふと聞く、せめては逢うて一言を。」と、ふりはなし〳〵、障子ぐわらりと明け給へば、姿は見えず緋縅の、鎧許り殘りける。はつと許りに藤の方、相模も俱に取り付いて、「扨は鎧のかげなるか、戀しと迷ふ心から、お姿と見えけるか。」と、俱にこがれて正體も、泣きくどくこそ哀れなれ。時刻移ると次郎直實、首桶携へ立ち出づれば、相模は夫の袂を控へ、「コレ申し是れが親子御一生のお別れ、せめて御首になりとも、御暇乞。」と願ふにぞ、藤の局も涙ながら、「ナウ熊谷、そちも子の有る身でないか、野山の猛き獸さへ、子を悲しまぬはなき物を、親の思ひを辨へて、情に一目見せてたも。」と、縋り歎かせ給へども、「イヤ實檢に備へぬ中内見は叶はぬ。」と、はね退け突き退け行く所に、「ヤァ熊谷暫し〳〵、敦盛の首持參に及ばず、義經これにて見ようずるわ。」と、一聞をさつと押し開き、立ち出で給ふ御大將。「ハ、、、。」はつと次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に呆れながらに平伏す。義經床に著き給ひ、「ヤァ直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇をねがふ汝が心底訝しく、密かに來りて最前より、始終の樣子は奥にて聞く、急ぎ敦盛の首實檢せん。」と、仰せ聞くより熊谷は、はつと答へ走り出で、若木の櫻に立て置きし、制札引抜き恐れけなく、義經の御前に差置き、「先つ頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短尺、此の熊谷には敦盛の首取れよとて、辨慶執筆の此の制札、則ち札の面の如く御諚に任せ、敦盛の首討取つたり、御實檢下さるべし。」と蓋を取れば、「ヤァ其の首は。」とかけ寄る女房、引きよせて息の根とめ、御臺は我が子と心も空、立ちより給へば首を覆ひ、「コレ申し實檢に備へし後は、お目にかける此の首、お騷ぎあるな。」と熊谷が、いさめに遏はしたなう、寄るも寄られず悲しさの、ちゞに碎くる物思ひ、次郎直實謹んで、「敦盛卿は院の御胤、此の花江南の所無は、則ち南面の嫩、一枝をきらば一指を切るべし、花に準へし制札の面、察し申し討つたる此の首、御賢慮に叶ひしか、但し直實過りしか、御批判いかに。」と言上す。義經欣然と實檢まし〳〵、「ホ、花を惜しむ義經が心を察し、アよくも討つたりな。敦盛に紛れなき其の首、ソレ由緣の人もあるべし、見せて名殘を惜しませよ。」と、仰せ聞くより、「コリャ女房、敦盛の御首、藤の方へお目にかけよ。」「アイ。」あいと許り女房は、あへなき首を手に取り上げ、見るも涙に塞がりて、かはる我が子の死顏に、胸はせき上げ身もふるはれ、持つたる首のゆるぐのを、領くやうに思はれて、門出の時にふり返り、につと笑うた面ざしが、

有ると思へば可愛さ不憐さ、聲さへ咽につまらせて、「申し藤の方樣、御歎き有つた敦盛樣の此の首。」「ヒヤア是れは。」「サイナア申し、これよう御らんあそばして、お恨みはらしよい首ぢやと、譽めておやりなされて下さりませ、申し此の首はな、私がお館で、熊谷殿と忍び逢ひ、懷胎ながら東へ下り、產み落したは、ナこれナ、此の敦盛さま其の節おまへも御懷胎、誕生ありし其のお子が無官大夫樣、兩方ながらおなかに持ち、國を隔てて十六年、音信不通の主從が、お役に立つたも因緣かや、せめて最期は潔う、死なされたか。」と怨めしけに、とへど夫は瞬きも、せん方涙御前を恐れ、餘所にいひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり。藤の局は御聲曇り、「ナウ相模、今の今まで我が子ぞと、思ひの外な熊谷の情、其方は嘸や悲しかろ、かうした事とは露しらず、敵を取らうの切らうのと、いうた詞が恥かしい。我が子の爲には命の親、忝い。」と手を合はせ、「此の首の生世の中、逢ひ見ぬ事の悔しや。」と、俱に歎かせ給ひしが、「是れに付きいぶかしきは此の濱の石塔、敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ、祕藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り、最前其の笛吹いた時、あの障子に移りしかけは、慥かに我が子と思ひしが、詞もかはさず消え失せしは。」「アいや其の笛の音を聞いてかけ出でし、敦盛の幽靈、人目ありと引きとゞめ、障子ごしの面かけは、義經が志。」と、聞いて御臺は我が子の無事、悟りながらも帚木の、有りとは見えて隔てられ、又も涙にくれ給ふ。折節風に誘はれて、耳を突きぬく螺貝の、音かまびすく聞ゆれば、義經はいさみ立ち、「ヤア〳〵熊谷、著到知らせの螺の音、出陣の用意々々。」と、仰せに直實畏まり、急ぎ一間に入りにけり。最前より樣子を聞き居る梶原平次、一間の内より躍り出で、「斯くあらんと思ひし故、石屋めを詮議に事よせ窺ふ所、義經熊谷心を合はせ、敦盛を助けし段々鎌倉へ注進。」と、言ひ捨て驅け出す後より、はつしと打つたる手裏劍は、骨を貫く鋼鐵の石鑿、うんと許りに息絶ゆる。スハ何者といふ中に、たち出づる石屋の親父、「ハ、アお前方の邪魔になる、こつぱを捨てて上げました。扨幽靈の御講釋、承つて先づ安堵もうお暇。」と立ち行くを、「ヤア待て親父、コリヤ彌平兵衞宗淸待て。」と、義經の詞に惚り、はつと思へどそらさぬ顏、「ハレやれ〳〵とつけもない、御影の里に隱れのない白毫のみだ六といふ男でえす。」「ハ、、、誠や諺にも、至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此の三つは、人間一生忘れずといふ、其の昔母常磐の懷に抱かれ、伏見の里にて雪に凍えしを、汝が情を以て親子四人が助かりし嬉しさ、其の時は我三歲なれども、面影は目先に殘り、見覺えある眉間のほくろ、隱しても隱されまじ。重盛卒去の後は、行方知れずと聞きしが、ハテ堅固で居たな滿足や。」と、聞くよりみだ六づか〳〵と立ち寄り、義經の顏穴の明く程打眺め、「テモ恐ろしい眼力ぢやよなア、老子は生まれながらに聰く、莊子は三つにして人相をしると聞きしが、かく彌平兵衞宗淸と見られた上は、エ、義經殿、其の時此方を

見遁さずば、今平家の楯籠る鐵拐が峯、鵯越を責め落す大將はあるまい物、又池殿と言ひ合はせ、頼朝を助けずば、平家は今に榮えん物、エ、宗清が一生の不覺。是れに付けても小松殿御臨終の折から、『平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隱し、一門の跡弔へ。』と、唐土育王山へ、祠堂金と僞り、三千兩の黄金と、忘筐の姫君一人預り、御影の里へ身退き、平家の一門立ち給ふ御方々の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建て置きし、施主の知れぬ石塔は、皆これ彌平兵衛宗清が、涙の種と御存じしらずや、今度敦盛の石塔誂へに見えし時も、御幼少にて御別れ申せし故、御顔は見覺えねども心得ぬ風俗は、ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより、心能く受合ひしが、扨は命にかはりし小次郎が菩提の爲、此の濱の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘッェいかに天命歸すればとて、我が助けし頼朝義經此の兩人の軍配にて、平家の一門御公達一時に亡ぶるとは、ハァ、是非もなき運命やな。平家の爲に獅子身中の蟲とは我が事、嘸御一門陪臣の魂魄、我を恨みん淺ましや。」と、或は悔み或は怒り、涙は瀧を爭へり。元來さとき大將義經、「ヤァ〳〵熊谷、障子の内の鎧櫃、ソレ此方へ。」「はつ。」と答へて次郎直實、出陣の出立と好む所の大荒目、鍬形の兜を著し、抱へ出でたる鎧櫃、御目通りに置く。「コリヤ親父、其方が大切に育つる娘へ、此の鎧櫃屆けてくれよ、コリヤ彌陀六。」「ヤアみだ六とは。」「フウ宗清なれば平家の餘類、源氏の大將が頼むべき筋は。」「ム、面白い、みだ六め

頼まれて進ぜましよ、したが娘へは不相應な下され物。マア内は何でござります、改めて見ませう。」と蓋押しあくれば敦盛卿、「ナウ懷かしや。」と藤の方、かけ寄り給へば蓋ぴつしやり、「イヤ此の内には何にもない、オ、何もない〳〵、ホ、是れで些と蟲が納まつた。ナウ直實、貴殿への御禮はコレコレ此の制札、一枝をきらば一指を切つて、ヘッェ忝い。」と、いふに相模は夫に向ひ、「我が子の死んだも忠義と聞けば、もうあきらめて居ながらも、源平と別れし中、どうしてまあ敦盛樣と、小次郎を取りかへようか。」「ハテ最前も話した通り、手負と僞り、無理に小脇にひつぱさみ、連れ歸つたが敦盛卿、又平山を追つかけ出たを、呼びかへして首討つたのが小次郎さ、知れた事を。」と尖なる、話に相模はむせび入り、「エ、どうよくな熊谷殿、こなた一人の子かいなう。逢はうノ〳〵と樂しんで、百里二百里きたものを、とつくりと譯もいはず、『首討つたのが小次郎さ、しれた事を。』ともぎだうに、叱る許りが手柄でも、ござんすまい。」と聲を上げ、泣きくどくこそ道理なれ。心を汲んで御大將、いさみを付けんと、「ヤァ〳〵熊谷、西國出陣時移る、用意いかに。」と仰せに直實、「恐れながら先だつて願ひ上げし暇の一件、かくの通り。」と兜を取れば、切り拂うたる有髮の僧、義經も感心あり。「ホ、さも有りなん。それ武士の高名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目、其の傳ふべき子を先だて、軍に立てん望みは、ホウ尤も。コリヤ熊谷、願ひに任せ暇を得さするぞよ、汝堅固に出家をとげ、父義朝

や母常磐の廻向も賴む。」と親しき御諚、「ハ、ァ有り難し。」とたち上り、上帶を引解き、鎧をぬげば袈裟白無垢、相模、「是れは。」と取りつくを、「ヤァ何驚く女房、大將の御情にて、軍半ばに願ひの通り、御暇を賜はりし我が本懷、熊谷が向ふは西方彌陀の國、倅小次郎が拔けがけしたる九品蓮臺、一つ蓮の緣を結び、今より我が名も蓮生と改めん、一念彌陀佛卽滅無量罪、十六年も一昔、ァ夢で有つたなあ。」と、ほろりとこぼす涙の露、柊に置く初雪の、日陰にとける風情なり。「オ、さうぢやく、我が子の罪障消滅の、加勢は是れ。」と切つたる黑髮、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞくれ給ふ。長居は無益と彌陀六は、鎧櫃にれんじやくを、かけた思案のしめ括り、「コレ〳〵〳〵義經殿若し又敦盛生き返り、平家の殘黨驅り集め、恩を仇にて返さばいかに。」「オ、夫れこそは義經や、兄賴朝が助かりて、仇を報いし其の如く、天運次第恨みを請けん。」「げに其の時は此の熊谷、浮世を捨てて不隨者と、源平兩家に由緒はなし、互に爭ふ修羅道の、苦患をたすける廻向の役。」「此の彌陀六は折を得て、又宗淸と心の還俗。」「我は心も墨染に、黑谷の法然を師と賴み、敎へを請けんいざさらば。君にも益御安泰、お暇申す。」と夫婦づれ、石屋は藤の御局を、伴ひ出づる陣屋の軒、「御緣が有らば。」と女同士、命があらば。」と男同士、「堅固で暮せ。」の御上意に、有り難涙名殘の涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將、此の須磨寺に取り納め、末世末代敦盛と、其の名は朽ちぬこがねざね、武藏坊が制札も、花を惜しめど花よりも、惜しむ子を捨て武士を捨て、すみ所さへ定めなき、有爲轉變の世の中やと、互に見合はす顏と顏、さらばく〳〵おさらばの、聲も涙にかき曇り、別れてこそは出でて行く。

第四

道行花の追風

磯千鳥、いく夜寐ざめの物案じ、二世とかねたるたゞのりは、はかなくうたれ給ふとも、又鎌倉へとらはれとも、噂とりく〳〵菊の前、心細布胸あはず、けふ立ちそむる旅衣、きつゝなじみをかさねつる、やしなひ君とかしづきの、老女ひとりをつゐはしら、名は有りながら呼びなれし、うばらの里を出でこして、あづまの空へと思ひ立つ、心の內こそはるかなれ。足よわづれの玉ほこに、末しら浪のむこ川や、昆陽のの池にすむ月も、心はくもる片袖の、其の移り香も筐かと、思ひぞつもる芥川、いつかふしみも跡になし、殿御にやがて近江路と、見え渡りたる風景も、心せかれて行く道は、つまさきあがり小石はら、老女は足をいたはりて、「申し〳〵お姫樣、行く先遠き旅の空、御身の勞れも出でやせん、マァしばらく。」と道芝に、立ちやすらへば菊の前、「オ、みづからが氣のせく儘、跡先見ずに

道を急ぎ、年寄つたそなたの難儀、足が痛みはせぬかや。」と、鉢叩　互にとうつとはれつる、しんみじみの底ふかき、にほの浦なみ山々も、しげりし峯は八わうじ、磯べに見ゆる唐崎の、松は扇のかなめとや。あれこそしがの山ごえの、よき詠めぞと敎ふれば、菊の前打ちながめ、「ナウしがの山とはあれなるか、懷かしや忠度樣の御詠歌を、千載集へ父上が、撰み入れ給へども、敕勘の御身を憚り、讀人しれずと末の世まで、御名を削りしほいなさを、御歎きの涙にて、濡れし筐の片袖は、忍びあふ夜の添臥も、冷泉君は左が寐がつてに、打ちきせ給ひし口ずさみ、面影のかすめる月ぞやどりける。はるや昔の袖の涙に、袖の涙やありし夜の、主は雲居に隔たりて、昔語りとなり給はば、此の身の果てはいかならん。」と、歎きに草の露ぞうく、同じ思ひを押しかくし、老女は力つく杖に、道をたすけて行くさきを、たぐり寄せなん布引山、心も關の別れより、伊勢やをはりの海面に、立つ波を見ていとどしく、過ぎにしかたは遠ざかり、しらぬ山々里々に、日をかさね夜をかさね、ほつれし髻に風いとふ、濱松過ぎて山坂に、かゝりまりこやおきつなみ、富士のけぶりの立ちのぼり、行方もしらぬ旅人の、姫ごぜづれとわる口に、唄君と添ひねにともしびよせて、かゝげて見ればそうたか〳〵、いとはづかしや、けせばいとしいお顏が見えぬ、是れぞ誠に戀のやみ、さういうたがむりかえ。いとはづかしや、けせばいとしいお顏が見えぬ、是れぞ誠に戀のやみ、さういうたが無理かえ。むりもわやくもしたがひの、つまにふたゝび大いそと、心許りはいそがれて、足はもつるゝ藤澤や、えにしの便り星月夜、鎌倉にこそ三重著きにけれ。榮えぬる平家の一門悉く、西海の波に亡び、再び榮ゆる源氏の御代、猶長久の御祈願と、鶴が岡の八幡宮、新たに造營ありければ、日々に威を增す神詣で、賑ふ空も長閑なる、向うの方よりのつさ〳〵、供人引連れ醒井兵太、「ヤァ家來共、道々もいふ通り、主君賴朝公より、『平家の餘類は根を斷つて葉を枯らせ。』との仰せによつて、隱れ忍ぶ殘黨を、取り縛むる身が役目、隨分四方に眼を配り、うさんな者を見るならば、男女に限らず搦めとれ、手柄はそち達褒美は某、急度申し渡した。」と、「はい〳〵〳〵。」も仰山に、社深くぞ入りにける。跡に社參の一羣は、徒士の附々も、一際目立つ旅乘物、松陰に早きするて、「是れは鶴が岡八幡宮と申しまして、源氏の御代を守りの御神、御拜がてらに風景も、御覽なされて然るべう、存じまする。」と、頭をさぐれば乘物より、武士にはあらぬ風俗は、九條の町に全盛を、菅原といふ太夫職、「是れは〳〵今都では口利きの牽頭樣、喜六樣、宗助樣などというて、大概甘い若樣達は、水銀なしにてん〳〵から〳〵、天上さするからくりの名人樣達、それを供の侍にして、眞にマァ變つた趣向ではないかいなァ。かう打揃うていたらば、主はきつい機嫌であろ。そしてもう六彌太樣の屋敷は、爰からはつい近いげな。三年振で顏見ようかと、私や飛び立つ樣に思うてゐるわいなァ。」「いかさま是れは御尤も、此の喜六宗助

は日比旦那のお氣に入り、お供をするもお馴染だけ。是れからお前は大名の奥樣、訛りちらす女中の中へ、『オ、しんき私やいやいな。』と、今までの臺詞ではマア舞臺つきが濟みませぬ。高が旦那は幕の内、御一門のお付合ひなどは路考慶子で雲上に、萬事そこらはちふんの間で、お付合ひなされませ。」と、餘所へ通ぜぬ敎への詞、しつた同士こそ涼しけれ。「そこらは私が魂膽してゐる、帶の仕樣も此の形も、藏屋敷の振舞で、よう見て置いた屋敷の風俗、遁すものぢやないわいな。」「おつとよし〳〵、それはさうぢやが、久しぶりのお寢間の段、御勞れの出ぬ樣に、地黃丸でも上つて。したが必ず藥酒は御無用。」と、話し半ばへ、家來引連れ醒井兵太、「ヤア鎌倉に見馴れぬ女の風俗、都者に極まつた。平家の餘類も疑はしい、連れ歸つて吟味する、ソレ引立てい。」と立ち蒐れば、傍に二人の牽頭はわなわな「都者とは御粹方。したがお尋ねなされます、平家とやらかつけとやら、微塵も覺えはござりませぬ。」「ヤア僞るまい〳〵、武士に似合はぬがちく〳〵と震ふは曲者、ソレ縛れ。」と、二人を投げ付け蹴飛ばせば、物に馴れたる菅原は、さわがぬ色目しとやかに、「イヤこれ聊爾さんすなお侍、自らは岡部六彌多忠澄が女房。」と、聞くよりも醒井兵太、「スリヤおまへ樣には六彌太殿の御内證とな、是れは是れは存ぜぬ事とて慮外千萬。拙者儀は則ち六彌太殿の下目付、イヤモウ何が物でござります。當時はききの六彌太殿へ、かういふ事が聞えては。何さ〳〵、兎に角これは家來共が麁相、ハテ不調法千萬。」と、まじめになれば二人の牽頭、「醒井兵太頭が高い。」「ハア。」「ま些と高い。」「ハア〳〵。」と家來も一度に眞倒、額を土にすり付ける。其の間に菅原目まぜでしらせ、乘物上げさせ足早に、引添うてこそ急ぎ行く。跡には一度に顏を上げ、「是れはしたり夢ではないかや。」「サ夢ぢやによつて醒井兵太、皆こい〳〵。」と打連れて、松陰にこそ走り行く。跡へしと〳〵二人連、花や楓と見し夫の、便りを何と菊の前、詞の林打連れて、あてども波のかげ遠き、宮居を暫し伏しをがみ、「何とマア林此の樣にうか〳〵とさまよふも、忠度樣のお顏が見たさ、須磨の軍の亂れより、どうなりなされた事ぢややら、此中は打ちつゞき夢見の惡さ、わしやいかう氣にかゝるわいの。」「お道理〳〵、そりや此の乳母も同じ事、以前の夫は平家の侍、兄と妹と二人の子の親、樣子有つて退き去りした、かはいけもない夫さへ、思ひ出すが女のならひ。娘は都に勤め奉公、兄太五平も軍に出ると言ひましたが、どうなりをつた事ぢややら。お前も私も思ひ出す事許りで、夜がなよつぴと泣きくらす、長の旅路の御氣休め、ちと牀几へ。」とすゝめられ、涙交りの身の上話し、竝木の陰に誰やらん、深編笠の浪人姿、後の方には醒井兵太、樣子立聞く家來共、「ソレ搦めよ。」と追取りまく。林は姫を後に圍ひ、「ヤア聊爾せまいぞ、我々は八幡樣へ參詣の者、何故に搦めよとは。」「ヤアぬかすまい、聞いた所が忠度の妻菊の前、平家の餘類遁れぬ所。」と林をひき退け、姫君に飛び蒐るを、「なうコレ待つて。」ととむるを蹴倒

し、泣き叫ぶ菊の前をひんだかへ、既に危き折柄に、深編笠の侍が、兵太が利腕ぐつと捻ぢ上げ蹴飛ばせば、「アイタ、、ヤア爰なあみ笠め、大切な科人を召捕る役目の妨げひろぐ。先づ汝から詮議あるやつ、縛れよ叩け。」と立ちかゝれば、物をもいはず雑兵を、宙に掴んで天狗の礫、ばらり〳〵と投げ飛ばせば、「命が大事ぢや家來共、皆こい〳〵。」と言ひ捨てて、逸散にこそ逃げて行く。跡に二人は胸押しなで、「是れは〳〵どなたかは存じませぬが、危い所へお蔭故。コレおまへもお禮おつしやれ。」と、姫君倶々嬉し泣き、手を合はすれば、「ア、これ〳〵、お禮には及ばぬ嘸難儀、シテ承れば女中には忠度殿に縁の有る菊の前とな。」「ア、いや左樣では。」「ハテお隠しなされな、とつくと樣子承つた。おいとしや忠度卿には早御果てなされたわいの。」「エ、そりや眞か、シテ〳〵樣子は、御存じならば聞かしてたべ。」と、そゞろ涙のふるひ聲、「オ、恟りはお道理〳〵、先つ比すまの浦の合戰に、岡部六彌太忠澄に渡り合ひ、右の腕をうち落され、つひにあへなく御さいごと、たしかに世間の取沙汰。拙者京都の者なれば、兼々和歌の名人と、聞き及んだ忠度卿、お話し申すも他生の縁。」と、聞く内よりも姫君は、「こは何とせんおいとしや、跡に殘りて自らは、何樂しみにながらへん、なむあみだ佛。」と懐劍にて、自害と見ゆるを、「なうコレ待つて。」と、林がなだめ止めても、「イヤ〳〵〳〵はなして殺して情ぢや。」と、とゞむるかひも泣きさけぶ。「イヤサこれ女中、死ぬる命を忠度卿の爲に捨てうと思ふ心はないか。」「ム、何といはしやんす、過ぎ行き給ふ忠度卿の爲に、此の命を捨ていとは、どうしたらまたお爲になりませうな。」と、いふに浪人傍をながめ小聲になり、「さすがは俊成卿の御息女、雲の上人ほどあつて、敵を討たうといふお心が付かぬか。」と、言はれて姫君涙をはらひ、「ほんにさうぢや悲しいと許りに心が付いて、夫の修羅の妄執をはらす、敵といふは岡部六彌太、林おぢや。」「お姫樣ござりませ。」と、逸散にかけ行くを、「ア、これ〳〵待つた〳〵、其の樣にしどけなうては、ア、敵討心元ない。岡部六彌太忠澄というては、武藏一國の大名なれども、おのれ討たで置かうかと女心の一念力、とくと固まりましたかな。」と、心さぐれば二人共、「眞にさうぢや。」と懐劍にて、互に自身の髻を、切らんとすれば押し留め、「いかにも御心底見えました、未來の夫へ命を捨て、又の夫は重ねぬといふ切髪、倶に付添ひ尼法師と、樣をかへても主人の敵、討たさうといふ老女の誠、オウ遠れ見事々々。縁はなけれど見捨てぬは、武士の情。」と矢立取り出し、涕紙にさら〳〵さつと書き認め、「コレ此の通り敵の方への入込みやう、御縁あらば重ねて逢はう。」と立ち歸れば、「ハアはつ。」と押頂き、「イヤこれ申しお前のお名は。」と問ふ隙も、松吹く風に隔てられ、主從二人點頭き合ひ、立ち別れてぞ　三重急ぎ行く。「ナント作藏彌嘉内上方からけふ奥樣がござるといふが、旦那六彌太樣の奥樣か、但しは隠居樂人齋樣の奥樣かいなァ。」「こな奴しらないな〳〵。けふござる奥樣といふはな、

旦那樣が上方でこつてりと談じやつたお色だわやい。」「何お色とは紅の事ではないかい。」「イヤ此奴きようがる兵ではある。色といふはな都九條で菅原といふお傾城の事だわやい。」「スリャあの十文字とやらふんであるく、國太夫節の親方殿か。」「オイやい、旦那六彌太樣の奥樣になりに、けふ此の内へぬめり込むのさ。なんとうまい事ではないか。」「イヤサ夫れはさうと、合點のいかないは是れの隱居樣、御子息の六彌太樣とは、同年ぐらゐの親子の中、おらは新參者で樣子はしらないが、ありやマア何たる事だいなア。」「おらもすつきり合點がいかない。親御樣ぢやというて、あの樣に大事にさつしやるは、若しは旦那の念者ではあるまいか。」「したが念者を兄分といふは聞いたが、親分とはあたらしい。」と、仇口々の折からに、門前賑ふ遠見のしらせ、「上方の奥樣唯今是れへ御入り。」と、いふもとつかは奥よりも、待ち設けの女中方、著連れ打連れ出迎へば、早舁き入る、乘物に、牽頭末社を供廻り、思ひ付きなる出立は、しろとめかざる風情なり。中にも小槇は局役、しとやかに手を支へ、「是れは〳〵長の御道中、御機嫌宜しうおめでたいお國入り、いざマアお入り。」と乘物の、戸を明けお手を取り〳〵に、かしづかれつゝたち出づる、姿は武家を俏せども、昔を殘す詞くせ、「是れは〳〵みな樣いかいお取持ち、どれがどれやらうひ〳〵しい、萬事は皆を賴むぞえ。なんと喜六主宗助主。」と、いはれてシツシ、「はてこれ申し、いゝえいなア、わしや聞えぬはむつ樣、久しぶりの女房の顔、

『ヤレ菅原か久しや〳〵。』と、出さんしさうな所を、昔に變らぬ思はせぶりか、わしや逢うたら一通り、きつと一番言はねばならぬ。」と、長う坐るも日比のならはせ、傍には手に汗、「コレシツシ。」にちやつと居直り、「ほんにマア私とした事が、始めての付合ひになめたらしい、オ、笑止。」と袖覆ふさへ里めかし。「何と皆見やつたか、都女中はわさ〳〵と、かぶき芝居を見る樣な風俗。眞にそれ〳〵、いや申し奥樣、殿樣は今日叶はぬ御用で外へお出で、お歸りも追付。まあ夫れまではお勞れ休め、お湯でもめして緩りつと、御祝言の御用意あそばせ。皆のお衆は勝手で休息、いざさせ給へ。」と皆々は、奥と口とに立ち別れ、打連れてこそ入りにけれ。ほどなく又もしらせの侍、「奥方樣都より只今お入り。」と、詞の下より妹局、「こりやまあどうぢや、どちらぞが狐ではないか、是非一人は紛れ者に極まつた。どうやら奥にござるのが、オ、笑止の詞付き、尻聲がなかつた、化かされまいぞ合點か。」と睫をぬらす其の隙に、日がさにつるゝ八文字、梅や櫻と見ゆれども、散りてかひなき袖の露、やつせば俏す菊の前、昔の雲居の月にめで、けふは浮身を川竹の、流れに染めるはで衣裝、林は花車に身をかへて、赤前垂の紅も、顔の紅葉と照り添うて、他所目を包む里詞、「コレ申し太夫さん、爰が日頃逢ひたがらんしたむつ樣のお邸、けふといふけふ天下晴れての奥樣遠慮はない、必ず氣をしつかりと持たしやんせ。」と、いへど萎れし菊の前、「我のみ世をば卿ち顔、別れにし其の日許りは廻りきて又も

返らぬ人ぞ戀しきと、上東門院の女房伊勢大輔の歌の心、夕の雲朝の雨と誓ひし事も楚王の夢、儚いは浮世、味氣なの此の身の上。」と許りにて、思はず結ぶ露時雨、「ア、これ〳〵夫れはまあ何いはしやんす、あられもない事許り。エ、聞えた、昔の勤めを隱さうと、堂上めかしてオ、虚言、都九條の お傾城菅原といふ事は、何ほ隱しても知れてある。皆の女中は都勝り、粹の上盛りナア皆樣、宜しう萬事お指圖。」と、いふ間あらせず先走り、「旦那お歸り〳〵。」と、しらせに 妓口を揃へ、「サアもう樂ぢや、一時に二人來た娼御の正體、本阿彌にかけたらば、ついくら紛れにさぐつても、はひり付けた門口は、心覺えが有りそな物。」と、言ひ捨て奥へ入る跡へ、岡部六彌太忠澄は、威勢も高き廣書院、徐徐かへる廊下口、二人は見るより、「あの此方は、きのふ逢うた深編笠の 侍、いか樣日外見しり有る六彌太殿に似た顔と、思へどかはりし形恰好、ふしぎにあつたが其のこなたが。」「いかにも横目の忍び姿、岡部六彌太忠澄さ。」「スリヤ願ふ所の夫の敵。」と、手早く懷劍突つかくる、二人の利腕しつかと押へ、「コリヤサ〳〵まだ祝言もせぬ中から、悋氣いさかひ早い〳〵ナ合點か、此の六彌太を付け覘ふ、ナ付けつ廻しつ戀ひ慕ふ、其の女房を合點で、呼び迎へたは互の心底、年月疎遠に打過ぎた、恨みもあらう憎からう道理ぢや。ハテサ 唄 憎い〳〵は可愛の裏よ、ハ、、、嬉しい〳〵、したが走るを妾といふ聘るを妻といふ、婚儀は人の大禮なれば、表立つて祝言を、取結ぶは暮六つ。寢物語は浮世の夢、老女一間に伴ひ、用意をしめされ。身は大切な親人へ、今日の御機嫌伺ひ、マア夫れまではおいきやれさ。」「スリヤ暮六つ限りに婚禮の用意、忠澄殿、忠澄樣、待つてをりますぞえ。」「ハテ扨せく事はないおいきやれ。」と、詞の目釘打ちしめし、心隔ての襖と襖、引き別れてぞ 三重入りにける。

さを鹿の、夫待ち兼ねて菅原は、そろ〳〵出づる奥の間は、音も耳なれし里の歌、 唄 誠なれども、あはねば謔よ、辛氣心のやるせなや、「アノ胡弓三絃は、御隱居樣をいさめの御酒宴、眞に歌の節ではある。何ほ六彌太樣の心は變るまいと思うて居れど、三歳隔てて逢ふまでは、私やどうも心が濟まぬ。逢うたらどうしてかうして。」と案じも同じ菊の前、暮六つまでもとけしなく、欺して討たん下心、忍び出でたる脊と脊、べつたり行き合ひ、「ア、怖。」と、飛びのく二人が顔じろ〳〵、「ハ、お前はどなたぢやえ。」「ハイ私は私ぢやが、マアさうおつしやるおまへはどなたぢやえ。」と、問ひかけられて菊の前、「わしは、アノ慮外ながら、岡部六彌太が奥樣、都九條の菅原といふしやの果てでござんす。」と、聞いて菅原、「ホ、、、こりやをかしい、其の菅原といふ傾城の、御本家樣をとらまへて、菅原といふしやの果てぢやとは、テモきつい間違ひやう、ム、妓衆か但し又家中衆のお内儀樣か、近付になりましよ。」と、上から出れば菊の前、「イヤ〳〵和歌三神を證據、其の菅原は私ぢやわいな。」「イヤおれが事ぢや。」「イヤ〳〵わしぢや、私ぢや〳〵。」と、聞いて菅原呆れ果て、「コリヤまあ何のこつちや。

ム、聞えた、扨は大事の夫を吸ひ取らうとする、鼬の様な女ぢやな。そしてまああた憎てらしい、あの美しい器量わいの。サア〳〵こりやもう氣疎い、かんしやくが發つてきたわいな。ム、よい〳〵互にいうては水かけ論、深い淺いは夫が證據、たとひ年號は變るとも、いかな〳〵變らぬ中。直々逢うて吟味する、サ、おぢやいかう。」とたち上れば、「ヤア〳〵兩人待て〳〵。」と聲かけて、搖ぎ出でたる此の家の隱居、名も身の上も樂人齋、はうろく頭巾大袍、左右に胡弓と三絃を提げ、二人を尻目にかけ、「ア、紛らはしき二人の菅原、詮議の道具は此の胡弓と三絃、誠や傾城白拍子は、酒色に流れて淫聲を顯はす。二人の内どちらでも、誠傾城菅原に極まれば、祝言さするは此の親のこふけ。サア彈け聞かう。」と褥の上、脇息取つて打凭れ、「サア兩人ハテしぶとい、何隙どる。」と手詰の場所、「ヤア〳〵親人、音曲お聞きなさるゝに及ばず、其の一人の紛れ者ひき出して、お目にかけん。」と立ち出づる、六彌太を取つて引きよせ、「ヤア小ざかしい、親をもどく不孝者、見るも中々いま〳〵しい。」と、脇息取つてつゞけ打ち、「なうコレ待つて。」と菅原と、俱に驚く菊の前、わなゝきふるへば六彌太が、衿がみ取つて引きよする、共に若木の親子の中、樣子ありげに見えにける。「サア彈け女、ヤアきよろ〳〵と何うじつく。」とせんかたも、涙かた手に連彈の、心々やかはるらん。唄身をすつる、里あればこそ浮む瀬の、あるを賴みにうき勤め、「ヤアもうよいひくな、詮議は濟んだ。九條の町の傾城菅原といふは、此の女に極まつた。」と、思ひがけなき菊の前、「アイ〳〵お前は強い調子聞き、とてもの事に祝言を。」と、いそ〳〵すれば、「氣遣ひすな、モウ暮六つに程もあるまい、勝手へ入つて用意々々。」「ア、忝いコレこちの人、必ず詞違へまい。」と、敵討たうの氣ははり弓、「ア、これ〳〵。」と菅原が、とむるもよそに走り入る。やらじとかけ入る菅原を、ひき留めて樂人齋、「我が上方にありし時、見ぬ戀風に憧れし、九條の里の傾城菅原、けふといふけふ廻り逢ふも不思議の因緣。倅六彌太、此の女に暇をやれ。」「エ、それは。」「夫れはとは得心せぬな、サア〳〵〳〵どうぢや。」とせり詰められて返答も、呆れ果てて見えにける。「イヤこれそこな若い親父樣、こなさんは〳〵〳〵彼方を『眞の菅原ぢや。』というて、今又私を菅原ぢやの、イヤ見ぬ戀に風ひいたのと、がつくりそつくりな物の言ひやう。若し又六彌太樣がさらんしたらどうせうと思はんす。」「オ、女房にして抱いてねる。」「エ、。」「ム、、ム今奥へやつたはな、ありや、薩摩守忠度が、言ひ交した菊の前さ。倅六彌太は夫の敵、祝言といふは僞り、女に涙もろい倅のうんつく、敵を討たれるアリヤ約束ぢやわやい。」と、聞くより菅原狂氣の如く、「そんならあの今の女中樣に、命をやつて此のわしとは、どの命で添はしやんす。海山こえて遙遙と、添ひにきた女房の、身にもなつて見たがよい。餘りの事に涙さへ、胸に冰つて出ぬわいな。」とたゝく疊のいひがひなき。「ヤアとても命のねぐさつた六彌太、連れそうてもいんまに若後家、娵に歎

きをかけるも不便、コリヤ子より達者な此の親父、思ひこんだる戀の意地、おうといはうがいふまいが、けふの今から身が女房、おうといへやい〳〵、親孝行ぢや。ヤイ、倅きり〳〵暇の狀をかけ、子は三界の首枷とは、今身の上にしられた。」と、傍若無人の横車、持て餘してぞ見えにける。菅原涙打ちはらひ、「ほんにさうぢや、他の女に見かへる夫、心中立つるは大きな愚癡。」「そんならおれに隨ふか。」「オ、隨ふ段か帶といて、ねて花やろ。」とたち寄るふり、側なる刀拔打ちに、切つて掛るをかい潛り、「ヤアこりやちよこざいな、ほでてんがう。」と、跳ね飛ばせば、透間なく又切りかくるを、眞のあてうんと許りに倒るれば、六彌太透さず取つて投げ、注連を餝りし箱よりも、陣笠鎧ひき出せば、見るよりハット樂人齋、ひるむ所をはつたとねめ付け、陣笠鎧兩手にさゝげ、「なんと親人、此の二色の笠鎧、覺えがあらう見しりつらん、誠や故人の詞にも、用ゐられる時は鼠も虎となるといふは、まだも能ある人の身の上、こな天命しらずの匹夫め。今改めていふにはあらねど、女房菅原が六彌太をふがひなしと思はん面ばれ、もとこなやつは六彌太が旗持の雜兵、所存あつて此のごとく、親と敬ひ尊敬すれば、方量もなきかねての我儘、あまつさへ我が女房に無體の戀慕、無法非道の人畜め。惡く動かば五體を八つ裂き、サアウひつとでも動いて見よ。」と、鎧をもつてさん〴〵に、折れよ碎けと打ちなやせば、頭巾はぬけて綴鬢奴、興の醒めたる風情なり。恥を恥とも思はぬ強惡、「ヤイこな六彌太の恩しらずめ、今鎌倉で岡部六彌太といはれて、榮花にくらすは、誰樣が蔭ぢやぞやい。わりやおめおめと忠度に組みしかれたを忘れたな。其の時に此の郎等、右の腕を切り落さずば、コリヤ此の首は有るまいがな。いはば手柄は此の奴、よいわ是れからばれ次手、鎌倉殿の御所へいて、六彌太が高名は此の鼻がさしましたと、注進の上武藏一國、我が手に入るが意趣晴らし、待つてをれ篦棒め。」と、かけ行く所を菅原が、さうはさせぬと切り付くる。六彌太は只たばこの煙、さわがぬ太五平、菅原を膝の下にしつかとねぢ付け、コリヤまつ此の如く薩摩守忠度が、あの六彌太を下に組み敷き、首をかかんとせし所、一閧をかけ出で菊の前、かう切つたかと太五平が、右の腕を打ち落し、「敵といふは六彌太殿と思ひの外、誠の敵は此の太五平、夫の恨みを止めの刀、おもひしれ。」とたち寄り給へば、「ヤアこれ今暫く待つてたべ。」と、起き上る太五平は、手負に屈せぬ強氣の面色、「ア、忝い〳〵姫君。此の奴が念がとゞいて、よう切つて下さりましたの、コリヤ妹初霜。」と、聞いて悔り菅原は、「ムウ初霜といふは私が稚名、夫れを知つたこな樣は。」と、問はれて太五平涙をうかめ、「オ、かう許りいうては合點の行かぬは尤も、おりや稚い時に別れた、わが兄の兵之助ぢやわやい。」と、聞くに愈ふしぎはれず、「ム、其の又現在兄樣が、此の妹に、『惚れた。』といひ、そして何ぢや、『姫君樣、よう切つて下さつた。』と、覺悟の樣子は合點がいかぬ。」「オ、疑はしいは尤も。今さら語るも涙の種、姫君樣

も聞いてたべ、元我が親は。」「オ、其の譯は此の六彌太が推量に違はず、汝が親は平家の大將、三位中將重衡の家臣、臆病者の名を取りし、後藤兵衛守長で有らうがな。」と、聞いて太五平、「ハ、はつ。」と仰天、「ア扨々驚き入つたる忠澄殿の明察、草にも心置く露の、宿り定めぬ我が生立、御存じしられし樣子はいかに。」「オ、それ誰か有る、繩付ひけ。」と詞の下、思ひがけなき乳母の林、見るめ悒き繩目の恥、妹は見るより、「ナウ母樣かお懷かしや。」と走り寄り、「此のマア繩目は何故。」と、姫も手負も驚けば、「イヤ始終の樣子一通り六彌太が言ひ聞かさん、菊の前もお聞きあれ。さいつ比都出陣の折から、御身の父上俊成卿より密かの内意、『和歌の弟子たる忠度は、一方ならぬ緣もあれば、くれぐれ賴む。』と餘儀なき仰せ。所に源平生田の合戰、向ふ敵と渡り合ひ、互に馬を乘り放し、念なう下に組み敷きしが、面ざし見れば見知りある忠度卿、扨こそ俊成卿の御賴みは爰ぞと心得、助けんと思ひながらも名ある敵、いかゞはせんとためらふ中、力勝りの忠度卿に、はね返されて此の六彌太、組みしかれしを下郎の汝、思ひがけなく後より、右の腕を切りし故、いたはるかひも涙ながら、御首討つてをこがましう、武門の數に列なる中、合點のいかぬは汝が胸中、忠度卿に打ちかけしは、紛ひもなき源氏方。夫れには違ひ詞のはし〴〵、源氏をさみする面魂、ハテ心得ずと思ふより、豫て見置きし此の頭巾、裏に正しく書き付けしは、三位中將重衡の戒名、朝夕戴く心の底、扨こそしれもの手ばなされずと、おもひ付いたる恩ごかし、親と敬ひ是れまでに、心を付けしは其方が、謀叛を押ふる情の獄屋。今日是れへ兩人を、そびき入れしは汝が素性、責めさいなんで尋ねん爲、所に思はず其方が、己と名のるはこりや下郎の猿智慧。なんと思ひしつたか。」と、始終を聞いて太五平は、肌骨を貫く吐息の炎、母は涙の顏を上げ、「後藤兵衛守長殿に連添ひありしは二十年以前、七つと三つのあの子供を、付けて離別の憂き難儀、妹が乳にて漸うと、俊成卿へ乳母奉公、妹は傾城あの兄は、有るにあられぬわん白太郎。侍の子というたらば、猶我儘が募らうかと、勘當して置く其の中に、いつぞや太五平我が内へ、刀を盜みにはひつたを見付けて聞けば軍に出づると、いふこそ幸ひ、『高名して、侍の名を顯はせよ。』と、家の系圖を折紙と、刀に添へてやつたるが、返つて害になつたよな。」「オいかにも貰ひし其の系圖、開いて見れば我が親は、後藤兵衛守長ァ、恥かしからぬ平家の侍、おのれ何でも源氏に紛れ込み、雜兵となり裏切りし、親守長に對面せんと、勇みに勇む一の谷、後藤兵衛守長は、主君中將重衡を、ふり捨てて逃げたりし臆病者、畜生武士と軍中の取沙汰。なむ三寶我が親は、不覺の惡名取りしかと、胸に磐石五臟に石火矢、なんぼう無念に有りけるか。よし〳〵源氏の侍の首取つて高名し、親子の恥を雪がんと、心を碎く生田の戰場、夕暮空の仄ぐらく、浪打際にひつ組んで、上になつたは慥かに貴殿。シャ六彌太殿と思ふより、右の腕を只一討。よく〳〵見ればこ

はいかに、薩摩守忠度卿、ア、しなしたりな。よし其の場にて腹切らんとは思ひしかど、イヤ〳〵忠義を顯はす時節もと、味方顔にて御首を、やみ〳〵此方に討たしたる、無念といふも我が誤り。かくけどられし上からは、我が一分の我を立てても、とてもせんなき平家の御運。せめてはいらざる此の命、姫君に討たれんと、殺されに出た手柄話し。エ、おでかしなされた姫君樣、忠度卿の右の腕、切つた刀で切らるゝも、此の世の因果をはたす道理、思へば〳〵不運なる、我が身の上」と悔み泣き。扨はと驚く人々の、中に妹は傍にある、刀取り上げ涙ながら、顔見ぬ父の筐かと、思へばいとゞ胸せまり、くどき歎けば太五平は、妹が持つたる拔刀、手を持ち添へてめての脇腹、ぐつとつつこむ覺悟の最期。「こは〳〵いかに何故。」と、親子は心とり亂せば、「ア、騷ぐまい〳〵。」とおし鎭め、「平家方の此の兄を、切つたは妹が源氏へ忠義、此の一刀の手柄に免じ、申し六彌太殿、必ず見捨ててやつて下さりますな。たつたふたりのはし折りかゞみ、私や彼奴がふびんにござる。成人して名は菅原と聞いたを便り、上方へ登つた次手に九條の町、なつかしさに逢はうと思へど、身はかくすけのさびた形、全盛かざる妹が恥と、三筋の町の格子の先、よいよ鹿子樣、ヨウつりひ樣と、ぞめきに紛れて名をとへば、客に揚げられ柏やの、二階の障子に影法師、三絃取つてなげぶしの、聲を聞いたがコリヤ兄弟の名乘。其の時の音色も聲もあり〳〵と、おりや耳の底にしみ付いて、今に忘れぬ兄弟のよしみ。それ故最前三絃で、慥かに妹と見極めても、平家に緣あるそちなれば、よもや添うては下さるまじと、現在妹に、女房になれの惚れたのと、心に思はぬ惡黨も、かくはからはん心の内、推量してたべ母者人。エ、遂に一日孝行せず、先だつ不孝赦して下され、せめて未來は、勘當々々を。」と、跡いひかぬるいぢらしさ。母は取分け妹も、正體涙に菊の前、「我とても恩と情に絡まされ、敵さへなき身の上は、兎にも角にも我が夫の、甲斐なき御運。」と許りにて、見合はす四人がとも涙、前後ふかくに見えけるが、何思ひけん六彌太は、林が繩目引きほどき、「太五平が白狀にて、家名知るれば詮議に及ばず、女ながらも敵の餘類。ヤア〳〵後藤兵衛が妻娘、此の家に叶はぬ早出て行け。」と、聞いて菅原今更に、「そりや餘りぢや胴慾ぢや。」と、いふをも聞かず姫と林を引たて、庭へ突き出し、「女房去つた、ハテこりやナ、やり手の付いた傾城菅原、敵の娘と聞いては添はれぬ。元の郭へ流し者、付添ひあるくはやり手の役目。」「スリヤ此のわしは。」「オ、サ兄弟の緣が切れればコリヤ女房、一世の別れの名殘を惜しめ。」と情の詞、ハア盡きせぬ御恩と伏し拜む。折から拍子木家中の夜廻り、六彌太邊に心付き、「コリヤ〳〵そこな傾城やり手、古鄕へ歸る錦の袋、ソレ持つて行け。」と投げ出す。二人はたち寄り取り上げ見れば、行き暮れて木の下陰を宿とせば、オ、其の下の句は、花や今宵の主ならまし。忠度卿のさいごの一首「ヤア扨は筐か、ハアはつ。」と、歎き給へば林も俱に、ありし昔を悔み泣き、「ハ

テ扨これ此の六彌太が寸志の情、源氏は今を盛りの日の出、平家は暮れ行く、アレ約束の暮六つ。夜に入れば敵味方のあいろが見えぬ、ソレ早う〳〵。」「ハァお志忘れはせじ、もうおさらば。」と立ち上れば手負は今ぞ此の世の名殘、花や今宵のちり櫻、妹は一人親兄の、別れを胸に八重櫻、姫は筐の言の葉に、結ぶ心のいと櫻、あとに老木のうばざくら、涙の雨や小夜あらし、生死不定は世の中の、ふだん櫻といさめても、つきぬなごりの山櫻、ちり〳〵にこそわかれゆく。

第五

魏王は鄭袁が讒によつて、美人の鼻を劓がしむるとかや。征夷將軍頼朝公、相從ふ大小名、岡部六彌太忠澄を初め、威儀を正して相詰むる。頼朝御簾に向はせ給ひ「此の度の戰ひに、平家の一門西海の浪の泡と消え失せし事、全く頼朝が武畧にあらず、是れ皆神明佛陀の御加護と存じ奉る。」と、卑下の詞も奥ゆかし。平時忠笏取り直し、「西國にて源九郎義經、平家を悉く討ち亡ぼし、其の虚に乘つて兄頼朝も討取り、一天下を併呑せんと、某を騙り京の君をめとり、神璽内侍所を奪ひ、直に鎌倉へ攻め入らん由、急ぎ告げ知らせん爲來つたり。屹度征伐然るべし。」と、賢人顔の佞人は、いはねど夫れと知られける。六彌太聞き兼ねつゝと出で、「何と言はるゝ時忠卿、義經公に限り、左樣な御所存少しもなく、腰越まで御出で有りしを平山が讒言故、鎌倉へも御入りなく、直に御切腹召さるべきを、舊臣の輩おし留め、我が君への取りなしは、六彌太が披露承る。夫れに御邊が何しつて、控へ召され。」ときめ付ければ、時忠も反打ちかけ、互に色立ち見えければ、頼朝暫しとせいし給ひ、「やをれ六彌太、佞人原が讒言を用ゐるべき我ならず、義經腰越に屯するは、鎌倉を覆へさんとの手配りならん。さすれば弟とて容赦はならず、討ちとつて我が存念を晴らすべし。」と、氣色かはつて宣へば、時忠は思ふつぼ、心の内に含む笑み、六彌太猶も進み寄り、「然らば義經公、誠の謀叛にもなされよ、三種の神器の内、神璽内侍所、此の二品は先達、義經公の御手に有り。帝都を守護し在せば則ち官軍、それに敵對弓引き給ふは朝敵も同然。武備盛んなる時は返つて其の身を害すと申す、此の儀如何。」と言上すれば、頼朝騒がず、「ォ、其の儀は某工夫を凝らし置きたる事あんなれ、其の仔細は安德天皇十握の御劔を携へ、入水ありしと聞くより早く、都八條大納言兼房卿と申し合はせ、老松若松といふ海士子供を浪間に入れて海底を捜させけるに、龍宮城へ奪ひたる十握の御劔を取り返し、兼房卿に差上げしを、御所持有つて御下向、頼朝拜諾仕り、此の桐が谷へ御新殿を設ひ、將軍の宮と傳き、則ち此の宮より綸旨を乞ひ受け、義經との戰ひは、官軍と官軍のはれ勝負、幸ひの諸大名一同の出仕、それ〳〵。」との詞の中、「はつ。」と領掌謹んで、御劔の筥を携へて、御簾間近く持ち出づ

る。頼朝公恭く、寶劒を取り飾り、天顔の恐れありと玉座の御簾、半ば頃まで卷き上ぐれば、各一度に尊敬する。時忠大口明いてから〳〵と笑ひ、「頼朝は智仁兼備の大將と、聞きしに違ひし愚將よな。スリヤ誰によらず寶劒を所持したる者あらば、將軍の宮と敬ふか。」と、つつと立ち寄り寶劒取つて打折り〳〵、白洲へかつぱと投げ付くれば、是れはと皆々仰天敗亡、時忠は緩々と座に直り、「ヤア騒がれそ頼朝、あの寶劒は紛れもなき眞赤な贋物。」「シテ〳〵其の贋物といふ慥かな證據が。」「オ、證據なくて折るべきや。寶劒を所持したる者、當宮に立つるとある故、言ひ聞かする能く聞け。都にて義經某を招き、『何とぞ三種の神寶奪ひ取つてくれよ。』とある、密かの頼み延引きならず、智畧を以て奪ひ取りしかど、呑込めぬ義經が心服故、先づ二色は渡したれども、御寶隨一の寶劒は某が、肌身も離さず屹度所持せり。疑はしくば是れ見よ。」と、懐中よりとりだせば、邊も輝く十握の御劒。頼朝公を初めとして、列座の人々一時に、あつと恐れをなしにけり。頼朝重ねて宣ふは、「今より時忠卿を將軍の宮と仰ぎ奉らん、ヤア〳〵諸大名萬歳を唱へられよ。」と、棟梁の臣の一言に、もつてうじられ勝に乘り、此の上は贋宮をひき出し面縛させんと、ずつと立ち寄り御簾引きちぎればコハいかに、思ひがけなき判官義經、寶劒奪ひ取りもんどり打たせ、足下にぐつと踏み付け給ひ、「ヤア天命しらずの大納言、安德天皇寶劒を懐き入水ありしと僞りしを、合點行かずと察するに御邊が奪ひ所持する由、兄頼朝と言ひ合はせ、樣々心を盡したは、此の寶劒を奪ひ返さん謀、サア尋常に縄掛れよ。」と、仁心深き義經の、詞にひるまぬ横紙破り、無念の顔色はがみをなし、「エ、謀られし奇怪千萬、平山と心を合はせ、汝等兄弟同士打させ、一天下を一呑みと、巧みし事も水の泡。よし〳〵此の上は絶體絶命、命限りに切り抜けん。」と、太刀ひん抜いて切り付くる。引つぱづして勾欄より、白洲へどうど蹴落し給へば、六彌太すかさず飛び蒐り、高手小手にいましむる。頼朝心地よげに打守らせ給ひ、「國家をさわがす大罪人、刑罰急度糺すべし、それはからへ。」と宣ふ所へ、土砂踏み散らしあわたゞしき、しらせの早打かけ來り、「扨も平山武者所、謀叛の工み顯はれし故、扇が谷に野陣を構へ、此の御殿を追取り卷き、攻入らんとの催し故、早速御注進仕る。」と、大息ついで訴ふれば、義經につこと打笑み給ひ、「ヤア〳〵六彌太、扇が谷平山が陣所に馴せ向ひ、有無をいはさず討取るべし。」仰せは重き兩將の、詞につる、岡部六彌太、「いざ打立てやえ尤も。」と、御前に竝居る隨兵共、我先がけん〳〵と勝色見せたるやへ梅の、花芳しき弓取の、聲も清しき軍立ち、扇が谷へと、三重急ぎけり。平山武者所、頼朝兄弟誅罰せんと、扇が谷に陣屋を設ひ、士卒を隨へ控へゐる。かかる所へ岡部六彌太軍兵引き具し眞先に大音上げ、「ヤア平山武者所、汝が惡事顯はれし故、此のところに陣所を構へ、御兄弟へ敵せんよし、頼朝の仰せを蒙り、岡部六彌太向うたり、手に立つ武士はをりあへ。」と、高らかに呼

ばはつたり。かくと聞くより平山末重陣屋より躍り出で、「ヤア〳〵岡部六彌太、此方より馳せ向ひ、討取らんと思ひしに、遙々とようせた。某が手を下すに及ばずソレ兩人、物ないはせそ討取れ。」と下知しながらに引き返す。「畏まつた。」と醒井番場、無二無三に討つて蒐る。さしつたりとわたり合ひ、持つて開いて眞向插し、尖き刃の電光石火、獅子忿迅虎亂入、馬手は竪割弓手は胴切、二人が命は草葉の露、「ソレ遁すな。」と軍兵共、喚いて掛るを事ともせず、向ふ奴ばら嫌ひなく、大げさ小げさ車切、片端切立てまくり立て、追立て〳〵めつた切り、こりやたまらぬとばら〳〵〳〵。跡をしたうて忠澄が、遁さじやらじと追つて行く。さしもの平山途を失ひ、馬の鼻を立てかへて、落ち行かんとせし所へ、岡部六彌太取つて返し、やらじと尾筒をしつかと取り、「コリヤ〳〵〳〵。」とひき戻す。「シヤ邪魔ひろぐな毛二才め、そこ立去らずば蹄にかけ、胴腹に風聞を明けん。爰を放せ。」と、鎧の鳩胸あふり打立て鞭打ちくれ、ハイ〳〵〳〵と乘り出せば、どつこいどこへと引留める。追立て引留めはみ轡、音はちり〻んからころり、駒の嘶き土煙、六彌太いらつて突き放せば、馬は前立ち頭轉倒、ころりと落ちる平山を、起しも立てず取つて引伏せ、首引抜かんとせし所へ、源義經公平大納言を引立てさせ、徐々と立ち出でたまひ、「ホウ手柄々々、我々兄弟へ敵せんと工む平山、縛首うち刑罰糺せよ。」と仰せに、「はつ。」と六彌太忠澄、手早に取縄しつかとかけ、水も漏らず首打落す。かかる所へ熊谷入道飛鳥の如くかけ來り、義經公に打向ひ、「東へ下る道すがら、始終の樣子承る、時忠卿は大納言の位あれば私には成り難し、蓮生法師が出家の役、都へ連れ行き禁廷の御指圖を蒙らん。何とぞ愚僧に御預け下されかし。」と願へば、義經打點頭かせ給ひ、「オ、神妙々々、高位の身なれば迂闊には殺されず、いかにも和僧が願ひに任せ時忠を預くべし。直に都へ連れ上り、院の廳の御沙汰にかけ、兎もかくも計らふべし。」と、仰せに、「はつ。」と蓮生法師、時忠を預り申し、莞爾と笑ひてすさみたる一首の歌、極樂にも巧の者とや思ふらむ、西に向ひて後見せねば、と詠歌をのこし、暇乞して歸りけり。實に末の代に至りても、敵に後を見せぬとは、此の道理としられたり。義經御喜悅限りなく、一祿を貪る佞人原を亡ぼせし此の上は、三種の神器を守り奉り、兄弟打連れ都へ登り、此の趣を奏聞せん、いさめやかたゞうち立て。」と、御諚に任する岡部六彌太、「御立ちぞう。」と呼ばはれば、御供奉の大小名綺羅を飾つて歸洛ある、朝敵亡びの凱歌の聲、太刀は鞘弓は袋と納まりて、千代榮えぬる源氏、四海太平豐かなる、國ぞ久しかりけらし。

一谷嫩軍記　終

奥州安達原

近松半二

奥州安達原

第一

時は康平五つの年、後朱雀院の朝に當つて、東夷猥りに逆威を振ひ、王命を背き奉るといへども、源氏の武功に切り靡け、再び治まる時津風、八幡太郎義家公、武威磨ぎ立つる鎌倉御所、暫く鋭氣を養はる。頃は如月半ばの空、都より敕使下向ありければ、早門出の日も近づき、取り傳へたる梓弓、箭叫びの音勢子の聲、さも嚴重に見えにける。宮居間近く假屋を構へ、八幡太郎義家朝臣、執權鎌倉の權頭景成、瓜割四郎紀威儀を守つて控ふれば、上座には敕使大江大將維時、冠の紐の長き日も、早西山にかたむきぬ。維時義家に打向ひ、「此の度某罷り下る敕使の趣餘の儀にあらず、中宮御產の御祈り、此の度の大赦に付き奥州の流人、桂の中納言則國召し返すべしとの敕諚、奥州は源氏の任國、義家宜しく沙汰すべしとの御事なり。」と述べらるゝ。義家、「ハッ。」ト領掌あり、「中納言則國ことは聊かの科によつて、父頼義が任國の砌、奥州松が浦へ流され今に存命、今の度赦免の下書、義家計らひ奉らん。」と、敕答あれば、「コレサ義家、流人の事は下狀を以て事は足る、御邊は是れより直

に上洛、十握の御劍も今に於て行方しれず。か程の大事を餘所になし優々と在國し、鹿狩山狩に日を送るは君への不忠、但し所存あつての事か。」と、何がな横に蟹公家の、爪を隱せし奸佞邪智、「コハ維時の仰せとも覺えず。雲上には月花の御翫び、武士の狩漁は軍のかけ引き、軍慮忘れぬ武士共が未熟の手ずさみ御意に入つて祝著。」と、一句の答へに返答も何がなとへらず口、「いか樣音に聞えし貞任宗任、鬼神をも欺く曲者、敵に取つてはこは者〳〵。隨分と稽古して、敵の首よりこつちの首の、用心が肝要ならん。」と、權威を笠に嘲弄す。怺へ兼ねて權頭、憚りもなく進み出で、「敕使と敬ひさし控へ罷りあれば餘りしき御一言、先年栗坂のその一戰、小勢を以て大敵の逆徒の張本、賴時を討ちとつたる其の日の軍、勝に乘つて追打ちせざるは軍の法、彼の六韜の誡め御存知あつての御批判か、サア御返答承らん。」と、詰めかくれば瓜割四郎、「ヤア權頭、高官に對して不禮の過言、控へ召され。」と維時に韶ふ奸曲、義家それと左右を制し、「維時公の御批判も、武勇を勵ます御計らひ、武の慣りに其の身を忘るゝ景成が過言、何條賢慮にかけらるべき。」と、事を治むる明智の詞。かかる所へ小林の鄕民共、折に籠めたる鶴十番、御前にさしおき、中にも莊官と思しき男、假屋間近く頭を下げ、「此の鶴日毎に小林の宮居近くおり候故、所の者追ひ候へども少しも恐れず、飼鳥と存ずれども下々の勝手に惡い大鳥。夫れゆゑ村中が寄合ひ付け、相談の上殿樣へ御獻上、宜しく御上の御取次、賴み上げる。」といひ捨て御前を立ち歸る。義家甚だ御悅喜あり、「誠に鶴は仙家の靈鳥、我が先祖六孫王東夷征伐の其の折から、此の所にて雌雄の鶴を得給ひ、源氏の武威千歲の後まで、輝くべき印なりと、此の小林の岡に放し、所を直に鶴が岡と名付け給ふ。時といひ所と云ひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ、八幡太郎義家是れを放つと、金の札を付け、此の所に放し置き、八幡宮の神鳥と崇く天下に觸れ流し、神慮を仰ぎ奉らん。」と、惠みも深き御上意に、皆々あつとかんじ入る。景成遙かの梢を見渡し、「アレ心得ず、歸鴈行を亂る時は伏兵ありとの兵書の禁め、シヤ曲者ござんなれ。」と、立ち上れば、御大將、「ホ、ウよくも咎めし權頭、鎌倉の留守を預ける汝、其の心がけを見よう爲のわが計らひ、伏勢ならず。」と扇を開き、招かせ給へば茂みより、顯はれ出づるは此の度の、御供に隨ふ勇士のめん〳〵、皆坂東に譽の弓取、秩父十郎伴助兼、縣次郎、其の外譜代恩顧の武士、はや御立ちと白幡に靡き隨ふ源氏の威勢、朽ちせぬ黃金の鶴が岡、都をさしてぞ三重行く空の、何事も春は吉田の神社、百さへづりの宮雀、八百や萬の鳥の音も、賑ふ神の誓ひかや、參り下向も多き中、人目にそれと襠は、九條の里の戀絹とて、郭に名ある全盛の、松の位の大夫職、二世と兼ねたる戀中の、牛駒之助に添ひたやと、歩みを運ぶぞ殊勝なり。禿の市彌不審顏「申し大夫さんえ、けふは生駒之助樣に逢ひに行くとおしやんして、來て見たりや吉田であつた。コリヤ狐がつまみはせんか。」と、いへ

ばにつこと打笑ひ、「サイノ久しう便りも遠ざかり、案じもあらたな神の利生、大さうな願參り、近いと思へど餘程の道、定めてそなたもしんどかろ。」と、いふ向うより先拂ひ、遠目にそれとさすがは大夫、「アレ市彌、そなたが常住拜みたがる生きた雛樣、傍では無禮。」と花のかげ、舍人がきしらす御車は、當今の御弟君瓊の宮、まだ振袖の苔から、役目も重き匣の内侍、附々賑ふ花の本、爭ふ女中の袖袂、御機嫌斜ならざりし。馬場先の方よりも、歩み來る若侍、武將八幡太郎義家の近習、志賀崎生駒之助英、夫れと見るより遙かに飛び去り頭を下げ、「御忍びの行幸とは申しながら、大切なる君の御物詣で、主人義家某に申しつけ、餘所ながら御車の御供。」と、言上すれば匣の内侍、「オウ迫は天下の武將と呼ばるゝ程あつて、道を守る義家の心遣ひ、宮樣にもさぞ叡感、殊更長閑な春の氣色、お氣慰みのけふのお供、物堅き直方殿、是非御供とあつたれど、どうやらかうやら御所のお留守を。」「いかにも〳〵、大切なる御所と申し、四角四面な直方殿御遊興の御供には、花も紅葉もくすぼりかへる、ァ、何がな宮樣のお慰みを。」と、見やる木陰に鷺の首、覗いて見たり引つこんだり、招くをばなの鼻の先、冷汗かくともしらざる女中、匣はそれと見て取つて、「コリァ供の者共、宮樣にも異ない御機嫌、今暫くお隙がいろ。お迎へは入相の花ちるころ、早う〳〵。」に雜色仕丁、殘らず打連れ立ち歸へる。生駒は此の場をくろめんと、眞顏になつて、「アレ〳〵〳〵女中樣御らうじませ、御所方には珍らしい、遊君と申す者、御覽じた事ございますまい。」と、いふに内侍が、「なに遊君とや、江口の君の浮女と、古今集では見たれども、直に見るは今が始め、サァ〳〵早う。」に生駒之助、してやつたりと一人笑み、「彼の大夫めが揚屋入りの道中を、今爰へ取寄せてお目の正月させません。それ〳〵そこへもう爰へ。」と眴仕形を戀絹が、かいどり小づま八文字、唄よるべ定めぬ流れの身にも、すいた男のあればこそ、すかいで是れが勤まろか、ァ、ぐだ許りと生駒が傍、寄らんとするを目と仕形、寄るなとしらせどォ、しんき、けふお前と連立つて、此の吉田で呑み明すとさつきにからと、膝に取り付き甘え泣き、堪へ兼ねたる辛抱袋、破れかぶれと生駒がやくたい、二人がそぶりを女中達、「コレ生駒殿、あの傾城はそなたの相方とやらいふものか。」と、いはれて恟り心づき、「ハテさて滅相な仰せ、物堅き八幡が家來、郭遊びは夢にも存ぜぬ。」「ム、そんなら今のは。」「ハテ客を捕まへて此の樣にするが傾城の仕打、そこで客めがたはいになつて、可愛い色を引寄せて、コレ此の樣に。」と抱きしむれば、「コレ志賀さん、らつちもない事隙入れずと、サァござんせ。」と手を取れば、「ソレ〳〵〳〵、どうでもそなたの馴染ぢや。」と、手め上げられて生駒之助、「エ、近付でもないくせに、いろ〳〵の事ぬかす故、あなた方への言ひわけなし。」「イヤお前がわしに。」と又取り付き、兩手をぢつと引きしめて、「かうした所が郭の口舌、まづあら方はこんな物。」と、口から出次第言ひ次第、とり付き引付く向うより、歩

み來る瓜割四郎朱鞘の大小いかつげに、それと見るより業腹ながら、「ヤア生駒殿、主人義家大切なる急用あり、早う〳〵。」の聲に恟り飛び退いて、「急御用とは覺束なし、貴殿樣子を聞かずや。」と、たち寄る生駒を突き飛ばし、「大切なる役目を受け、夫れに何ぞや女を捕へ見苦しき振舞、何かは御用も我等はしらぬ、早おいきやれ。」とねめ廻す。戀絹生駒は目を見合はせ、道理に爲方投首し、心殘して立ち歸る。續いて立つ戀絹を、四郎が留めて、「コレ、戀主、ヱ、汝は〳〵、首だけ惚れてゐる四郎、ふつてふつてふり付け、生駒に許りきつい乘り樣、胴慾ぢやぞよ、ヱ、爰な命取りめ。」としがみ付く。ふり放して逃け行くを、どつこいならぬとまた取り付く。「ア、これ申し、どうぞ往なして拜みます。」「イヤ〳〵〳〵、拜むのはこつちから。」と、爲方なんぎの最中へ、「鳥をさいた見さいな、さい鳥さいた見さいな、何にも得とらず餌差竿。」物見だけい女中達、「ソレ〳〵宮のお慰み、四郎とやら其の鳥差爰へよびや、四郎々々。」に、「ハア、、、、鳥差お召しぢやうせをれ。」と、いふ間をはづして戀絹が、逃け行く跡に、「なむ三寶、大事の鳥を飛ばしてのけた、鳥差め覺えてをれ。」と、つぶやき跡を慕ひ行く。鳥差はたち寄つて、餌竿を下ししやに構へ、一つひよ鳥ひえの山の、二つ梟二子の山に、三つ木兎都鳥、そこよかしこと立ちまふふりにて匣の袖へなけ文を、ひら〳〵ひらの檜木の枝とそらさぬ風情、文とり上けて匣の内侍、「ハテいぶかしき賤の振舞、御前に叶はぬあつちへやりや。」と、文投げ

捨つれば女中達、「下々の身分で内侍樣に付文とは、大それた慮外者、早立つて行け〳〵。」と、せり立てられてびくともせず、「下々であらうが何であらうが、戀に上下の隔てはない。但し又鳥差が上つがたに、惚れる事はならぬといふお觸でもあつたか。何でも思ひ込んだ此の男、返事聞かねばいつかないつかな。」と、人目遠慮も荒くれ男、「アレ狼藉者誰そ參れ。」と、呼べどをりあふ人もなく、隔つる女中をはり退けぶち退け、傍若無人の狼藉に、内侍は、「宮樣。」甲斐々々しく、「なう〳〵怖や。」と局達、神前さして逃け行くを、「己女め一摑み。」と、大手を廣げ逸散に、跡を慕うて追つて行く。内侍は宮を誘ひて躓き轉び出で給ふ。跡から逸散かけくる鳥差、「内侍樣、まんまと首尾よう參りました。樣子は今の文の通り、早う〳〵。」とせき立つれば、匣は宮を伴ひて何いふ隙も嵐に連れ、何國ともなく落ちて行く。かくとはしらぬ女中達、おろ〳〵目にてはしり出で、「コリヤ〳〵鳥差、宮樣どつちへ連れいた。」と、縋り付くを蹈み飛ばし、「ヤア宮が見えねば身がしらうか、そこ退け通せ。」「イヤ〳〵〳〵其方が連れいた宮樣を、此方へ戻しや。」「イヽヤしらぬ。」「イヤそなたが。」と、爭ふ半ば、傳杖直方お歸館遲しとかけ來る松陰、樣子を斯くとかけ寄つて、鳥差が左の脇つぼ、丁ど入れたる霞の當身、「コレコレ〳〵宮樣は何處に在する、匣殿は、内侍は。」と、問ふも焦立つ此方もうろ〳〵、「あの鳥差が狼藉故、宮樣伴ひ匣樣はあの道へ。」と、いふ間もわくせくかけ行く女中、「扨こそ曲物はかして聞かん。」

と又一當、むつくと起きる閒稻妻の、懷劒喉につき立てたり。「なむ三寶詛議の種、ヘッェしなしたり。」と氣は夕陽、車輪の如くかけ廻り、さもあれいかにと死骸の懷中、手を差しいれて引出す一通、さつと披いて讀み下し、「何々環の宮を盜み出し給はるべしと、匣の內侍へ賴みの狀、何者とも名を記さぬは、朝廷にはびこる佞人、大江維時なんどが仕業か。何にもせよ、逆臣に出しぬかれしか、ェ、口惜しや去りながら、是れこそは詛議の手がゝり、究竟一通懷に、確乎と納むる忠臣の、心の闇の道筋を、いつさんにこそ三童歸りけれ。西洞院左女牛の殿造り、八幡太郎義家朝臣、再び鎭守府將軍に御拜任の御悅びとて、在京の大小名思ひ〳〵の御獻上、錺口上使者袴、奏者の女中が受け答へ、花をちらして持ち運ぶ、鬧しい中ちらほらと、一つ木陰に寄り集ひ、「葉櫻樣何と御家中も多い中、よい男といふは生駒之助樣、可愛らしい殿御ぢやないか。」と、いへばみはしが、「サイナウ、したが顏に似合はぬ物堅さ、其の顏に似合はぬで思ひ出した。茶の閒の楓があの顏で、生駒樣を付けつ廻しつ、何と身の程しらずぢやないかいの。」と、譏る後へによつと出た、頰はすもゝの花楓、櫛笥鏡臺携へて「オ、皆樣聞いておくれ、私が此の樣に思ふのに、生駒樣の聞き入れのないはどうした事と思うたりや、あのお方は傾城ずきで、こちらが樣な大むくは嫌ひ。夫れで私も今からはでいに身を持つて、生駒樣に思はれうと、コレお髮上の磯野を賴み、結うて貰うた此の釣舟、似合うたか見ておくれ。」と、

いふ目付のしたたるさ、恢へ兼ねて吹き出す口の閒より、御家人瓜割四郎糺、袴の角菱いがんだ頰つき、「ヤァ何ざわ〳〵とめらうども。ヤうぬは楓め、エ、惡くさいやつ。こりや御玄關近く、女の手道具見苦しい、ばか者め。」と、蹴飛ばかされてさんらん恐い、皆々次へ逃げて入る。「ヤァ面倒な此の手道具、持つてうせぬか、誰そ取つて捨てよ。」と、呼ばはり〳〵奥へ入る。御門の方さわがしく、出をらう出をらうと下部が聲、樣子は何か白洲先、かいどり小褄八文字、「ヤァ女め待て、御家中に見馴れぬ風俗胡亂やつ、サァ名をぬかせ聞かねばいつかな。」「ホ、、、合點が行かぬの聞かねばならぬのと無理な客樣の色事をせかんす樣に。」「ヤァ扨は汝ばいたよな、こゝをどこだと思ふ、忝くも八幡樣の御屋敷、サァ出をらう。」と引立つる。「オ、ぶすする、人の心もしらずに、其の樣に呵らんす物ぢやない。其の八幡樣の御家來、生駒之助樣に逢はねばならぬ譯あつて、コレよいお人ぢや、誰やら表へ逢ひに來てゐると、ちよつとあの樣を爰へ呼び出して下さんせ。ホンニ又此の生駒樣も、何して居さんす事ぢややら、早う逢ひたい出て下んせぬ事かいの、ェ、しんきや。」と式臺に、身を投げ島田すゐせんの、流れははでに顯はれり。「ヤァじやうの強い下主女、いぢばらば卷きざつ上げ。」とひしめく聲、何事やらんと立ち出づる志賀崎生駒之助、一閒をずつと顏見て惚り、やにはに庭へ飛石の、堅い顏付氣色をかへ、「ヤァ下郎共、御座の閒近く尾籠の高聲。」「ハイヤ此の女め、胡亂者故引捕へて。」「ヤァ

生ぬるい、わいらで行かぬ身が詮議する、早く下れ何馬鹿やつ。」と、呵りちらして追立てやり、邊を見廻しつつと寄る。「コレ戀絹嗜め、コリヤマア何事、物堅きお館の格知つて居ながら、はでな姿で晝日中、お上へ聞えたら生駒之助は痛い腹、サア人の見ぬ内に早く〳〵。」と、いふ間も若しやと胸どきどき、せく男よりせき入る戀絹、「コレ生駒様、ひよんな事が出來てきて、夫れでお前に逢ひたさに。」「ヤア〳〵何ぢや、ひよんな事とは氣懸り、其の譯をサア早く。」「サイナア其の譯といふは、客は誰かしらねども、わしに合點もさせず身請の相談、親方がひに手附まで受取つたと、聞くとはつたりコレ此のつかへ、どうかかうかと案じる折から、驅落してこいとお前のしらせ。」「ヤア〳〵〳〵そりや誰が。」「四郎様が。」「ヤア何あの瓜割四郎がさういうたを、誠と思うてスリヤそちは郭を。」「アイ驅落してきたわいな。」ホイ、はつと許りに生駒が當惑、「ハテ合點の行かぬと、いうてゐる間も其方の此の形、人が知つては一大事、どうぞ隱して置く所を。」エ、どうせうぞかう障子、明ける物音出る楓、見付けられじと戀絹を、木陰へ押しやりそらさぬ顏、楓は其の儘縋り付き、「エ、氣の惡い生駒さん、今のしだらはどうぞいな、あの子許りが眞實で、惚れぬいてゐる此の私は、嘘にいとしと思ふかと、見捨てられたもあの子ゆゑ、アノ傾城と譯ある事、今の樣子も書きおきして、私やいつそ死ぬ覺悟。」と、用意の剃刀生駒は驚き、「マア待つた、死ぬるとは短氣千萬、そしてアノ傾城と身共が譯を、書置にしてよいものか。」と、留める兩手をぢつとしめ、「さういはんすは叶へて給はる心かえ。」「でも夫れは。」「そんなら死ぬる。」「イヤ放した。」と聲高に、困つて爲方難儀の手詰、「そんなら應ぢや。」「エ、嬉しや。」と抱付かれ、顏を背ける生駒が思ひ、生ぐさ坊主が精進の、馳走に禮いふ心地なり。折もこそあれ、「お客のお入り。」とのゝめく聲。何がな幸ひコレ〳〵〳〵、お客のお出でと引つぱづして逃げて行く生駒、「コレ志賀さん、夫婦の固めは私が部屋、必ず待つて居るぞえ。」と、尻ふりちらして走り行く。程もなくのつさ〳〵、入り來る權威の鼻、大江大將維時打紐したる白木の箱、雜掌笠原軍記に持たせ、傍見廻し聲をひそめ、「汝の兼て知る如く、年來の我が大望、青公家原は大半味方になすといへども、只手ごはきは、八幡太郎義家平 傳杖直方、きやつら兩人禁庭にへちまへば、何かと手延び無念至極、何卒罪に落さんと肺肝を廻らし、なんなく直方は術の網に打込み、けふ中に仕まふ合點。此の上は義家一人、彼が家來瓜割四郎、我が味方に付けたれば、十が九つ大望成就、只儘ならぬは戀といふ曲者。義家が女房敷妙、いろ〳〵と心を盡せど、今に色よき返事もせぬ、何でもけふは此の艶書を合點か。」と、渡せば取つて懷中し、「今日中に御手に入れん。」「必ずぬかるな。」「合點。」と、慾と色との間の襖、出向ふ瓜割四郎維時が傍近く、「お賴みの通り生駒之助しくじらす術上首尾、彼奴が馴染の傾城を此の館へ引入れ、それを越度に打殺せば、風の神で戀の敵、戀絹を我が女房に。」と、いふ

もぞく〳〵、「でかした〳〵、さい先よし、艶書の事を軍記合點か、瓜割必ず仕損ずな。」と、二人を立たする間もなく、さと打薫る絹の香は、義家の奥方敷妙御前、繻姿もしとやかに、「維時公は御苦勞の御出で、夫義家早速お目に懸る筈なれども、今日は非常の大赦、何かと取り込み罷りある、無禮の段は眞平お赦し、御用の品も在らば私に。」と、聞いて維時威儀繕ひ、「ヤ義家の御内證、此の比は打ちたえ申した。其元の親父直方には、御預りの環の宮行方なく、老人の心づかひ、そこにも親の事なれば、嘸案じ召されう。それは格別、某けふ罷り越す事別儀ならず。義家には近々東國へ進發、門出を祝はん爲、維時が寸志の音物、改めて受納あれ。」と、件の太刀箱さし置けば、「是れは〳〵何から何まで御深切の御詞、殊に夫が門出を御祝ひとは、義家にも嘸悅び。」と、蓋押し明くれば、こはいかに切柄したる荒身の刀、悔り流石は武將の妻、さあらぬ體に取り上げて、「武士の門出に打物とは、御心の付きし御音物。去りながら是れは正しく科人をためす、不祥の刀。」と、いふを押へて、「コレサ敷妙、心を籠めし我が音物、婦人が聞いて何を判斷、義家に見すれば胸に覺えのある事さ。とつくりと思案をして、其の返答相待つと、某が申すといはれよ奥方。」と、割つて言はざる切柄は、いか樣仔細新身の刀、鞘にしつくり納めても、心のどきつき納まらぬ、氣をとり直し、「姫ごぜのちゑに及ばぬ事、義家に右の品お出での樣子も申し聞けん。役目濟むまで暫しの内は。」「オ、サ〳〵、其の刀の返答聞き切るまでは歸らぬ維時、案内召され。」と權柄押柄、敷妙に打連れ一間へ入りにける。口の間より奏者の女中、「生駒樣々々々。」と呼びつぐ聲、「生駒之助是れにあり、何用なるぞ。」と立ちいづれば、「申し貴方にお目に懸らうと、九條の里のくつわとやらいふ者が。」「ヤァくつわが來たか、コリャたまらぬ。我等が逢つては事むづかし、此方衆賴む、コレかう〳〵。」と耳に口、木陰にありあふくしげ鏡臺、抱かへて奥へはづし行く。程なく白洲へ小腰を屈め、「ハイ私は九條の傾城屋文字屋の友三、是れなは請人の惣助でござります。私抱への奉公人戀絹と申す女、去る方へ身請極まり手附まで請取りました所に、夜前郭を驅落。何が方々と尋ねますれども、とんと行方が知れませぬ。さつする所戀絹がふかまといふは、是れの御家中生駒之助樣、身請を嫌うて郭を出たからは、外へは參らぬ此のお屋敷に。」「ア、コレ〳〵爰は殿樣のお白洲先、麁相な事など申し上げたら。」「ア、申しおつしやるなお前方は素人、慮外ながら文字の友三というて、ずんと黑い男。」「ソレ〳〵此の惣助も身晴、何ぢや有らうと生駒樣に逢うてのおりのり、又逢はしやれぬがさいご、奥へ踏込み直々に。」と、口を揃へるくつわがゆすり、一間の内に大音上げ、「ヤァ〳〵八幡太郎是れにあり、汝等下々の分として、上を恐れぬ推參者、引つくゝつて牢へ打込む、覺悟しをれ。」とかさ高に、襖ぐわつたり立てゑほし、大紋くわつと目の中の、きよろ〳〵するも思ひなし、威に恐れてとんぼう返り、お赦し御免と跡じさり、

よわい所へ附け込んで、「ヤア一寸も動きをるまい、返答が悪いと首が飛ぶもしれぬぞ。思へば〳〵につくいやつ、傾城も同じ女、かはいさうにいやな男に身請とは、汝等が身がつ手、すいた男に添はしてやるか。」「ハア〳〵。」「そんなら赦してこます、あのごくだうめが。」と、強う見せたる足拍子、はずみにすつぽり立てゐぼし、結びめ解けて櫛拂ひの、頬髭落つれば傍邊、ハツト生駒が取りのぼす、顔のゐのぐも汗たら〳〵、所斑の八幡大名、俄にしよげる顔を見て、「ヤアこなたは生駒之助。」といはれて、なむ三しくじつたと、天窗抱へて逃げ入れば、「ヤア大騙りの生駒之助、金の代りに連れていんで、郭の法の桶伏。」と、かけ入らんとする一間より、「兩人控へよ先づ待て。」と、立ち出で給ふは、義家の妹君、名も八重幡の九重に、花もおさるゝ品形、「コレそこな郭とやら、其の樣に詞をあらし、若しも此の事兄義家樣のお聞きに立たば、そち達が身の上、生駒之助とても同じ事、そこを思うて留めに出たは自らが情。何と其の戀絹とやらが身の代を辨へなば、そち達にいひぶんはあるまいがの。」「何が扨お金さへ受取りますれば。」「そんならば其の傾城自らが身受けした、夫れ持て早う歸れ。」と寐耳へ水の山吹より、花も實もある取り捌き、「コハ忝し有りがたし。」と、戴きいさみくつわやは、九條をさして立ち歸る。生駒は面目中敷居、出るも出られぬ此の場の品、戀絹は一間より姫の情の有り難さ、出づるも面伏ししづむ。八重幡はしとやかに、「姫ごぜは相身互、何の禮におよぶこと。かうして世話をする身にも、心に任せぬ憂き思ひ、物馴れしそもじを便り、力に成つて。」とばかりにて、思ひ入りたる御風情。「アノお姫樣の改まつた、大恩受けた此の身の上、お心に叶はぬ事あらば何なりと、サア被仰れどうぞいな。」と、いはれていとゞ恥かしさ、思ひ初めたる戀人に、千束の數は重なれど、「モウ被仰るな、よめました、戀の手管は勤めの道、私がかう申すからはお心づよう思召せ。シテ其の惚れてござんす殿御といふは、お公家樣かお大名か。」「イヽヤ大名でなし、公家でなし、そもじの馴染の生駒之助。」と、聞いて恟り差當る、恩と情にからめられ、今更何と思案さへ、壁に生駒が聞くぞとも、思ひ極めて傍に寄り、「二人が譯を御存じの上私へのお賴みは、よく〳〵せつないあなたの戀路、切るに切られぬ中なれど、いつそとんと思ひ切つて、私がお世話致しませう。」と、いふをこちらに立ち聞いて、おれを思ひ切つたとは、うそか誠かとやかくと、氣はもめくさの袴に汗、姫はいそいそ嬉し顔、「わりなき無心此の上は、只よい樣に。」と袖口に、紅葉かざして入り給ふ。かげ見るや見ずつか〳〵〳〵、胸ぐら取つて、「コリヤ戀絹、エヽ汝はな、アイヤモ見さげ果てた根性、さういふ心とはしらず、積られたが殘念な。」と、引きつ廻しつ打ちたゝく、手に取り付いて、「オヽようういて下んした、女房ぢやと思はしやんすりやこそ、打ちもさしやんす擲きもさんす。お前の樣な眞實な殿御が、又と世界にあろかいな、身請して貰うた義理にせまり、今の樣に姫君樣にいうたれど、お顔を見

たれば退きとむない、やつぱり元の夫婦ぢや。」と、男の膝にすがり泣く、わりなき有樣立ち聞く八重幡、悋氣の中にも二人が心、思ひやる方あら氣の生駒、「エ、いやらしい退いてくれ、心底のくさつた女顏を見るもけがらはしい。大方おれがやつた誓紙も、身仕舞部屋のすき紙、油くさい狐わな、よい加減につまんで貰を。」と、ついと立つを、「待たしやんせ、又かんしやく惡がうか、そも突出しの其の日より、いひかはした互の誓紙、肌身離さず此の守に、コレ見さんせ。」と取り出せば、「イヤ〳〵まだ其の守の中に何やらある。」「エ、疑ひの深いお方、是れはわしがと丶樣の筐、大事にかけねばならぬ物。」「マア其の大事がるが合點が行かぬ。」と引つたくつて、「隱し男樣の誓紙の文言、ドレ拜まうか。何ぢや、奥州六郡の主安倍大夫頼時、法名大了院殿喜山大居士。」と讀みもをはらず、「コレ戀絹、スリヤ此の頼時といふは。」「アイ私がと丶樣でござんす。」と、聞いて恟り一聞に立ち聞く義家公、猶も窺ひ在す。生駒之助つつと立ち、「緣は是れまで戀絹。」と、思ひがけなき夫の詞、縋り付くを振りはなし、「添はれぬ譯は其の書いた物、頼時が娘とあれば朝敵貞任宗任が兄妹、しらぬ昔は是非もなし、源氏に仕ふる生駒之助、朝敵の血筋につながつては、主君へ不忠武門の穢れ。」と、いはれていらへも涙ぐみ、「けふまで包みし我が身の系圖、父樣はくり坂の合戰に、流矢にてあへなき御最期、兄樣達も皆ちり〳〵、行く方定めぬうき勤め、不圖聊れ初めし二人が中、起請誓紙を忠義にかへ、緣を切るとのお詞を、無理とはさら〳〵思はねど、お前に別れてそもやそも、此の身は何となるぞいな。エ、死なしやんしたと丶樣も聞えぬ、兄樣達も兄樣達、よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の樣な男と敵味方になる樣な、どんな軍がある物か、私が緣の邪魔になる兄樣達、こつちから緣切る程に、コレかんにんして下さんせ、エ、なあ申しコレ申し。」と、くどき歎くぞいぢらしき。始終をとつくと義家公、一聞をさつと押し明くる、音に二人は消え入る雪、とけぬ此の場を逃げて入る。大將端近く出でさせ給ひ、「ヤア〳〵誰か有る、召しかへせし流人共殘らず是れへ。」の詞の内、ばら〳〵出づる歸洛の流人、籠を出でたるいさみ足、瓜割四郎御前に向ひ、「常磐島はだか島竹の浦松が浦、いづれも奥州一國の流人、都合二十七八人相揃ひ候。」「ヤア〳〵汝等謹んで承れ。此の度非常の大赦行はれ、國國流人赦免ある。去るによつて、奥州一國の流人は、我が君へ仰せ下り召し返したる汝等。有りがたく存じ奉り、何國へ成りとも立ち退くべし。」と、上意にはつと流人共、悅ぶ聲はけうくわんの、地獄で佛に逢ひたる如く、拜みつ轉びつ出でて行く。跡へしを〳〵立ち出づる、是れも流人としらすのさき、なりも形もしよけ鳥の、身すぼらしげにうづくまる。義家遙かに見やり給ひ、「奥州の流人則氏とは御身よな、早速の入洛此の上なし。」と、仰せに流人謹んで、「親にて候則國敕勘を蒙り奉り、流人と成りし其の比は、我未だ若冠成長するに隨ひ、父諸共昔をこふる憂き年月、海人の苫屋の煙

と倶に、父は空しく相果てて、生きたるかひも荒磯の、島守にて朽ちなん身の、召し返さるゝは大君の御恵み、偏に武將の御情。」と、低頭平身なしければ、「何父の卿には空しくなり給ひしとや、是非もなし去りながら、今日歸洛の此の上は、父則國の本官を直に、桂中納言敎氏卿、いざまづ是れへ。誰ぞ御裝束參らせよ。」ハット女中が取り〳〵に、木綿の島守引きかへて、冠裝束花やかに、忽ち雲の上人の、威も備はつて見え給ふ。「其の裝束を召さるれば、貴公は高官、武官の某憚り有り。」と、上座に進め給ふにぞ、「コハ痛み入る御禮儀、今までは天下の流人、今よりは朝家の近臣、百官百司に列なる上は、所存を包むは君への不忠、天下の武將義家に、桂中納言敎氏が三ヶ條の不審あり。まづ第一には、三種の神器の其の一つ十握の御劍、先年より紛失し御行方知れさせ給はず、禁門の外は武將の守る所、天照神よりつたはりし御寶、草をわけ地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮御行方在さず、是れなんどは朝廷の御大事、察する所都間近く叛逆謀叛の族が所爲と、鏡にかけて顯はれたり。さすれば奪はれし直方に、其の疑ひなきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞きおよぶ、緣に引かれてゆるかせに、指し置くなんど世の人口はふさがれまじ。此の三つの返答聞かまほし。」と有りければ、「ハッア遺は文道に、名を得たまひし桂中納言敎氏卿、御尤もの御不審、一々承知仕る。併し此の御返答は義家存ずる旨あれば、參内のをりを以て。」「いかにも、然らば再會々々おさらば。」と、見送る式臺別れの禮儀、袂も匂ふ初冠、大内さして歸らるゝ。大將維時一閧を立ち出で、「最前敷妙に渡し置く刀の返答、いはずと胸に覺えがあらう。舅直方が誤り、一家とて用捨はなるまい、首討つて渡されよ。」「イヤさうは罷りならぬ。環の宮を奪はれしは、一應の越度許りでない、大切の詮議ある直方、輕々しく首討たば、宮の詮議は何を以て仕らん。ちと御麁相に存ずる。」と、やり込められて負けぬ顏、「左程拔目なき義家が、家來の不義はなぜ詮議せぬ、ソレ軍記。」「承る。」と笠原が、引立て出づる戀絹生駒。「何と見られしか、主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍、我が家のことさへ得しらぬ御邊、天下の武將心元ない、是れでも見事大切の詮議をするか義家。」と、何がな惡口嘲弄も、理の當然にさしもの大將、拔き差しならぬ此の場の時宜。二人をはつたと蹴落し給へば、身の誤りに詞なく、白洲に頭を埋み居る。「ヤァ〳〵敷妙、最前の切柄の刀持參せよ、早く〳〵。」と詞の下、「夫の心は白鞘の、此の刀は何の御用。」「オ、不義者めを成敗する、エ、不便ながら武將の役目」「オ、さうなうては濟むまい。」と、嘲る軍記が眞向梨割、二つになつてのたれふす。「ヤア笠原には何科あつて。」「サレバ此奴大不義者、御覽なされあらう事か、女房敷妙にか樣の艶書、傾城狂ひは時の興、強ち不義とも申されず。主ある女に不義しかけるは、畜生と申さうか、成敗したが誤りか、科の吟味立すると、どこへとばしりが掛らうやら。それともに御不審あらば、承らん。」と和かに、肝の

束ねを指し通され、「ム、尤も。扨々軍記めは存じの外なる不屈者、逆磔にもかくべきやつ、手討とはまだ御料簡。シテ兩人が成敗は。」「オ、傾城狂ひの放埒者、勘當致してあはう拂ひ。」「ム、是れも尤も、某も長居は恐れ、尤もなる趣宜しく奏聞致さん。」と、二つ胴を遁れた心地、足早にこそ歸りけれ。言譯涙生駒之助、刀逆手に取り直す。「ヤア犬死せんとはうろたへ者、追放の身にいらざる武士立。最前一閧より立ち聞けば、其の女は貞任がナ、定めて遠い國の者、馴れなじみしこそ幸ひ、夫婦と成つて隨分添ひとげ、彼の本國へ立ち退かば究竟の手掛り、心得たるか。環の宮の行方がしれねば、舅直方は大罪人、時宜に因つては敷妙が、緣の切目とならうもしれぬ。添ひとぐるも義理、添はれぬも浮世の義理と諦めよ。」と、八重幡姫の事までも、思ひやり戸に忍び泣き、緣の切目と嫂の、情の襠顏と顏、餘所に見なして入り給ふ。かかる所へ笠原が弟同名軍六、兄の敵遁さじと、大勢引具し追取りまく。それと生駒が、「コリヤ〳〵戀絹、是れでふせげ。」と一腰を、しやんと柳の腰車、石げさ肩げさまくり切り、逃ぐるをやらじと女夫は白刃、奥庭ふかく追つて行く。すでに時刻も宵闇に、外面を窺ふ笠原軍六、生駒が手竝にもて餘し、一拔けぬけたる拔けがけは、敷妙を奪ひ取つて、我が高名にと一人笑み、あの亭こそと裏門の、塀に身をよせ耳を寄せ、窺ふ内には戀絹が、多勢を切りぬけ其所彼所、是れを足場にあの塀と、差したる刀拔き放し、つつこむ切先軍六が、胴腹思はず芋ざしに、のた打ち廻る鱧武士。内にはそれとも白かべに、柄の足しろ、塀の上、ひらりと飛びたる折こそあれ、多勢をなぎ立て生駒之助、「女房出かした維時が、家來軍六を手にかけしは、忠義の門出手始めよし、サア戀絹。」とつつ立つ所へ、かけ來る瓜割大音上げ、「ヤア扶持離れの生駒之助、色事仕かと思ひの外、手にほゝばつたる汝が働き、ソレ家來ども討つてとれ。」「承る。」と近寄る奴原、から竹なしわり瓜割主從、叶はぬ赦せと逃げ失せたる。返す敵も竝木の馬場、さはいへ名殘と見返る生駒、我も郭をけふ限り、其のうきふしもよき武士の、つま引上げて引きしめて、是れより直に打立たん。其の行先は不破の關、清見白川衣が關、忍の關は有りし身の、口舌の柵手管の關、鳥の鳴くさへ憎かりし、今の此の身は鳥の音に、函谷關を越えたる例、頓て目出たき世にあふ坂の、關所々々をやすやすと、吾妻の室へと急ぎ行く。

第　二

琴棊書畫を嗜む身とも生まれず、明暮物の命を取り、浮世を渡る綱手繩、浪打際にざわ〳〵と、かづきの海士が畫休み、「コリヤ長太のお方、今日はお代官樣が、此の外が濱を通らしやると、浦中はもやもや、すつきり仕事も手に付かぬ。聞きや此中は長太も潛きに出やるげな、女夫しての持ぎ、いか

う延びたと浦邊の噂。」「オ、あの茂三の内儀の云やる事わいの。銀は延びいでこちのアノ性悪が鼻毛の延びるに困り物、四郎のお方の知つての通り、去々年の月見の夜、膃肭臍取りにいた時に、海の中でどれ合ひ初めた女夫中。」「オ、それ〳〵、其の夜己も岩の磧で、こちの人に馴れ初め今は子の親、こなたはなぜに子がない。」「オ、子所かいの、眞實に思うてゐる私を、そでにしくさりくさつて、又しても女さへ見りや帆立貝。ホンニうらが思ひは、鮑の貝のかた思ひぢやと思へば、悲しうござる。」「オ、こりやお方のが皆道理、シタガそなた許りぢやないぞいの。海商賣とてどこの男も磯ぜゝり、こちらも修羅はたえぬ。」と、三人寄れば男の噂。「ヤイ〳〵〳〵又男のわんざんか。」と、いうて海からによつこりと、上つてくる海士の長太、「あんまりわいらが譏る故、海の中でくつさめ許り、獺がきかいでやう〳〵と四五はい、是れでは鹽も呑める物ぢやない。」と、いへば皆々、「テモ我をれ、男の仕事には大きな物、是れでは女海士もはだし、ドレいんで取り溜めの鮑、内でむいたりむかしたり、サア皆おぢや。」と打連れて、住家々々へ立ち歸る。磯邊傳ひをくる女房、長太が見付けて、「オイ〳〵文治の内儀どこへぢや。」と、呼びかけられて立ちどまり、「オ、誰ぢやと思うたら長太樣。内儀樣御精が出ます。聞いてくださんせ、ちつさが長の煩ひ、弱みの上へ大熱、けふは取りわけ樣子が悪い、夫れで濱手の醫者殿へ藥を貰ひに。ホンニ此の間の心遣ひ、私も癪が發りさうな。」「オ、夫れはいかいこな樣の氣もせや。」と、女房がいふをひき取つて、「コレ内儀其の癪にはきつい妙藥が有つて、醫者殿に貰て置いた。待つて居やしやれ、一走りつい取つて來てやろ。コリヤかゝ何をきよろり、今の日和は何時が知れぬ、そよ〳〵と良い風が來る、此の間に一精出してこい。若ししけが來そへなら、此の繩でしらすぞ。」と、約束の千尋の繩、腰にしつかり女房が、舟端より眞逆樣、物馴れしこそ身過なれ。繩くりこして舟張の、くわんにてつ取り早く、「サアかゝめは沖へやつて仕廻つた、モウ邊に人はなし。」と、口なめずりして上つてくる、長太がそぶりに氣も付かず、「そんなら世話ながら今云はしやんした癪の藥を、どうぞ早う。」と立ち寄れば、「へ、藥やろというたはうそぢや、待たして置いたはかうせう爲ぢや。」と引んだかへ、「テモうまい風ではある、此の姿にふつとのぼつて、いんまにさがらぬこの動悸、お前の此の藥で直しておくれ、たつた一服で本復する。」と、抱き付けばひつしよなく、「何さしやんす、夫のあるわしを捕まへ、ぢやら〳〵と何ぢややら、鹽だらけな體して、あたしたたるい。」と突き飛ばせば、「夫れはどうよく、只一度、どうもならぬたまらぬ。」と、抱きしめ〳〵抱きしめられ、なんとせんかた渚の方、浪間へひゞく鐵棒の、音に恟りふり返り、「ヤアなむ三所の代官め、コリヤたまらぬ。」とさしもの悪者、せう事渚に心を殘し、其の儘海へづぶ〳〵〳〵、こなたは嬉しさ此の場の難儀、遁れて醫者へと走り行く。程なく出でくる所の代官、鵜の目鷹右衛門、跡から庄屋が短い羽織、

長い鼻毛を砂にすり付け、「ハィかう竝びましたが此の濱の組の者共、此の浦邊は漁獵師男海人潜きの蜑、其の外山を拵ぐ獵師も入り込み、外商賣は僅か故、惣名を獵師町と申します。」と、聞いて代官うち點き、「ム、然らば山獵師もあるとな、浦方はいふに及ばず、山獵師には別してきつと申し付くる法度の趣、先達も聞きつらん、鎌倉鶴が岡の神前にて、千羽の鶴をお放しあり、則ち氏神の御つかはしめと世にしらせん其の爲に、金の札を付け置かる。さすれば右の神鳥、何國の浦山におりたりとも、必ず麁畧致さぬ樣との御上意なり。」と、さも緩怠に云ひ付け睨め付け、濱手をさしてうち通る。跡打ちながめて浦の者、「サァ〳〵濟んだわ、ァ、お年寄御苦勞。」「何の〳〵御苦勞はしくらうの上の事、皆も今のお觸れ合點か。金の札の付いた鶴打つ事はならぬぞや、鶴は愚か、こんな時には鷺でも必ず打たぬ樣、皆念入れて觸れうぞや。」と、打連れてこそ歸りけれ。お谷は醫者よりとつかはと、心も足も磯打つなみの、中から出でくる以前の長太、かけ上つてほうと抱かへ、「サァしてやつた、さつきには甘い所を代官めが、うせたで恐さにするりしたれば、鰌と赤貝と口吸うてをつたを見て、イヤモどうもこたへられぬ。」と、しがみ付かれてお谷はうるさく、「サァ〳〵まあコレ爰放して。」「イヤ放したら逃げさんす、慈悲ぢや情ぢやコレ拜む。」「サ、、、どうなりとせうけれど、晝中にそんな事。」「イヤだんない〳〵、こいでいやなら、海の底でのいづぶ〳〵。」「ァ、滅相な、鷺かなんだの蜑こちや水へはようはひらぬ。」「そんなら幸ひあの舟で、結ぶの神は舟玉樣、サァ〳〵こつちへお出でお出で。」「エ、こりや何とする放せ〳〵、こちの人文治殿。」と、呼べど叫べどかひ涙、「コリャなかんすか、なくとは別して忝い、可愛い男にやなきよがちがふ、あしをかゞめてるのふでしめて〳〵、ハノウしよがいの〳〵、コレ此の樣にしめておくれ。」と、引立て引きずり舟の中、「なんぼ泣いてもわめいても、爰はモウ海の中、其の樣にびん〳〵すると、いつそかうぢや。」と舟張の、千尋の繩を帶にしつかり、かうして置いてと取付けば、「エ、穢らはしい情ない。」と、身をもむお谷が帶の繩、千尋の底へこたへてや、遙かの沖へうつほりと、浮き上つたる長太がかゝ、遠目に夫れと見るよりも、逆立つ浪を立ちおよぎ、其の儘舟へ飛び上り、すつくと立つたる丸裸、鱗だらけのさばき髪、男を引きするくゝりし繩、とくより早くお谷は磯へ逃げ上る。やらじとあせる長太が腰蓑、引きずり廻しの結び目に、くゝる千尋の繩ぐる〳〵、夫に向つてつく息は、道成寺を見るごとく、七卷まとうて、「サア長太、こつちへおぢや。」と飛び込んで、泳げば繩に刎ね込まれ、コリャどうしをるも聞けばこそ、水には強き女房の、元氣引立て〳〵およぎ行く。お谷は胸を撫でおろし、立ち上らんとする所へ、戻りかかる善知鳥文治、山より山に獵りくらす、海部刀の刃をわたる、腰に半弓山衣裝。お谷はそれと、「オオこちの人、いま仕事から戻りかい。」「イヤ〳〵けふは風が高うて獵もきかず、山はとうしまうたれ

ど、戻る道で代官殿から鶴のお觸れ、お宿老へ呼び付けられ、それで漸う只今。シテちつさが様子はどうぢや、病人をほつて置いてどこへいた滅相な。」「イエ〳〵内には鄰のおか様を頼んで置いて、藥が切れた故醫者殿へ一走り、戻る道で惡者の長太めがそれは〳〵。」「オ、あいつがずだいはうには、誰も難儀するけな。イヤ其の難儀で思ひ出した、そなたに悅ばすことがある、ちつさが大病人參でなければ助からぬとお醫者の指圖。あつというても長々の煩ひ、其方やおれが物衣類まで賣代なした上なれば、人參買ふあだてはなし、と云うて大切なは人の命。どうぞ今一度本復さしたいと、胸を痛めてゐた所、聞きやちつさを大事々々と思ふ二人が念が屆いたやら、よい儲け筋を聞き出したれば、人參買ふ工面が出る悅びや。」と、夫の話しに共勇み、「夫れは嬉しい、そしたらわしは先へいんで神棚へ燈明上げて。」「オ、それ〳〵、おれは直に其の銀の工面に行く。」「そんなら早う戻つてや。」と、いふ後から、「文治々々文治待て。」「と云ふは誰ぢや。」「イヤおれぢや、借錢こはるゝがいやさに、見ぬ顏せうとは横著物。跡月の日切の銀、けさから足の棒になる程いても、とかく内を外が濱、獵師町で口利く車錢の南兵衞をようけつしぶたなァ。」「是れは又南兵衞殿とも覺えぬ、不仕合を呑みこんで借して下さつた日切の銀、片時も早うと心は矢竹、ちつとも如在は。」「ヤァいふな〳〵、銀戻さぬが如在でないか、戻すあてがなか何故かつた。」と、いがみ蒐れば女房分け入り、「お前樣のが皆尤も。今主の

いはるゝ通り、下地のかわいた其の上にちつさが煩ひ。」「ヤァがつほしめが病を言ひ立て、又古手な泣事か。豆板程な涙をこほして、料簡していぬ者も有らうが、此の南兵衞なんぼでもいなぬ〳〵。サア今受取ろ、サァ渡せ。」と、立て催促に猶手をすり、「イヤモ段々の間違ひ、佛の樣な其元も、腹が立たいで何とせう。どうぞ長うとは申すまい、マァ二三日、コリヤ〳〵女房共、貴方へおわびを〳〵。」と、上手ごかしに脇道へ、文治は其の場を外し行く。南兵衞大きにむくりをにやし、「ヤァ人に許り息精はらし、はづさうとは横著者、一寸もやらぬ待ちあがれ、ヤイ待ちをれ。」と、かけ出す袂にお谷は取り付き、「不躾ぢやと思召せばお腹の立つ筈、あの樣にせかれますも、ちつとなりと精出して、早うお銀が上げたさ。堪忍なされてどうぞ主の云はるゝ樣に。」「エ、やかましいべり〳〵と、ようべるげんさい。よいは夫れ程にいふからは、違ふ事もあるまい待つてやろ、其の代り銀うけ取るまで、われを俺が内へ連れていぬ。」「エ、夫れは。」「ハテ銀の代りに質に取る、サァうせあがれ。」と、引立て引立て情用捨も荒磯の、浪間から又ぬつと、首ばつかりで窺ふ長太、斯くと見るよりかけ上り、さうはさせぬと南兵衞が、兩足かいてづでんどう、其の間にお谷は引つぱづし、逃げて行方はなかりけり。はふ〳〵のめに起き上り、「テモつよいげんさいめ、もう逃げをつたか、どつちへうせた。」ときよろ付く眼、「ヤァ投げをつたは汝ぢやな、銀の代りに捕へた奴、なぜ逃した。」と飛びかゝつて、長太が弱腰

中に提げふり廻し、「ェ、片手にもたらぬひばり骨、しめ殺さうよりコレかう。」と、ぐつと差し上げ三段許り、遙かの沖へざんぶと打込む白浪の、中からによつこり、「ヤィ南兵衛のあはうよ、海士を浪へ投込んだは汝が手味噌、陸では汝に叶はねど、海の中では千人力、手並が見たくは爰へうせい。」と、いはれて南兵衛呆れ顔、潮の中から吹き出し、「へ、、、一寸こはかろがな、相手にはようなるまい、そこで緩りと業さらせ。」と、雑言悪口あと白波、せんかた渚にぢだんだ踏み、「ェ、どんな、川童めは川へ放す、銀は得とらず、あたぶの悪い。」とふくれ頬、白砂けちらし立ち歸る。夕日浪をあらへば漁の火かと疑はる、まだ入相も遠淺の、洲さきにあさる鶴の聲、窺ひ近寄る蓑と笠、邊を見まはし手元を堅め、切つて放せば拳に手ごたへ、さしつたりとかけ寄つて、はぎ根に付いたる金の札、ふつつと捻ぢ切り押し戴き、かけ出す四方を五六人、「ソレ鶴殺しの曲者、遁すな縛れ。」と取り巻く磯邊に幸ひの、舟へ閃りと飛び乘るさそく、陸には術も荒磯の、浪を押し切り〳〵て行方しらず　三重行末は、陸の奥の内には有れど外が濱、國の果てとて荒磯に、狩漁を業として、世を押し渡る一村の、中にも善知鳥安方とて、野山を家と狩り歩く、内は女房のしほたらと、子の煩ひにうちかゝり、外には何も煎じやう、常の如くにかけ土瓶、折り燒く柴のくすぼりに、しんきをもやすかせ世帶、浦方の年行司、用ありさうに門口から、「文治内にゐるやゐか。」と、ずつとはひれば、「是れは年行司の庄右衛門樣、よう

こそお出で、連合はたつた今、出られましてござります、まあお上り。」と人愛も、器量に連れて愛くろし。「ム、御亭は留守か、さらば上つてそこ樣のお茶、其の煮さつしやるを一服給べうか。」「イエイエこりや茶ではござんせぬ、こちの息子が傷寒でさん〳〵、夫れで藥煎じるのでござります。」「何ぢや小かんぢや、そりや藥より赤蛙喰はさつしやれ。こちの坊主めは大かんで、樣々の藥呑ましても直らず、そこで此の庄右衛門樣の思ひつき、赤蛙十疋許り喰はしたればつい直つた。大かんでさへぢやに、小かんぐらゐなら、四五疋喰はしたらつい直る。イヤ夫れはさうと代官樣からの廻り狀、御亭が留主ならこなた見て、奥にしつかり判さしやれ。」と、投げ出す一通手に取つて、「御存じの通り私は明盲、御苦勞ながら讀んで聞かして下さりませ。」「ム、ほんに此方は無筆ぢやの。」「ァイはづかしながら。」と赤らむ顔、「何の夫れが恥かしい、娘子供が物書くと、彼の思ひ方〳〵べく候をやりかけをつて、自ら悪性になるというて、親々が教へぬは、遠國のへんくつ。其のやうに氣を付けても、見事はじける時分ははじけをつて、唄文はやりたし書いたり讀んだり、めんどくさいいつそゐもりの黒燒、お藥なんどをふりかけて、此の庄右衛門樣の思ひつき。ハ、、、口叩かずとお觸狀、讀んで聞かそ。」と押しひらき、「ム、何ぢや一つと許り跡は讀めぬ。高がかうぢや、此の國の殿樣八幡太郎樣が、武運長久のためぢやというて、鎌倉とやらで鶴を千羽、金の札付けてお放しなされたげな。其の鶴が今は此

の國にも徘徊する程に、必ず金の札の付いた鶴を取るなとある、毎年のお觸れこりやいはいでも知つての事。聞かつしやれ此の四五日以前に、岩城山の麓で、彼の金の札の付いた、鶴を殺した奴があるげな。法度を背いた科人、夫れで國中は嚴しいお尋ね。殊に此の浦は殺生人が多いによつて、格別に詮議がつよい。若し殺した者が有るなら、早速訴へに出い。訴人の者には、縱ひ親兄弟夫婦のなかでも、其の科を赦し、褒美として黄金十枚下されうと有る事、是れの御亭も殺生好ぢやが、そんな覺えはないかや。」と、念を入るれば、「オ、つがもない、こちの人に限つて何のマアそんな事、必ず氣遣ひなされますな。」「オ、そんならよござる、兎角町には事なかれぢや。ひよつと此の村に鶴殺しが有ると縛り上げて京三界まで行かにやならぬ、夫れが厭さに念入れるは、此の庄右衛門樣の思ひつき。お方其の内來ませう。」と、しやべり散らして立ち歸る。お谷は藥漸うと、煎じ仕廻うて枕元、屏風押し明け、「コレ清童、けさから飯の湯もいかず、其樣に喰はずに居ると、醫者殿が呵らしやる。此の藥呑んでからわがみの好きの茶粥の中へ、あも入れて焚いた程に、梅干に添へて、一口くやや。」と母親の詞に漸う枕を上げ、「イヤ何にも喰ひたうない。コレかゝ樣とゝ樣はまだ戻らずか、髣が術ない〳〵。」と、敎ふる胸より見る親の、胸を痛めて手を差し入れ、「オ、術ないは道理々々。精出して藥呑んだり飯くふと、此の痛みもつい直る。」と、そろ〳〵胸を撫でさする、心づかひの外面より、外が騒の南兵

衞とて、よつ程横へふとつた男、旅行李肩に引つかけ、くつわの亭主と思しき者、伴うてずつとはひり、「お方來たぞや〳〵、南兵衞が來たぞや。」と、たまからぐわらつく雷聲、「オ、これ病人がある、聲びくにいはんせ。」と、枕屏風を押し立つれば、「何ぢや病人とは、ム、がりまか。なんの役に立たぬやつ、いつそてこねてしまやえいに。」と、詞でたんのうささぬ氣と、しつてゐてもむつと顔、「オ、南兵衞樣何ぢやいな、まだ生長ある大事の息子、お前方のお世話にはなるまいし、構うて下さんすな。エ、いま〳〵しい。」と捻ぢむく姿、「何と親方見事でござんすか。」「イヤモごんす所ぢやない、あれがさうなら結構な代物、そんなら道々話した通り、三年切つて金五兩。」「オ、出すとも〳〵、合點なら打ちましよか。」しやん〳〵も指さきで、己一人が呑込み仕事、「安いものぢやぞえ、上方の相場なら、五十兩はぶら〳〵、田舍だけで直打がない。コレおかた、大儀ながらいて貰ふかい。」「ム、いて貰ふかとはどこへ何しに。」「ハテ青森の町へ勤め奉公に。」「イヤコレ南兵衞殿、仇口はいつもの事と、聞き流しにして居れば、付き上つて出放だい。あたけがらはしい勤めとは。私には善知鳥文治と云ふ、れつきとした男が有るぞや。」「ハ、、、れつきとした男かして、借つた銀をれつきと戻さぬ、もう催促も仕草臥れた。ぢやによつてわれを賣るのは、高が借した銀取るのぢや、有り難いと思うてきりきりいきやいの、但しわしが引立てうか。」と、無法無體をとくよりも、戻りかゝつて立ち聞く文治、ず

つとはひれば悦ぶ女房、「よう戻つて下さんした、女子一人とあなどつて、あの南兵衞が。」「サアよいてや、何もかも聞いて居る。高が五兩か三兩の目腐り金に、女房賣らいでも濟む事。」と落著く安方、せき立つ南兵衞、「イヤ厚いな〳〵。わりや身上が厚いかしらぬが、我等ずんど薄う成つて、家主にはほんまくられ、身上あり切り行李一くわん、宿なしとなつたれば、借した金とらにやならぬ。今というても銀は有るまい、サア親方、つれ立つていんで銀受取らう。」と、お谷が腕ひつ立つる。其の手を取つてもぎ放し、「ソレ銀戻す受取れ。」と、投げ出す金は金ながら、遂に見なれぬ金の札、「ソレ其の札は金細工、今潰しても三兩ほどの金目は有る。マアそれなりと當座の質物。」「オ、金にさへなるものなら、受取つてやらうが、三兩ではまだたらぬ。」「ホ、其の不足も、暮合ひまでには急度濟ませう。」「ム、暮までなら間もない事、えいわ待つてやらうというても、ぼんなしなりや、いんで居る内がない、暮れるまで爰の内で居催促。コレ五助大儀ぢやあつた休んで貰ふ。」「ハイ〳〵そんならもうよござりますか、ヤレ〳〵親方の役もよつ程氣のはる物。さらばお暇申さう。」と立ち出づれば、お谷は不審、「あの傾城屋といふは。」「オ、虚言ぢや、かうしてゆすらにや金にならぬ、何とようした物か。奥へいて一寐入りせう、ほんまくられて昨日からつがずばう。お方飯が出來たら起して下はれ、雜作序でに酒も一杯。」のみ取り眼のいがみ頬、襖押し明け奥に入る。跡には思案あり顔の、夫の傍にさし寄つて、「申しこちの人、今南兵衞にやらんしたは、ありやマア何でござんす。」と、問ひかけられて、「イヤありや此の間ひろうて來たが、何の役に立たぬ物と思ひの外結構な金の札、あす入る人參代にと思うたれど眞の寶はさし合はせ。」「オ、そんな物なら彼奴にやらずと置いたがよい。今更いふに及ばねど、清童の煩ひより、夫婦が著替はいふに及ばず、諸道具までも賣り拂ひ、けふまで續けた人參代、もうあす入る人參の代さへ人に渡して仕まひ、何の力であの子の本復。見殺しにせうよりは、南兵衞がいうたを幸ひ、私を勤めに賣つてやり、其の金で一分なりとたんと入れ、一日も早うようして下さんせ、賴む〳〵。」といふ内も、涙呑みこむくもり聲、「ア、やくたいもない事いふ人。コレよう思うても見や、以前は槍も持たせた身分、浪人したとて魂まで、女房賣る程穢れもせぬ。氣遣ひ仕やんな、人參代もとうから工面して置いた。」と、ずつと立つて膳棚の隅からおろす硯箱、緣はかけても放れても、昔しみ込む墨の折、ゆがまぬ武士の達筆に、さら〳〵と書き認め、「コレお谷、大儀ながら此の一通、代官所まで持つていきや。」「アノ此の書いた物を代官所へ持つていけとはえ。」「サア夫れを代官所へ持つて行くと、大分の金がくる。」「ム、そりや又どうして。」「サア今戻る道で聞けば、鶴を殺した者を訴人すると、褒美は黄金十枚との噂、其の鶴を殺した者を、私がよう知つてゐるによつて、夫れでわがみを訴人にやるのぢや。」「エイお前も日比の氣に似合はぬ嗜ましやんせ。人の惡事を訴人し

て、褒美に貰うた其の金で、どんな藥を呑ましたとて、何のきかうぞ本復せうぞ。恐ろしい事工まずとも、やつぱり私を勤め奉公、親はなし兄弟持たず、お前さへ合點なりや、誰が點の打人はない、聞き分けて下さんせ。」と、縋り歎けば、「はて扨、役にも立たぬ事をいはずと早ういきや。私ぢやとて人の命何の訴人がしたからう、けれども是れ許りは訴人しても大事ない奴。」「ム、大事ないとはそりやまあどこの。」「イヤ外ではない奥に居るあの南兵衛。」「エイすりやあの南兵衛が。」「シイ聲が高い、眞の是れが厄病の神で敵とやら。」「オ、彼奴なら少々こちから金出してなと、訴人のしたい悪者。そんなら私は一走りいてくる程に、どこもかもようしめて、取りにがさぬ樣にして置かしやんせ。」と、小づま引き上げいそ〳〵と、代官所へといそぎ行く。夫は奥に氣をくばり、そろ〳〵ひらく佛壇の、佛の箔の光さへ、薄き櫛の花抹香、撞木取り出し叩き鉦、なまいだ〳〵〳〵聲も幽かに、「とゝ樣やかか樣はどこにぢや、爰が術ない〳〵。」と、苦しむ聲に鉦打ちやめ、「オ、とゝは爰にゐる、嚊もおつつけ戻るが、藥でも呑みたいか。」「イヤ〳〵藥はいやぢや。コレ父樣、必ずどこへもいて下さんなや、お前が留主ならおりや寂しい。」「オ、氣遣ひすな、どつこへもいきやせぬ〳〵。」と、口にはいへど心には、鶴を殺した科故に、今縛られて行くともしらず、我を慕ふ志、可愛の者やいぢらしやと、思へば胸も張りさける、涙隱して、「コリヤ清童、父はどこへもいきやせねどな、もし用があつて代官所から呼びに來ると行かにやならぬ、其の時必ず泣くなよ。どうぞ早くまめに成つてな、とゝが今看經するは大事のお主、其の主の名を覺えて、大きう成るまで忘れなよ。」と、又佛壇に差し向ひ、「なむ俗名安倍大夫頼時公、家臣鳥海前司安秀が一子、同苗文治安方、今生にての廻向の仕納め、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、ア、此の殿未だ在世の時は、斯く申す我々まで、倶に榮花に誇りしが、いかなれば御武運拙く、八幡太郎義家が計畧の矢先に懸り、世を去りたまひし其の月日は。」「オ、則ち今月今日が、父頼時の十三回忌、法名大了院殿喜山大居士、出離生死頓生菩提。」と、唱ふる聲に立ち寄つて、障子開けば南兵衛が、姿は素袍立ゐほし、一つの位牌を上座に直し、合掌したる有樣は、興さめてこそ見えにけれ。文治はふしぎの膝立て直し、「頼時公を父上とは、心得ぬ今の詞、仔細いかゞ。」と尋ぬれば、「オ、不審尤も。合戰の砌までは、まだ部屋住の其方、我が面體を見しらぬは理、至極、鳥海の城郭にて人となりし、安倍三郎宗任。」と聞くより安方ハ、、、はつと飛び退り、頭をたれて平伏す。宗任素袍の威儀繕ひ、「只今も申す如く、今日父が忌日に當れば、平人の形で廻向申すも云ひ效なく、暫く昔に立ち歸る我が心は、是れより都に上り、折を待つて父が仇、八幡太郎義家を討ちとらんず軍の門出。」「ハア御尤もなる御思立ち、猶も御心勵ます一條、御父安倍頼時公、栗坂の合戰に、討死あり し其の時は。」「ホ、兄貞任と諸共に、衣川の城内にて、軍の次第逐一に、申し上げしは我が父前司

安秀、其の身も深手老の身の、栗坂より引返し、軍難儀に見え候、早く此の城落ち給へ、早く〳〵と、進むる月日はいかなる悪日、天喜五年九月五日。」「ホ、其の光陰も三つ葉のそや、流矢きたつて我が父の、綿醬のはづれより、骨を碎いてむづと立つ。急所の痛手に勇氣もくじけ、つひに其の手で果て給ふ。大將死すれば家の子郎等、親子兄弟ちり〳〵に、妻に別れ子をふり捨て、兄貞任の行方まで、白浪寄する浦々島々、早義家が領地となれば、廣い世界に此の體、置き所さへ夏木立、木にも茅にも油斷せぬ、身と成り果つる其の無念、腦を貫き腸を斷つといへども、時來らねば十三年、仇に戴く天の咎め、磐石と成つて五體を碎く父の怨、追付討つて尊靈へ、手向の追福仕らん。」と、初めて明す南兵衛が、氏も系圖も陸奥に、並ぶ方なき勇氣の大將、「ハア、適れなる御心底、其の御物語が直に追善、喜山大居士安樂國、南無阿彌陀佛。」と廻向のうち、表へ誰か人音に、先づ暫くと開の襖、指し心得て待つ所へ、斯くともしらず女房は、褒美の金に氣も勇み、心も足もいそ〳〵と、「サア〳〵お金貰うて來た。代官樣のおつしやるには、追付捕人を遣はすほどに、先へいんで取りにがさぬやうにせいとの云ひ付け、もう爰へ見えるであろ。南兵衛は逃げはせぬか、かういふ中も油斷がならぬ、早う來てちやつと縛つて下されいで。」と、見やる表へ捕人の大勢、門口より大音上げ、「岩城山の麓において鶴を殺せし大罪人は、此の家の主善知鳥安方と、女房が訴人によつて召捕りに向うたり。尋常に縄にかゝれ。」と、呼ばはる聲に文治安方、「顯はれし上は隱すに詮なし、お尋ねの鶴殺し縄かけて引かれよ。」と、夫の覺悟にお谷が恟り、「コレそりやマア何をいふのぢやいの、鶴殺しは奥にゐる。」「オオ南兵衛というたは僞り、そちを訴人にやらう許り、岩城山の麓にて鶴を殺し、金の札を取つたるは此の安方。」「エイすりや今わしが持つていた訴狀にも。」「オ、自分の科を自分の白狀。」「そんならわしが無筆故、夫れでだましやつたのぢやの、ハア。」はつと許りに伏し轉び、十方涙にくれけるが、「扨も扨も世の中に、物書かぬ身の上程つらい悲しい物あらうか。連れ添ふ男の身の科を、書き記した物ともしらず、悦びいさみ代官所へ、持つていたは何事ぞ。せめていろはを讀むほどなりと、此の目が明いて有るならば何のいかうぞ。無筆と知つてかういふ使に、やつたは私を世の人の、物かかぬ身の見せしめに、なれといふのか文治殿、そりや餘りどうよくな、むごい難面い心や。」と、正體涙に伏し沉む。夫も不便の涙をはらひ、「ホ、其の恨みも尤もながら、何事も定まる業と諦めて、清童を隨分大事に、ナ彼の人へ賴み置く事是れまで〳〵。サア縄かけて引かれよ。」と、詞に猶豫も捕手の役人、「オ、神妙なり。」と立ち寄つて、かくる縄目に取り付いて、お谷が泣聲清童が、屏風ちからに延び上り、「アレとゝ樣が縛られてぢや、詫言して下され。」と、いふ聲俱に屏風もばつたり落ち入る我が子、「ヤアこれ清童が死ぬわいの、コレなう是れ。」とうろつく女房、縄付ながら夫もうろ〳〵、「コリヤ清

童、必ず死んでくれなよ。われを助けう許りに、此の父が命を捨つる、コリヤ氣を付けよ清童。清童やい清童いの。」と、呼べどさけべど息絶えて、其のかひさらに泣きたふれ、「けふはいかなる日なるぞや。我が子に離れ夫に別れ、一人殘つてそもやそも、あられう物か淺ましや。」と、妻が歎けば、夫は猶、涙にむせぶ聲を上げ、「四百四病の煩ひより、貧程つらい物が有らうか。我が子に呑ます人參の、價にせんと鶴を打ち、其の鶴故に我が命、取らるゝのみか子も死ぬる。思へば是れまで多くの殺生、數多の鳥を殺す中にも、まだ巣離れもせぬ小鳥を、育てん爲に親鳥の、野山におりて餌を尋ぬる、夫れともしらず親鳥を、殺せば殘りし子鳥も死ぬる。まつ其の如く我々も、子を助けんとて此の親が、死ぬれば殘りし子も死ぬるは、歴然報ふ因果の道理、親故不便な死をさすか。こらへてくれ赦してくれ、父も追付行く程に、六道の辻で必ず待つて居てくれよ。」と、跡や枕に取り付いて、夫婦は前後正體も取り亂したる許りなり。捕手は哀れよそ目に見なし、「ヤア未練の歎きに時移る。」と、立ち寄つて引立つれば、是非も繩めに恥ぢしめられ、悄々として立ち上る。「コレなう暫し。」と女房が、寄るを突き退け縋るを拂ひ、前後嚴しく取りまく人數、「ヤアお役人まづ待つた、鶴殺しの科人は是れに有り、人違へばしせらるゝな。」と、聲をかけて南兵衛が、一間を出づれば捕手の頭、「ヤア自分の白狀によつて繩かけし善知鳥安方。其の外の科人とは紛らはしき胡亂者、但し鶴を殺したる證據有つてか何と何と。」「オ、證據は則ちこれ爰に。」と、投げ出したる金の札、「鶴が岡の神前に於て、八幡太郎是れを放つとゑり付けし金の札、其の札を所持するからは紛れもない鶴殺し。科ない者を縛らずとも繩といて某を、早く都へ引かれよ。」と、思ひがけなき一言を、聞くより文治氣をいらち、「ヤアいはれぬ我を庇ひ立て、證據が有らうが有るまいが科人は此の文治。」「イヤサ證據が有れば鶴殺しは此の南兵衛。」「イヤ某。」と、爭ふ二人を制する捕手、「慥かなる證據が有れば科人は南兵衛に極まる。此の上は善知鳥が縛め、早とく〳〵。」と南兵衛に、かけ替つたる縛繩、「ヤアいつまでも此の文治、家來の替りに御主人。」と、いふを打消し、「コリヤ〳〵鶴殺しとなつて都へ引かれ、八幡太郎に見參せば、それこそ日頃の願成就、ナ合點か。」と目まぜにはつと心付き、「すりや御所存あつて。」「ホ、會稽は今此のとき。」「イヤ〳〵それは無用の振舞、縱ひ再會の期はあるとも、身動きならぬ其の縛め。」「何の是れしき、縱ひ鐵の鎖を以て繫ぐとも、我が爲には藁同然、一念頭に留まつて、本意を遂げし眉間尺、口に劒はふくまずとも、一心のねた刃を合はさば、何條事の有るべきぞ。ナ心得たるか安方。」と、身を鐵石にかためたる、詞に善知鳥も爲方なく、「縱ひ繩目は助かつても、存命ならず。」と肌くつろげ、山刀拔き放せば、「こはそも如何。」と止むる女房、南兵衛聲かけ、「ヤア何故の切腹、仔細ばし有つての事か。」と、問ひかけられて涙を流し、「今は何をか包み申さん、只今死せし倅と申すは、我々夫婦が子

にあらず、三代相恩の御主人より預りし大事の和子。御大病の介抱も心に任せぬ身貧の某、此の後主人に廻り逢はば、何と言譯あるべきぞ、只切腹を御用捨。」と、おつ取り刀踏み落し、「ヤァうろたへたるたはけ者、縱ひ我が兄、ナそれ汝が兄の子、名は清童子といふにもせよ、定まる命は力及ばぬ。一人にても味方を招く今此の時、犬死して忠義になるか。」「スリヤ死ぬるにも死なれぬ命。」「オ、まさかの時まで汝に預ける、いざお役人御苦勞ながら。」と、いさむ繩付しをる、善知鳥、妻は泣く〳〵野邊送り、何營みもなきがらは、子で子にあらぬ郭公、泣く聲をはつて血を吐く鳥、親も傍にて血の涙、ふらせばお谷がすが蓑や、死骸を覆ふ隱れ笠、隱れあらざる弓取の、其の御種ともお主とも、いふにいはれぬ苦しさは、鴛鴦を殺せし科やらん、善知鳥は返つて生き殘り、我は擒となつたるも、敵を欺く氣の大鳥、追付天下に羽うつ鳥、數々鳥の報いを爰に陸奥の、外が濱なる善知鳥の宮、安方町と名も高き、古跡は今に殘りけり。

第三

さればにや少將は、百夜通へと夕闇の、笠にふる雪積る雪、戀の重荷の朱雀道、七條堤の假橋に、旨女の引語り、襤褸の中の祕藏娘、十許りなが手を出して、右や左の道どほり、西は九州さつまがた、鬼界が島の果てまでも、わしや行く氣ぢやに去りとては、花の都に袖乞と、なりて住むこそ是非なけれ。王城の地は物貰ひも、襤褸さつぱり月代天窗、「どうぢやめくのお袖、よい貰ひが有るさうなの。」「オ、かさの次郎殿か、今夜は闇で人通りは少なし、北風は吹き付ける、手がはじかんで三味線も引かれる事ちやない、何をせいらしい。」「寒の中に涼むのがわがみの渡世ぢやないかいの、がりまは居眠りやせんかよ、商賣におよそな奴ではある。」「オ、イどいつぢや、ム、とんとこの九助今仕舞うたか、儲けるな〳〵。」「イヤ〳〵とんとこも初手は取つた物ぢやが、先繰りに新物が出てとんと衰微、もう今は町中がお長めに喰ひ付き切つた、又どういうても角を絶さぬ奴は佐野の源左衞門。彼奴は株ぢや。」「したがわりやよい儲けが有るかして、見りや立派な御座を冠つて、はでな形するなァ。」「ヘ、いやもうこいつもつめたうて惡い物やい、眞の見てくればつかりぢやわい。」「色取るな〳〵。」「ホ、、、ほんに夫れも一盛り、こちらは此の子一人が樂しみ、去年までは相應に一重の物でも縫うて著せたが、此の春から内障になり、俄旨で娘に介抱受ける身の上、行先を思ひ廻せば夜の目も合はず。今日はお君が誕生日、こんな中でも大事の身祝ひ、こな樣方にも祝うて貰をと、酒も小屋に買うて置いた、したがあの六殿にはさたなしぢやぞや。」「オ、あいつに呑ましたら一升や二升はついころり。」と、人事いはば筵まで、呑み上げる非人の六、諸方のしたみに目はすわり、ふくれ返つた腹立

上戸、「けたいぢやぞ、げんさいの傍にべらく〳〵とおけよ。」「又六めはえらう引いてうせたな、あいつはえい得意を持ちをつて、濱脇の料理茶屋で酒肴の喰ひ飽きしをる。」「サ、夫れがけたいぢや、おりや業がわいてならんわい、けふも川作の屋敷振舞喰て來たが、惣體近年茶屋方の料理が粹過ぎて俺が口に合はぬ、夫れで腹が立つが無理か。そいで大道掃けの犬追へのと、下男か何ぞの樣につかひくさる、是れではもう乞食もやめにやならぬ。コリヤお君よ、をぢが風車買うてやろがえらいか、おりやもうわれが可愛いて〳〵腹が立つわい。」「オ、もうこちの娘が可愛いのが何の腹の立つ事で。」「腹が立たいぢや、コレおめへ、一體おりやわがみの器量のえいのが腹が立つ、乞食だてらそんな美しい顔が、どこに有る物ぢや。無理か、むりならどいつでも相手ぢや。」と、くだまく聲も酒草原、踏み分け來る瓜割四郎、「ソレ今のお侍樣、ハア。」と二人が犬蹲ひ、「非人共が最前言つた生駒之助、傾城戀絹取り逃したか、何と〳〵。」「サア申し、晝ちよつと眼ばりましたれど、先もさぶなりやめつさうにはかゝられず、幸ひ爰にをる六といふやつは、酒くらふとあはう力、こいつに仕事さしませう。コリヤ六よ、爰へこい、又存在な脚投げ出して辭儀しをれやい。」「いやぢや、おりや茶やの料理人より外に腰かゞめた事がない。」「イヤサよう聞け、其の二人のやつおいらがいてぐづりかけて爰へおこすわ、われが爰に待伏して居て、男めをぶちのめす、そこでけんさいをあなたへ渡すと、御褒美にさすは存分、あなたの振舞のみ込んだか。」「ム、、酒呑ますか、謔ぢやないかよ、コレ殿樣、そんならマア酒の方を先へせうかい。」「イヤ〳〵〳〵あのうへ呑ますと本たわいになります。」「オ、サコリヤ六とやら、しおほせた跡では呑み喰ひはわが望み次第、酒は伊丹の薦かぶり。」「オット差合ひ、言はるな。」「ム、こりや麁相、肴は鰒汁。」「夫れも差合ひ、鰒は俺が同行中ぢや。」と、横にふくれた腹鼓、咽をならして別れ行く。「もう人通りもなささうな、仕舞うて休もサアお君。」と、親子かたへの小屋の中、鳥のふしどと鄰同士、露を荷ひし乘物釣らせ、源家の妹八重幡姫、此方の土手を眞直に、平傳杖直方、互に行き合ふ提灯の、紋に見しりの一家中、「是れは〳〵八重幡殿、夜中に何國へ。」「ちと心願の事あつて。」「ム、神詣でか、歩づから殊勝々々。」と挨拶半ば、生駒之助は戀絹が、手を引き漸う火かげを目宛、「狼藉者に出合ひ難儀致す、憚りながら此の女をしばしが間お預り。」と、差し出す提灯ハツト恟り逃げ行くを、傳杖目早く、「コリヤ〳〵若者、わりや道にまようたな。爰は京、京中が闇いから、人の誠の本海道は行かずして、色々の道に迷うて居るな。ソレ火を借つてとつくりと、心の闇を見たり見せたり、身共は老人猶以て何にも見えぬ。よし見えても、八重幡殿とは一家の中、急ぎの用事、早參る。」とはづす老功粹親仁、妼下部さし心得、一人も殘らずばら〳〵と、氣を通されても濟まぬ中、わざと慇懃三つ指に、「先づ以て姫君樣、御安體の尊顏を拜し、恐悅至極。」と相述ぶる。「オ、さ

ういやるは無理ならず、したがもう其の樣に氣を置いて下さんな、私やふつつりと思ひ諦め、心の髪は切つて居る。ハテ思ひ合つた中を引分け添うて何の本望、殊に兄上のお媒遊ばした戀絹殿、中よう添うて其の代り、未來の緣を、コレどうぞ賴みまする夫婦の衆。」と、思ひ切つては中々に、見向きもやらぬ心根に戀絹も恥ぢ入つて、「勿體ない〳〵、夫れを聞いては私が方から、思ひ切るとも申されぬは、ひよんな物を身に宿し、退くにも退かれぬ惡緣。そんなら御詞にあまえて、御大事の物なれど此の世はわたしが借分、來世ではきつとお歸し申します其の證據、ちよつと爰で御祝言の御杯がさせましたいが、ァ、どうがな。」と案ずれば、「其のお杯私が差し上げましよ。」と、小屋の簾を押し上げて、さぐる目病のすり足に、緣も缺けたる三寶土器、つゞれの上の襠は、やれても昔牀しけに、「どなたかは存じませぬが、最前から御尤もなせつない戀のお話、私も仔細あつて夫に飽かぬ別れをせし者、身に引當てておいとしぼく、つゞれの袖をしぼりしぞや。箇樣に申さば賤しいきたない非人めが、穢らはしいとも思さうが、私とてもまんざら、前からかうした身でもござりませぬ。今日は此のちひさいやつが誕生日、昔を思ひ出して調へし九獻熨斗昆布、心許りの身祝ひ、幸ひの折からと、慮外を忘れたお媒。サァお君、教へて置いた祝言の長柄お酌申しや。」と挨拶に、姫君嬉しく杯の、底意晴れたる取り結び、さいつさされつ酌みかはす。待ちぶせしたる非人の六、酒の匂ひを

かぐよりも、以前の仕込は忘れて仕舞ひ、ほや〳〵笑顔揉手して、「へ、、、、ホ、、、おめでたい御祝言、私もお取持ちにちつとお聞、お酌これへ。」とかけ茶椀、息なしに咽ごく〳〵、「ホウ結構なお酒でござりまする、ハ、、、、旦那慮外申しまする、肴は爰に有山の面桶の底から鮪の足。」「イヤ過分なが身は精進。」「そんなら私祝うて最一つ下さりましよ。お家樣上げましよか、おいやか、そんなら一つ下さりましよ。御寮人樣もおいやか、そんなら我等も一つ。」とほつとする程續け呑み、戀絹が替つてお酌。「イヤ〳〵申し、見苦しくともやつぱりあれに、娘が生長あなた方にあやかり、よい殿御もつて祝言を。ホ、、、、私としたことが、非人乞食の身の上で、何の祝言所と嘸お笑ひなされう、思へば〳〵淺ましい身の上。ハ是れはしたり、大事のめでたい御祝言につい涙が、私も祝うて君は千代ませ〳〵と、くり言の祝ひ歌の面白の時代や、おめでたや〳〵。祝ふに付けて我が娘も、昔の身ならお乳めのと、對待十種香藝づくし、教へも覺えもせう物を、ろくな事でも教へるか、橋の上の乞食の娘、誰が娶にも取つてくれう。侍の種を受けながら、町人百姓にも緣付の、ならぬは何の報いぞ。」と、昔を忍ぶ悔み泣き、身につまされて三人も、いとしや道理とても涙、六も數獻の持ちこしに、貰ひ涙のかひ作り、「どうやら酒が理に入つて、俺も悲しい〳〵。」と、しやくり上げたる折柄に、かけ來る次郎七九助、「コリヤ〳〵六何して居る、きり〳〵しかけて慳んでしまへ。後詰にはおいらが

ゐる、早う〳〵。」とせり立つれば、ないじやくり、「次郎七か九助か、エ、わいらはえい機嫌ぢやな、おりやさつきにから哀れな話を聞いて、泣いてばつかり居るわいやい。わいらも、アレあなた方の形を見い、雛様の様なお姫様が酒買ふ錢がないやら、乞食に酒を振舞はれ、せめて天目でもある事か、嚙みわる様な杯に、酒ならたつた一升で、謝つてござる心根が、思ひやられておいとしい。」と、涙と俱に又どぶ〳〵。「エ、いま〳〵しい又喰らうたな、其の酒こちへ。」とたくりに掛れば、「イヤ〳〵夫れから御らうじませう、どなたでもどいつでも、旦那衆に手向ふやつら、おれが相手。」と尻引きからげ圍うたり。「どつこいやらぬは乞食に差合ひ。」「貰うてこませ。」と兩方から、取り付く襤褸の破れかぶれ、うぬらは世界の餘り物、命の高はげんこ取り、ころ〳〵轉び逃げ行くを、酒に任せて追つて行く。向うに數多の人音は、「申し〳〵、今の侍がくるので有らう、ちつとの間わたしが小屋へ。」と、二人を伴ひ入る間もなく、血眼になつて瓜割四郎、「何方へうせた。」と家來もしどろ、「暫し〳〵。」と儀杖直方、「コレサ四郎あわたゞしい面色、先づ何を詮議めさるゝ。」と尋ねられて、「イヤ何其の儀は貴公も、此の程お吟味なさるゝ宮を奪ひし曲者、草をわかつて詮議せよと主人が云ひ付け、姫君も是れにお渡り、此の小屋が物くさいソレ家來共。」「ナイ〳〵〳〵、非人め出ませい出をらう。」と、呼ばれておづ〳〵這ひ出づる。「つつと出をらう。」「ハイ。」「まだ出をらう。」「ハイ。」「頬上げい。」と突き付くる箱提灯の火明りは、老眼にも見違へぬ、絶えて久しき我が娘、ハツはつと許り仰天ながら聲をくろめ、「ム、此の小屋の非人は我か、ハア非人ぢやよな。汝もよもや腹からの乞食とも見えぬ、町人か但しは武士の娘か。」「ハイ御推量の通り、成り下つたは若氣の誤り、清水詣での折から、東國方の浪人と不圖馴れ初め、種を宿して是非なき家出、其の夫にもあふぎの別れ。」「ホイはてな。」「ヤアくどくど云ふ手間で、うぬが親夫の名をぬかせ。」「ハイ夫ればつかりはどうも。」「なぜ〳〵。」「名を申す程不孝の上ぬり。此の身こそかう成りたれ、親の名は出すまいと晝は袖乞も得致さぬは、せめてもの申し譯。」「オ、尤もさう有らう。今の其の心底を、誠の親が聞くならば。」と、我が名は言はぬけんぢやう向、千々に心ぞこもりける。「ヤア彌以て胡亂者、まだ隱して有るやつが有らう、直に詮議。」と立ち寄る鐺しつかと取つて、「お待ちやれ四郎、宮を奪ひしやつの詮議、お身は賴まぬ身共がする、横合からいつかい世話。但し老人でか樣の吟味も得せまいと思うてか、推參至極。」ときめ付けられ、「ア、これ〳〵〳〵まつ平御赦免。いやもう拙者も御一門の家來なれば、只今のは御心安立。イヤ姫君にももうお立ち、お供廻りはどつちへうせた、參れ〳〵。」と脇道へ、「ホンニそれ〳〵自らも、夜の更けぬ内歸るがよかろ、此の間にちやつと行くがよかろ。」としらせの謎。お袖が小屋の後から、押しやる主從妹脊の別れ、親子のわかれは子はしらで、親の思ひの闇深き。儀杖が郎等あわたゞしく、「只今大江

の維時公より、宮の御詮議何故に遅なはる、日延の時刻も一日にせまる、尋ね出すか切腹有るか、二つ一つの御返事あるべしとの御事なり。」「ナニ維時が使とな、直に逢ひて返答せん、供せよ彌惣太、提灯もて。」と夕嵐、鐘もときつく八重幡姫、「儀杖様の一大事、ァ、氣遣はしや、家來ども乘物參れ。」と呼ばはる聲、お袖が聞き付け、「申し〳〵、儀杖様とは平儀杖直方様ではござりませぬか。」「イヤ夫れ聞いて何にする。」「ャァそんなら今のが、コレ申し一大事とは何の譯、ちょつと聞かして。」「ヤァ面倒な。」と突き飛ばし、乘物急げと四郎が逸散、慈悲も、白砂ころ〳〵〳〵、轉ぶ蘆邊の濱千鳥、嵐に髪もばら〳〵〳〵、親子手を取り雪の足、跡をしたうて　三重たどり行く、心の内こそ哀れなれ。平儀杖直方、環の宮の御行方、知らぬ筑紫のほとゝぎす、夏去り冬のいつしかに、既に今年の日の數も、春待つ許り枯れ殘り、枯れ果つる庭の檜皮ぶき、落葉の軒とふきかへて、殿守の女中仕丁もなく、老の忠義の一筋に、竹の園生の傳きも、つもる白髪に雪折れて、妻の濱ゆふ只二人、夫婦の人なんいまそかりける。緣先に立ち出で、「なう殿、お年寄の雪ふりに、庭へ出て何なさるゝ、寒氣が入らうにもうおはひり、ちと火にお寄り。」と、きり炭のじようになるまで女夫合、「サレバ〳〵宮様行方なく成り給へば、此の御所は明屋敷、我々夫婦が箇様に御番は致せども、肝心の主なければ、玉の御殿も鳥の塒と成り果て、今日なども宮在すならば、仕丁ども共に木の葉の雪を拂はせて、御遊びなされう物をと、ふと思ひ出して子供の眞似する雪なぶり、天地の中にさへましまさば、奪ひ返して此の恥辱すゝがん物と、心は雲にも入りたけれど、都の中を身動きならねば、空しく胸をいる許り。不便なは娘敷妙、日本の智者と呼ばるゝ、八幡殿に連添ひながら、不覺を取つた此の親ゆゑ、夫の手前も恥かしく、嘸肩身がすぼらうと、そも此の春より一夜さも、實にねた夜はおぢやらぬ。」と、奥齒もれくるまばら聲。「ァ、よござりますわいの、弓取の不覺といふは軍の中の臆病、こりやほんの災難、敷妙が事おつしやるに付けて、思ひ出すは姉娘の袖萩、親にもしらさず忍び男を拵へての家出。憎い奴と思うたも早一昔、其の時はまだ十六の跡先なし、年もいたれば嘸今頃は悔しう思うてゐるであろ。どこに狼狽へて居る事ぞ。」「エ、又姉めが事ぐどく〳〵〳〵と、思ひ出すも穢らはしい、不孝者といはうか、武士の家の不義放埒、再び頬も見まじと思ひしに、まだ業がみてぬやら、朱雀堤の橋の上で。」「エ、橋の上で何としたえ。」「サァいや何ともせぬ、縱ひ橋の上で、のたれ死しをらうが不便なとも思はぬ、お身は又何とぞ思ふ氣か。」「イ、エ何とも存じませぬ。」「ォ、身共は結句、心地よく思ふわい。」と、口は憎てい身を背け、物事包まぬ夫婦中、涙一つは隱しあふ、妼共が取次の間、「敷妙様御出で。」と、娘ながらも案内は、武家の行儀の表門、流石親子の中座敷、「ォ、此の頃は便りもなし、心地でも悪しいかと、儀杖殿も案じてぢやに、ようおぢやつたサァ〳〵爰へ、テモ美しう髪結やつた。」

と、子供の樣に思ふは母、「イヤ申しけふ參つたはお見舞ではない、傳杖樣へ、夫八幡太郎義家が使者でございます。」「ム、ハテ變つた、表向の用事ならば、家來は越さで、其方を使者とは。」「コレ〳〵奥だまりやれ、何にもせよ使者と有れば、娘は内證いざ御使者、御口上の趣承らん。」と有りければ、「義家申し越す仔細、環の宮お行方なき事、御傅の傳杖殿誤り據なし、日延の日數も今日限り、若しも言譯なきに於ては、罪を正す義家が役、壻舅の容赦は致さず、敕諚を以て取り圍み、敵味方と成り申さん、其の時必ず遺恨にばし思はれな、其の爲申し遣はす、使者の口上あら〳〵斯くの通りでござんす。」と、語る中より傳杖直方、いそ〳〵立つて一間の内、柳箱に飾つたる旗と思しく携へ出で、「扨々八幡殿は天晴仁ある大將かな、元來某は平家、八幡殿は源氏、壻舅となるは稀なる事と、そちを嫁らした其の時より、壻引手に赤旗一流遣はし、八幡殿より此の白旗一流、取りかへて所持せしは、兩家合體の其の印。此の度の我が誤りに付いては言ひ甲斐なき舅、由なき緣を組みしよと思はれんは必定。大方娘と緣切つて、此の旗を取り戻しに來るで有らう、若し去られたら其の思ひはいか許り。どうぞ此の白旗のやはり此の家に止まる樣にと、此の頃神前に飾り置き、毎日祈るかひ有つて、今日娘を表向の使者として、差し越されし八幡殿の心底、たとひ壻舅、敵味方に成るとても、敷妙は去らぬと有る情の謎、老人が心を察し心遣ひの御深切、逢うては禮も言はれぬ義理。お使者歸つて申されうは、仰せ越さるゝ趣一々承知仕る、委細の心底は對面の上申し聞かん、お出でを待つと傳へられよ。お使者大儀。」と式禮も、弓矢の面裏門口、八幡太郎參上と、白衣ながらに入り給へば、コハいつの間にと敷妙も、不審立てそに立つ母親、此の比絶えし一家の參會、お茶よお菓子と賑賑し　直方邊に目をくばり、懷中より一通取り出し、「親しい中にも胸中を計りかね、今日までは壻殿にも包みしが、宮の御行方尋ぬべき、手がゝりといふは此の狀、契約のごとく環の宮を、密かに盜み出しくれよと、匣の内侍へ賴みの文體、名は誰ともなけれども、必定安倍賴時が餘類、貞宗宗任兄弟の族、奪ひ取つて傍等が、味方を集むる柱にせん爲、さあれば御命に別條なしと、心の安堵はしながらも、言譯立たぬ身の越度、我が心を推量あれ。」「ホ、ウさこそ〳〵、我が推察も其の如く、此の程奥州より捕へ來たる鶴殺しの科人、面魂尋常ならず、肩口に二つの黶、是れぞ兼て聞き及ぶ目印、疑ひもなく、安倍宗任一人は手に入れしが、今一人の兄貞任、此の兩人さへ捕へなば、宮の行方明白たらんと、則ち彼の宗任を此の館へ引かせ來る、禁庭の御沙汰なき中に、詮議肝要たるべし。」と力を付くる時しもあれ、柱中納言樣御出でなりとしらすれば、「ソレ氣遣ひ私の内意か敕諚か、女儀は次へ。」と改むる座席に心殘れども、母と娘は立つて行く。中納言敎氏卿、衣冠の袂に薫りくる、雪より出でて、雪より白き白梅一枝、小四方に取り乘せ持參あり。「傳杖には此の間、公の御不審蒙り嘸

心を痛められん、鬱氣をはらす此の梅、まだ冬籠りの枝なれど進上申す。此の花と諸共、喜悦の眉を開かれよ。」と、直方が前に差し出し、「義家朝臣の在するも、彼の詮議の一條ならん。殊更親しき一家の中、御心底察し入る。」「コハ卿の御詞とも覺えず、一家は一家、政道に依怙なき義家、詮議の手掛りに成るべき科人、先だつて捕へ置く。ヤア〳〵義家が家來共、鶴殺しを是れへ引け。」と呼ばはり給ふ一聲に、鶴の科人出でをらうと、權威の下部は繩蟲と見下し、破れ布子の繩付ながら、眼中威勢備はつて、實に大將の、見參とこそ見えにけれ。「鶴を打ちたる科人、外が濱の南兵衛とは假の名、奥州の住人、安倍頼時が次男宗任ともいはるゝ勇士、夫れ程のへろ〳〵繩引き切るは安かるべきに、態と下部に引出さるゝは、義家に鬱憤をいはんず爲な。聞いて得させん、サア何と、語れいかに。」と宣へば、「是れは又思ひがけもない、そんなむづかしい名は生まれてから、聞いた事もござりませぬ。ばくち打ちの南兵衛に違ひなければ、元よりお前樣に勿體ない鬱憤とやら一分とやら、きなかもかけ直は申しませぬ。兎角命が惜しいばつかり、何卒お慈悲に繩といて、お助けなされて下さりませ。」と、泣かぬ許りのしら〳〵しさ。「ム、然らば汝うぶの匹夫下郎に違ひないな。此の旗を見知つてをるか、是れこそ、我が父伊豫守、奥州追伐の折から、押し立て給ひし白旗。其の時宗任が親安倍頼時、大將めがけ放ちし矢先、ねらひはづれて此の旗に受けとめ、即時に踏み折り捨てられし、其の矢の根はコレ

髮に。ハ、、、、頼時づれが拙き運にて、源氏に敵對叶はぬ事、今にも其の餘類あらば、却つて敵の此の矢を以て、斯くの通り。」とてうど打つ、鏃は庭の手水鉢、じろりと見やつて、「是れは扨、危い事を。」とそらさぬ顔。敎氏卿進み出で、「よし手練はともあれ、縱ひ誠の宗任なりとも、匹夫下郎に等しき男、大望の企て思ひもよらず。奥州の果てに生まれ、草木の名も知らぬ鹿猿同然の族、かくいふが無念ならば、コレこの花の名を知つつるか。」と、白梅取つて差出し、「東夷の目にはよも知るまじ、知つたらばいうて見よや。」と嘲弄ある。宗任ぐつとせき上げ、「南兵衛といふ下郎でござれば、花の名はいかにも存ぜぬ、併しさう被仰る敎氏卿も、以前は流し者に合つて配所の島守、漸う此の頃召し返され、冠裝束かけたればとて、正眞の山猿の冠、相手になる口は持たぬ、身が返答はコレかう。」と、そばに立つたる件の矢の根、口にくはへて我と我が、肩口つんざく血潮の紅、何かはあやも白筈に、鏃の筆のさら〳〵と、文字あざやかに染めなすは、東夷の名にも似ぬ、三十一文字の言の葉に、座も白梅の枝折りて、冠傾き見えけるが、「ム、詞爭ひ無益しと、和歌を以ての返答、我が國の梅の花とは見たれども、大宮人は如何いふらむ、面白し〳〵。我に歌を詠みかけしは、返歌せよとの事ならん、去りながら最前汝がいふ如く、此の敎氏は父の卿諸共、幼少より島へ赴き、鄙に育ちしはづかしさ、雲の上に座を列ねながら、我さへも得詠まぬ歌を、かく即席に詠み叶へし器量骨柄、問

ふに及ばず安倍宗任に違ひなし。いはれぬ歌で蛙は口から、我と我が手に白狀せし、淺はかさよ。」と一言に、勝色見する梅花の頓智、術に乘りし無念の宗任、口にくはへし鏃の手裏劍、大將めがけ打ち返すを、てうど留めたる源氏の白梅「ホ、ウ尤もかうこそあるべけれ、生捕るも捕はるゝも時の運命恥とな思ひそ。猶此の上に義家が、尋ね問ふべき仔細有り、こなたへ引け。」と引き立てさせ、奥の間さして入りたまふ。敎氏傍を打ちながめ、儉杖が傍近く、「扨々心づかひ察し申す、未だ言譯の筋もあらざるや。」「ハッア夫れ故にこそ、心を痛め罷りある。」「さこそあらん夫れに付き、今日貴殿に心ざしたる此の梅は、まだ寒中に室にて溫め咲かせし花、天の自然にあらねども、春を待ち得て咲く花より、早きながめを人の賞翫、又ちる時も其の通り、しほみかじけて見苦しうならぬ先に、此の枝のごとくさつぱりと、切れば却つて香も深し、花に限らず身にも又、切り時が大事、左樣には思はれずや。」「ム、御心深き此の一品、ちり掛つたる老の枝、切れと賜はる天の賜、花物いはねど御謎に白梅の腹切刀、慥かに落手仕る。」「ォ、天晴明察、大江維時なんどいふ、讒者の嵐に吹きちらされぬ其の先に、花は三吉野人は武士、名を後の世にちらさぬ樣の、思案ぞあらまほしけれ。」と、梅に詞を匂はせて、しづ〳〵立つて入りにける。只さへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間になほす白梅も、無常を急ぐ、冬の風、身にこたふるは血筋の緣、不便やお袖はとほ〳〵と、親の大事と聞くつらさ、娘お君に手を引かれ、親は子を杖子は親を、走らんとすれど雪道に、力なく〳〵たどり來て、垣の外面に、「ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだの。」「イ、エ門口に侍衆が、居眠つて居やしやつた間に。」「ォ、賢い子ぢや、儉杖樣は此の春から、主のお屋敷にはござらず、此の宮樣の御所にと聞いて、どうやらかうやら、爰まで來事は來たけれど、御勘當の父上母樣、殊に淺ましい此の形で、誰が取次いでくれる者も有るまい、お目に懸つて御難儀の樣子がどうぞ聞きたや。」と、さぐればさはる小柴垣、ム、爰はお庭先のしをり門、戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い、此の垣一重が鐵の、門より高う心から、泣く聲さへも憚りて、簀戸に喰ひ付き泣き居たり。儉杖は斯くともしらず、「垣の外に誰やら人聲、アレ女共はをらぬか。」と、言ひつゝ自身庭の面、外には夫れとなつかしさ、恥かしさも又先だつて、覆ふ袖萩しらぬ父、開けて惜り戸をぴつしやり、何の御用と妼共、濱ゆふも庭に立ち出で、「儉杖殿何ぞいの。」「イヤ何でもない、見苦しいやつがうせをつて。妼共追ひ出せ、ばゝ、あんな物見る物でない、此方へお來やれ〳〵。」と、夫の詞は氣も付かず、「何をきよと〳〵いはつしやる、犬でもはひりましたか。」と、何心なく戸を開けて、よく〳〵すかせば娘の袖萩。はつと呆れて又ばつたり、娘は聲を聞き知れど、母樣かとも得もいはず。母は變りし形を見て、胸一ぱいにふさがる思ひ、押しさげ〳〵、「定めない世といひながら、テモ扨も〳〵思ひがけもない。」「コレ〳〵ばゝ何いやる。」「イ

ヤさあやつぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め。親に背いた天罰で目も潰れたな、神佛にも見離されれ、定めて世に落ち果ててをらうとは思うたれど、是れは又あんまりきつい落ち果てやう。今思ひしりをつたか。」と、餘所にしらすも涙聲、樣子しらねば妙共、「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、お庭先へむさくろしい、とつとと出や。」とせり立てられ、「ハイ〳〵どうぞ御料簡なされてまちつとの間。」「ハテしつこい。」と女中の口々、「ヤレ待つてくれ女共。ヤイ物貰ひ、お錢が欲しくばなぜ歌を謳はぬぞ、願ひの筋も何なりと謳うて聞かせ。」と夫の手前、ちつとの間なと隙入れたさ。「あい。」とはいへど袖萩が、久振りの母の前、琴の組とは引きかへて、露命を繋ぐ古絲に、皮も破れし三味線の、「ばちも慮外も顧みず、お願ひ申し奉る。唄今の憂身の恥かしさ、父上や母樣の、お氣に背きし報いにて、二世の夫にも引き別れ、泣きつぶしたる目なし鳥、二人が中のコレ此のお君とて、明けて漸う十一の、子を持つてしる親の恩、しらぬ祖父樣祖母樣を、したふ此の子がいぢらしさ、不便とおぼし給はれ。」と、跡謳ひさしせき入る娘。孫と聞くより濱ゆふが、飛び立つ許り戸の透間、抱き入れたさすがりたさ、祖父もかはらぬ逢ひたさを、隱してわざと尖り聲、「ヤァかしましい小歌聞きたうない、女共も奥へいて、お客人に付いて居よ、皆いけ〳〵。コレサばゝ、何うじ〳〵、早く畜生めを擲き出して仕廻やれさ。」「ア、コレ腹立つは尤もなれど、夫れはあんまり。」「ハテ奴ておばゝ、隙入る程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎、擲き出すとはまだ親の慈悲、長居せばぶち放さうか。親の恥を思うて、名を包むはまだしもと思ひの外、今となつて身の置き所がなさの詫言、恥つらも構はずよくうせた。但しは親へ頻當に、わざと其の形を見せにうせたか、につくいやつ。」と怒りの聲、袖萩悲しさやる方なく、「なんの〳〵せいもん、勿體ない去りながら、さう思しめすも御尤も、大恩を忘れた徒ら、我が身ながらあいその盡きた此の體、お詫び申したとてお聞き入れが何のあろ、そりや思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも、來られる身ではなけれども、お命に係る一大事と聞いて心も心ならず、顔押しぬぐうて參りました。不孝の罰で目はつぶれる、此の子を連れて、爰の軒では追つ立てられ、かしこの橋ではうち擲かるゝうきめにあうても、此の身の罪にくらぶれば、まだ業の果し樣が足らぬと、未來が猶しも恐ろしい。此の上のお願ひには、娘のお君お目見えと申すは慮外、只の非人の子と思召し、たつた一言お詞を、おかけなされて下され。」と、歎けばお君も手を合はせ、「申し旦那樣奥樣、外に願ひはござりませぬ、お慈悲に一言物おつしやつて下さりませ。」と言ひ馴れし、袖乞詞に濱ゆふが、「かはいやな子心にさへ身を恥ぢて、祖父樣ともばゝ樣とも、得言はぬ樣にしをつたは、皆汝が徒ら故。畜生の樣な腹から見事犬猫も產みをらず、生まれ落つると乞食さす子を、あの樣におとなしう、產み付けざまは何事ぞ、餘り憎うておりや物がいはれぬ。」と、むごういふのは

可愛さの、裏の濱ゆふ幾重にも、お慈悲〳〵と泣く許り、儛杖猶も聲あらゝか、「親が難儀にあはうがあふまいが、女めがいらざる世話。同じ兄弟でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄、姉めは下郎を夫に持てば、根性までが下主女め。」と、恥ぢしめられてわつと泣き、「下主下郎とはお情ない、夫も本は筋目ある侍黒澤左中とは浪人の假の名、別れた時の夫の文に筋目も本名も書いてござんす、是れ見て給べ。」と差出すを、取次ぐ紙のはしくれも、詫の種にもなれかしと、思ふは母より直方が、讀む文體の奥の名に、奥州安倍貞任とはなむ三寶、扨は貞任と緣組みしかと、心もそゞろに懷中の、一通取り出し引合はせば、扨こそ同筆。ハァはつと許り當惑の、色目を見せじとずんど立ち、「穢らはしい此の狀、彌以てあふ事ならぬ、サア奥こちへ。ハテぐづつかずと早おぢやれ。」と、尖い詞にせがまれて、母も是非なく立つて行く。「なうコレ暫し、もう逢はうとは申しませぬ。お身の難儀の其の譯を、どうぞ聞かして下さりませ、申し〳〵。」と延びあがり、見れど盲の垣覗き、早暮過ぐる風につれ、折から頻りにふる雪に、身は濡鷺の蘆垣や、中を隔つる白妙も、天道樣のおにくしみ、受けし此の身はいとはねど、樣子聞かねばなんぼでも、いなぬ〳〵と泣聲も、嵐と雪に埋もれて、聞えぬ父と恨み泣く。次第々々にふりつもる、寒氣に肌も冷え切れば、持病の癪の差し込んで、かつぱと轉べばお君はうろ〳〵、さする脊中も釘冰、涙かた手に我が著もの、一重をぬいで母親に、著せてしよんぼり白雪を、すくうて口に含ますれば、漸うに顏を上げ、「オ、お君もうよござる、此の又冷える事わいの、其方は寒うはないかや。」「イエ〳〵私は、溫かうござります。」「よう著て居やるか、ドレドレ、ヤアそなたはこりや裸身、著物はどう仕やつた。」「あんまりお前が寒からうと思うて。」「ヘツエ親なればこそ子なればこそ。わしが樣な不孝な者が何として、そなたの樣な孝行な子を持つた、是れも因果の中か。」とて、抱きしめ〳〵泣く涙、堪へかねて垣越しに、襠ひらりと濱ゆふが、「さつきにから皆聞いて居る。アツア儘ならぬ世ぢやな、町人の身の上ならば、若い者ぢやもの徒らもせいぢや。そんなよい孫產んだ娘、ヤレでかしたと呼び入れて、壻よ舅といふべきに、抱きたうてならぬ初孫の、顏もろくに得見ぬは、武士に連添ふあさましさと、諦めていんでくれヨ、。」といふ中に、奥濱夕と呼ぶ聲に、「アイ〳〵そこへ參ります、娘よ孫よもうさらば、かはいの者や。」と老の足、見返り見返り奥へ行く。折しも庭の飛石傳ひ、雪明りに窺ひ寄る、安倍宗任戸を引明くれば、「ア、こは。」と立ちのくお君をぢつと捕へ、「コリヤ恐い事はない伯父ぢや。」「エ、イ伯父樣とは。」「オ、そちが伯父の宗任ぢや。」「ヤア宗任樣とは夫貞任殿の弟御。」「オ、つひに逢はねど嫂の袖萩殿。」「ア、そんならお前に問うたら知れるであろ、夫婦別れる時夫に預けてやつた、此の子が弟の清童は息災で居るかいな。」「オ、其の清童はの、傷寒で死んだわいの。」「エ、イ、オ、ハア。」「歎きは理、何かに付

けて一家の敵は八幡太郎。こなたも兄貞任殿の妻ならば、今宵何とぞ近寄つて、直方が首討たれよ。」「エ、あの父樣を。」「オ、生け置いては我々が大望の妨げ、此の懷劍で。」と手に渡す、難題何と障子の内、「曲者待て。」と大將の聲に恟り、「折惡しし、そちへ〳〵。」と忍ばせて、胸をすゑてどつかと坐し「繩引切つて逃げ出でんと存ぜしに、見付けられたは運の極め、サアいか樣とも行はれよ。」と、腕押廻せば義家公、繩にはあらで眞紅の絲、結びし金札宗任が、首にさつくと打懸け給ひ、「綱に洩れたる鱗を助けるは天の道、鳥類の命さへ重んずる我が心、況んやあつたらしき勇士、命を助けソレ其の札、康平五年源義家是れを放つと書き記せば、此の上もなき關所の切手、肩口の痣は切りさいても、武將の息の懸つた汝、繫ぎし犬も同然、日本國中を放飼ひ、何國へなりとも勝手に行け。」と、仁者の詞にハアはつと、雪に頭は下げながら、底の善惡閉ぢ隱す、冰を踏んで別れ行く。夫の最期を濱ゆふが、白梅の腹切刀、三寶に乘る露涙、外にも同じ袖萩が、思ひがけなき難題に、死ぬより外はなくなくも、歸る戸口に父傳杖、饌に錠しつかと下し座に直り、三寶取つて頂戴し、押肌ぬいで覺悟の矢の根、取るとはしらぬ袖萩が、娘に見せじと突込む懷劍、はつと驚き取り付くお君、聲立てさせじと抱きしむれば、母は夫が片手に押へ、「まだ女めはいにをらぬか、氣強くはいふ物の年寄つた體、いつ何時の病死もしれぬ、聲なりともよく聞いておけ。」と、それとはいはぬ暇乞。とは露程も袖萩が、「扨はお心和ぎしか、かう成り果てた身のうへ、どうで追付のたれ死、是れがお聲の聞き納めでござりませう。」と、親と子が、一所に死ぬとは神ならぬ、障子押し明け立ち寄る敎氏、母はかけおり、「ヤアそなたは自害したか、傳杖殿も御切腹。」「エイ父樣も。」「娘も。」と一度に驚き轉びおり、垣押し破り張りさく胸、呆れ涙に別ちなし。手負を見屆け中納言、「樣子具に承る、貞任に緣を組まれし御邊、壻の詮議もなるまじ。所詮死なで叶はぬ命、袖萩とやらんも死なずばなるまい、跡の詮議は某がよき樣に計らはん。健氣なる最期の樣子、天聽に達し申すべし。」と、冠け高くしづ〳〵と、心殘して立ち出づる、衣紋に薫る風ならで、奇しや聞ゆる鐘の聲、コハ訝しと立ちもどり、邊に心目を配る、一二の對の屋隅々に、太鼓の音の喧し。「ハテふしぎや、此の明御殿に陣鐘を打ち立つるは、何者なるぞ。」とふり返る、一間の内より高らかに、「八幡太郎是れにあり、奥州の夷安倍貞任に見參せん。」と、立ち出で給ふ御大將、續いてかけ寄る二人の組子。さしつたりと身をかはし、弓手妻手へはつたと蹴飛ばし、「ヤアラ心得ず、桂中納言敎氏を、貞任とは何を以て。」「ホ、ウ此の義家、天眼通は得ざれども、弓矢の道には賢き某、過ぎつる大赦の砌、桂中納言なりと名乘り來る其の時より、島育ちを云ひ立てに歌詠まず筆取らず、何條しれ者ござんなれと、つく〴〵面體を窺ふに、我が稚き時見覺えし安倍頼時にさも似たり。扨こそ宮の御行方、十握の寶劍をも取り隱せしに極まつたり。姿をかへて禁

庭へ入り込みしは、なほ二色の御寶を奪ひ、親が根ざしの大望を達せんとの工みよな、爭はれぬ證據はこれ。」と、白旗を取り出し給ひ、「最前汝が弟宗任と、別れて程へし兄弟の對面、梅の花によそへし我が顏を、見覺えたるかとかけたる謎、早くも悟つてコレ此の歌。我が國の梅の花とは見たれども、と、つらねし上の句、梅の花は花の兄、我が國とは、我が本國奥州の兄ならんとの詞の割符、兄弟一致の此の血判に、白旗をけがせしは、源氏調伏の下心。此の上にも返答あるや、何と〳〵。」と差し付けられ、貞任無念の牙を嚙み、逆立つ髪は冠を貫き、怒りの大息ほつとつき、「エ、口惜しやなあ、我一旦浪人となつて、都の樣子を窺ひしが、官位なくては大内へ入り込まれずと、流人赦免の折を幸ひ誠の敎氏は先だつて病死せしを、我なりと僞つて遂に逢はぬ舅儛杖、けふ始めての對面に情らしく見せかけて、腹切らしたは詮議の種の、一通をとらん爲。所詮謀空しくなれば、親の敵八幡太郎相手向ひの勝負して、運を一時に決せん。」と、太刀に手をかけ詰め寄れば、「ハ、ァせいたりな貞任、汝獅子王の勢ひありとも、八方に敵を受け一人の力に及ばんや。又其方が一命は環の宮と寶劍の所在、責むるともよも白狀せじ、術を以て搜し出す夫れまでは、いつまでも助け置く。命ながらへ時節を待つて、戰場の勝負はなぜせぬぞ。いま犬死して親賴時が、大望は無にするか、弓矢の情は相互、夫婦の操も節義は一つ、貞心厚き袖萩が、最期の際に一言は、妻子に詞もかけよかし、殿乞ゑ。」と仁愛に

「なう懷かしの貞任殿、最前からよう似た聲とは聞きながら、餘り思ひがけもない、六年ぶりで廻り合ひ、顏見る事も叶はぬか。死ぬる今はにちよつとなと、此の目が明きたいコレお君。」「父樣なう。」と稚子を、見るに遺の貞任も、恩愛の涙はら〳〵〳〵。大將あはれみ思召し、「てゝ親の緣切れたるお君、義家が子に養はん。」と、仰せに儛杖有り難涙、「いかなれば某は、敵と味方を壻に持つ、因果も思ひ廻らせば、代々不和なる源平を、先祖に背いて緣組んだ、我が誤りを白旗の、此の白梅を血に染めて、元の平家の寒紅梅、娘。」「父上いざ一所に。」「壻殿さらば。」「我が夫さらば。」「儛杖殿。」「姉樣なう。」と別れの涙、母の袂も敷妙も、一度にわつとぬるゝ袖、御大將も直垂の、袖射削つて餘りの矢先、竹に忽ちすつくと宗任、「最前見遁し歸りしは、兄弟本意を遂げん爲、優曇花まさりの親の敵、サ、、、勝負々々。」と詰めかくるを、「貞任しばし。」と押し留め、「晉の豫讓は衣をさく、八幡とは八つの幡、此の白幡をまつ此のごとく手に取れば、八幡が首提げんは案の内、敷妙の身には大切な、夫婦の緣を繼目の旗、ソレ大事に召され濱ゆふ。」と、渡すは舅のはた天蓋、「舅が最期に魂を、翻した る梅花の赤旗、我が家の旗諸共に、奥州に押立て〳〵、父賴時が弔ひ軍、一まづ此の場は宗任來れ。」「ハツァ實に尤も兄者人、雪持つ笹は源氏の旗竿、一矢射たるは當座の腹いせ、首を洗うて義家お待ちやれ。」「オ、〳〵互に戰場々々、夫れは重ねて、まづ眼前に朝敵の安倍貞任生拂つて面縛させん、

といふは表、其の裝束を其の儘に、桂中納言敎氏卿御苦勞ぞう。」と式禮に、おさらばさらばと敵味方、著する冠裝束も古鄕へ歸る袖袂、かりの翅の雲の上、母に別れて稚子が、父よと呼べばふり歸り、見やる目元に一時雨、ぱつと枯葉のちり〳〵嵐、心よわれど兄弟が、また取り直す勇み聲、よるべ涙に立ちかねて、幾重の思ひ濱ゆふが、身にふる雪の白妙に、なびく源氏の御大將、安倍貞任宗任が、武勇は今に隱れなし。

第四

道行千里の岩田帶

傾城の、癪は誠の置き所、世界の客へそら言も、一人に盡す眞實の、戀の中なる戀絹が、寢姿恥ぢぬ中となる、其のこしかたの通ひ路は、花車のかけ橋渡り初め、生駒の手綱せきとむる、轡の關を打ち越えて、今は女夫の藥賣り、わらぢにかくす八文字、おろせ頼まぬ日傘、さして行方は陸奥國、睦月に出でし都の空、谷の初聲聞き初めて、彌生は花の生まれ月、うしや櫻の顏隱す、霞をはらふ春風を、仇とは誰がいひ初めて、草のはつかに解く紐の、結ほれ合ひし朝寢髪、しんきらしいも命かや。人目堤に荷をおろし、家傳葛城神靈丹、御用はござんせぬか、お求めなされ買ひなさんせと賣聲も、遒それしやの身なれども、迷ふは木々や若草に、つまこふ蟲のこゑなくて、けはひ　谷泉はがせしくれの蝶、泊り定めぬ浮世はなんの、眞間の入江を見渡せば、月は渚に乘りおくれ、浪より雲に入舟や、風に逆艪のさつ〳〵さ、さつととわたる鳥のこゑ、唄　鴈金よ其の玉章はたが文ぞ、戀の宛名はたゞ一人、越のしら山ふる里よりも、月につれだちもてくる文を、花に別れて歸るは返事、オ、嬉し〳〵、オ、それ誠我もまた、かぶろ立ちから物馴れて、人のやりくり文づかひ、身に白絲をおり出す、瀧は流れを立てる身に、清き心をたゝう紙、野邊にそよ〳〵こちの人さまよ、オ、よい女房と戯れの、わりなき中も姫君に、未來の契り杯の、井筒にかけし生駒樣、我は裏見のたきさしに、いつかすかりと捨てられん。エ、去りとては浮世ぞや、いつそ此の身は此の儘に、黑髪山の墨染と、思ひ切るにも切れはせで、此の世許りの女夫とは、ほんに結ぶの神さんも、粹の樣にもない事と、ばかな女のかこち言、妹脊のねぐら夕風に、ぱつと立つたる雀の宮、竹に緣ある源を、守る誓ひはたゞ頼め、標茅が原のさしもぐさ、我が一命のあらん限りは、御あり家尋ね出して大君を、再び都へきつれ川、吉左右清き道の邊の、清水流るゝ柳かげ、暫しとてこそ　三重やすらひぬ。東山道の國の果て、陸奥一國の出入りを改め、非常を示す白川の、關の守りは瓜割四郎、一人權威をつく棒さす股、ことぢに通ふ鴈金まで、赦さぬ道の關の戸は、嚴重にこそ見えにけり。生駒夫婦は關所とも、いさ白川の番所の前、

通りかゝれば下部共、「ヤア慮外者めら、爰をどこだと思ふ。瓜割四郎樣の堅めの關所、笠をぬいでかつつくばひ、どれからどれへ參る者と斷つて通りをらう。」と、留められて戀絹が、瓜割四郎と聞き驚き、猶顏隱し行き過ぐる。「ヤア胡亂者遁すな。」と、立ち寄る下部を生駒之助「ア、申し〳〵、胡亂な者ではござりませぬ、御覽の通り我々は藥賣り、伊達な所を目印に、賣り弘むるとは申しながら、あの日笠で顏隱さねば、口上の一口も得申さぬが女だけ、顏隱すが癖となつて、關所とも憚らぬ不調法何事も女だけと御用捨なされ、お通しなされて下さりませ。」と、いひくろむれば瓜割四郎「ヲ、聞き屆けし女商人へ用はない、早く通れ。」と、赦す詞に二人は嬉しく、笠傾け立ち出づる、戀絹が手をしつかと取り、「イヤそもじ許りはいつまでも爰に留める、生駒之助に用はない、戀絹置いて早く通れ。」と、いふに夫婦が恟りし、「スリヤ私等を見違へもせず、お前はよう覺えてか。」「覺えてかとは曲がない、深山烏も白鷺も、我が妻鳥は知る物を、縱ひ姿はかはつても、見ちがへてよい物か。爰で逢うたは盡きせぬえにし、是れから我らが宿の奥樣、何と憎うはあるまいが。」と、よれつもつれつよねんなく、恥を恥とも思はぬ赤頰、抱き付いたは山蜂が、花の露吸ふ如くなり。「ヤア尾籠至極。」と四郎を取つて突き放し、「昔は昔今は志賀崎生駒が女房、望みならば汝が首と、替物せん。」と呼ばはれば せゝら笑ひ、「ヤア素浪人の分際で、しやらくさい女房呼ばはり。戀絹に汝が首、添へてこうちへ受取らう。」と、いふよりはやく切つてかゝる。心得たりと身をかはし、腕首取つて引つくり返し、骨も折れよと踏み付け〳〵、踏み付けられて半死半生、「ヤア主に敵たふ慮外やつ、ソレ遁すな。」と數多の下部、一度に拔いて切つて懸る。「オ、しをらしい蠅蟲共、うぬらも主の相伴。」と、片手なぐりに切りまくられ詞にも似ずちり〳〵に逃ぐるを追つて生駒之助、「コレなうあぶない長追ひ無用。」と、呼ばはり〳〵戀絹も、跡に續いて走り行く。一人殘つて瓜割四郎、心は彌猛とはやれども、足も體もぐにや〳〵と、ところてん見るごとくにて、立ちも得やらぬ有樣は、目も當てられず哀れなり。かかる折から賣り來る、「藥は町中評判のあんぽん丹、御用ござりませぬか。何にきくともきかぬとも、しらぬ所があんぽん丹。御用とござれば一貝が三十二錢、半貝が十六錢、心見と申すが僅か八錢。あんぽん丹御用ござりませぬか。」と賣聲聞いて、「コリヤ〳〵藥屋、先づ〳〵待て。」と呼び留め、「身共が事は瓜割四郎というて、此の關所の役人なるが、いかなる過去の報いにや、すは合戰に赴かんとすれば、忽ち五體ぐにやと痿え、コレ此の通りぐにやと痿え、心許りをいらつといへども、提灯で餅つく如く、かいもくとんと役に立たぬ。なんと體がしやつきりとなる、藥があらば求めたし。」と、世にも哀れに問ひかくれば、「コレハ〳〵お前はきつい仕合者、抑此のあんぽん丹と申すは、一名を長名丸と申して、其の樣に氣許りせいて、何の役に立たぬ人に、此の藥を用ゐれば、忽ち五體鐵石のごとく、譬へば強敵入

り替つて合戰すとも、ちつともよわみを喰はぬが名方、先づ心見に一貝上つて御らうじませ。」と、小さい錫の器物、取り出して手に渡せば、嬉しげに指先に、付けて一口呑むよと見えしが、むつくりしやつきりすつくと立つて、「あらふしぎや、此の藥我がのんどを過ぎるやいなや、忽ち五體ひり〳〵として、其のあつき事火焰のごとく、筋骨共に節くれ立つたる心地よさ。ハア、誠や、氣は陰にして其の色白し、陰中の陰今變易して、紫の色を顯はす事偏に此の藥の德にあり、ハア、權妙なりふしぎなり。」と、めつたに虛空を睨み付け、諸手を組んで立つたる有樣、「なんと奇妙でござりましよが。まだ責道具が入るならば、具足なりと兜なりと、鉢卷もござります。申し其のかはりに、必ず茶をあがると元の通りにぐにやつきますぞ。」「オ、過分々々。」と代物渡せば藥屋は、箱をかたけて別れ行く。始終の樣子をとくよりも、もどりかゝつて立ち聞く二人、戀絹が耳に口、何やら呼き生駒之助、元の所へ立ち忍べば、戀絹態とおろ〳〵聲、「生駒之助樣いなう。」と、呼ばはり〳〵うろ〳〵と、尋ねさまよひ四郎にばつたり、「オ、こは誰ぢや。」と立ち退けば、しがみ付き、「イヤこはい者ぢやない、只居より四郎ぢや〳〵、そもじを待つて最前から、しやきばつて居るわいの。」と、餘念のないを見て取るそれしや、「オ、お前なら恟りはせぬわいな、誰ぢやと思うてつかへが上つて、あいた〳〵。」と胸撫でさすれば、「何とした〳〵、癪でも痛むか、藥やらう。」と紙入より黑丸子、「ア、まうしお慮外ながら、水でもあらば一口呑まして下さりませ。」「イヤ〳〵水は毒だ、茶を呑まさう。」と番所より、茶瓶と茶椀持つて出で、「コレ一口。」と差し出せば、「ア、申しぬるいやら熱いやら、呑んで見てくれたがよい。」と、氣を持たされて、「實にも〳〵、我等が呑みさし呑む氣ぢやの、コリヤ忝い。」とぐつと一息、呑むと其の儘ア、〳〵〳〵と、いふより早く體は忽ちぐにや〳〵〳〵、たわいやくたい並木の陰を、立ち出づる生駒之助、「さつてもきついうつそりめ、汝がほんのあんぽん丹、付けう藥のないやつ。」と、どつと一度に打笑ふ。折から又も追ひくる人音、とてもの事に跡腹の、痛まぬ樣にしていこと、上張ぬいでてつ取り早く、瓜割四郎に打著せ〳〵、暫し木影に立ち忍べば、引き返す數多の家來、「ソレ最前の藥屋め、遁すなく〻れ。」と衣裝を目宛、大勢寄つて手取り足取り、騷ぎ立つたる隙間を考へ、時分はよしと戀絹夫婦、跡をも見ずして三重遁れ行く。寒林に骨を打つ靈鬼、深野に花を供ずる天人、風漂茫たる安達が原、鄰る家なき一つ家の、軒の柱はすね木の松、己が氣儘にまとはるゝ、蔦は逆立つ鱗の如く、いづれの工か青龍の、形を削りなせしかと、さも物凄き破屋に、住み馴れ居馴れ手馴れたる、かせの車やわくらばに、來る人稀の黃昏時、「御無心ながら煙草の火、一つ借して下さりませ。」と、笠を片手に旅の者。老女は夔をくりやめて、「オ、暮れるまであるかしやますは、何ぞ過急の御用か。」「ア、ちつと急ぎのかはせ銀、福島まで持つて行く者ぢやが、暮れるので氣がせきます。」「何ぢ

やかはせ銀を持つて行くのぢや、アノ銀をや。オ、此の物騒な安達が原、追剝に出合はぬ樣に、用心していかしやませ。」と、いはれて此方は悔り顏、「アノ追剝が出ますかの。」「オ、出るとも〳〵、昨日もちやうど今時分に、アレ向うの森の中で殺された人がある。」「ヤア。」といふより身はがた〳〵、「申しかみ樣、我等生まれついて其の追剝がきつい禁物、何卒今夜は爰の内に泊らして下さりませ。」「いやなう、其の樣な銀持つた人を、こちの内に留めてはマア、氣が張つて夜がねられぬ。」「サアそこがお情お慈悲はかみ樣。」「ハテ夫れ程こはか留めてしんぜう。」「ハイ〳〵夫れは近頃忝い。」と、草鞋といて上り口、「ヤレ〳〵嬉しや、是れで心が落著いた。」「イヤめつたに落著かしやんな、爰に泊つてもこなたの懷に銀が有ると、又追剝が來をろもしれぬ、其の銀ばゝが預りましよ。」「イヤ夫れは。」「ハテ扨惡い事はいはぬ。」と、手を差し入れて引出す財布、それ渡してはと確乎と握り、「おばゝこりやわごりよが剝ぎやの。」「何のいの預つてやるのぢや。」と、財布持つ手に兩手をかけ、引けば此方も門口の、柱を片手にひんだかへ、引いつひかるゝ力に腕すつぽりと、拔けて尻居にへたばる老女、「コリヤおれを殺すか。」と、よろめく旅人を打ち倒し、のつかゝつて喉へ、ほうど喰ひ付き喰ひ殺す、老女の業ぞ恐ろしき。ア、嬉しやと疊を上げ、死骸を蹴落し口のはた、のごふ血汐の腕取り上げ、「エエしぶといまだ財布放しをらぬ。アゝ儘よ、腕ぐち取つて置かう。」と、苧桶の底へ取り納め、奥又繰り返す絲よりも、頭のをがせかき亂す、草に育てど草ならぬ、花は鄙でも都でも、可愛らしさと憎さけは、跡から付いてあんほん丹、聲替りのした大前髪、「コレ〳〵お娘こりやどこまで連れていかんすのぢや。日は暮れる、幸ひ人のこぬ安達が原、此の草村でついちよこ〳〵、祭の太鼓打ち了はんと、いきつた撥の納めばがない、サア〳〵爰で。」とはないきも、「オ、せはしな、まだ暮れ切らぬ薄明り、誰そが見たら恥かしい、袖の振り合ふも他生の縁と、今來る道でお近付になり、此の片遠所まで送つて貰うたお前、私が使に行く家も、もう爰ちつとの間。門口に待つて居て下さんせ、つい口上いうて出て戻る、其の内には暗うもなり、ハテどうなりとお前次第。」と、跡は得いはず顏赤らめ、袖うち覆ふふおぼこ氣に、現ぬかして、「そんなら爰に待つて居る、必ず早う戻ろぞや。」と、門にすつくり松の木だち、娘は内へ入口の、戸を押し明けて、「アイ今歸りましてござんす。」と、いふに主が不興顏、「私にもしらさず出あるいて、日の暮れるまでどこにはひつてござりました。大事の身を持ちながら、大膽な一人あるき、嗜ましやませ。」とつこうども、如在ない氣を呑みこんで、「サア私もお前にいうてからと思うたれど、又供の人雇ひのと、世話になるが氣の毒さに、沙汰なしにいて來たわ。ソレ今のナ、御病人の御願やら何やらかやらの神參り、重ねてからは斷つて參りませう。もう堪忍して下さんせ。」と、斷り聞いて心も折れ、「ハテ神參りとあれば何の否と申しませう。此の樣にとか〳〵いふもお前の